

香川県警察高松北警察署建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

高松城跡

2018.3

香川県教育委員会

序 文

本書には、香川県警察高松北警察署建設工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市西内町(にしうちちょう)の高松城跡(たかまつじょうあと)の報告を収録しています。

今回の調査地は高松城の中堀と外堀の間にある武家屋敷の一角に相当します。調査の結果、屋敷地を区画する溝が見つかりました。これらの区画溝は絵図史料に残る屋敷地割と照らし合わせることが可能であり、当時の屋敷地割を復元する新たな資料を得ることができました。

また、大型土坑から陶磁器類や瓦類、木製品、食物残滓等多様な遺物が多量に出土しており、これらは当時の上級武士の生活を知る重要な資料になります。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関係者各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

香川県埋蔵文化財センター
所長 増田 宏

例　　言

1 本報告書は、香川県警察高松北警察署建設に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市西内町に所在する高松城跡（たかまつじょうあと）の調査成果を収録した。

2 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 平成10年4月1日～平成10年6月30日

担当 文化財専門員　岡本　利　　文化財専門員　山元　素子

4 調査に当たっては、次の方々、関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県警察、地元各自治会、地元各水利組合、高松市歴史資料館、国立国会図書館、広島市立中央図書館、香川県立ミュージアム、公益財団法人鎌田郷土資料館、御厨義道、鈴木裕子（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は山元素子が担当した。

出土漆器資料の調査については龍谷大学の北野信彦氏に、動物遺存体の同定については広島大学総合博物館の石丸恵理子氏に玉稿を賜った。

6 本報告書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第IV系）で、方位の北は国土座標第IV系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SP 柱穴 SD 溝 SE 井戸 SK 土坑 SX 性格不明遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。

10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の固化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 遺物の時期等については主に次の文献を参照し、本文中の分類、様相名はこの編年に換った。

在地土器、陶磁器及び瓦

佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」「出土瓦の検討」「サンポート高松総合整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

松本和彦 2003「西ノ丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター

備前焼擂鉢

乗岡実 2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査－』岡山市教育委員会

陶磁器

九州近世陶磁学会 2000.2「肥前(佐賀県)の製品について」『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』

本文目次

第1章	調査の経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第3節	調査体制・整理体制	2
第2章	遺跡の立地	
第1節	地理的・歴史的環境	3
第2節	これまでの調査	3
第3章	調査の成果	
第1節	調査の方法	7
第2節	土層	7
第3節	遺構・遺物	7
第4章	自然科学分析	
第1節	高松城跡（高松北警察署）出土漆器資料の材質・技法に関する調査	125
第2節	高松城跡（高松北警察署）出土の動物遺存体からみた上級武士の動物資源利用	133
第3節	高松城跡（高松北警察署）出土金属製品の材質分析	170
第4節	高松城跡（高松北警察署）出土の大型植物遺体	176
第5節	高松城跡（高松北警察署）出土木材の樹種同定	180
第6節	高松城跡（高松北警察署）出土木製品の樹種調査結果	188
第7節	高松城跡（高松北警察署）に係る樹種同定結果	198
第5章	まとめ	
第1節	絵図資料との対比	203
第2節	遺構の変遷	212
第3節	木製品について	218
第4節	SK24 出土遺物について	224

挿図目次

第1図	道路位置図	1
第2図	周辺の調査地及び関連する遺跡	4
第3図	調査位置図及び周辺の現状地割	6
第4図	西壁土層断面図	8
第5図	造構配置図	9～10
第6図	東壁土層断面図	11
第7図	南壁土層断面図(1)	12
第8図	南壁土層断面図(2)	13
第9図	SP12・SP20・SP45・SP46・SP52・SP65 平・断面図、出土遺物	14
第10図	SD01平・断面図、出土遺物	15
第11図	SD02-1・SD02-2平・断面図、出土遺物	16
第12図	SD04平・断面図	18
第13図	SD04出土遺物(1)	19
第14図	SD04出土遺物(2)	20
第15図	SD04出土遺物(3)	21
第16図	SD05平・断面図、出土遺物	22
第17図	SD06平・断面図	23
第18図	SD07平・断面図、出土遺物	23
第19図	SD08平・断面図、出土遺物	24
第20図	SD09平・断面図、出土遺物(1)	25
第21図	SD09出土遺物(2)	26
第22図	SD10平・断面図	27
第23図	SE01平・断面図	28
第24図	SE01出土遺物	29
第25図	SE02平・断面図	31
第26図	SE02出土遺物(1)	32
第27図	SE02出土遺物(2)	33
第28図	SE03平・断面図、出土遺物(1)	35
第29図	SE03出土遺物(2)	36
第30図	SE04平・断面図	37
第31図	SE04出土遺物(1)	38
第32図	SE04出土遺物(2)	39
第33図	SE04出土遺物(3)	40
第34図	SE04出土遺物(4)	41
第35図	SE05平・断面図	42
第36図	SE05出土遺物	43
第37図	SE06平・断面図、出土遺物(1)	44
第38図	SE06出土遺物(2)	45
第39図	SE07平・断面図	46
第40図	SE07出土遺物(1)	47
第41図	SE07出土遺物(2)	48
第42図	SE07出土遺物(3)	49
第43図	SE07出土遺物(4)	50
第44図	SE07出土遺物(5)	51
第45図	SE07出土遺物(6)	52
第46図	SE07出土遺物(7)	53
第47図	SK01平・断面図、出土遺物	55
第48図	SK04平・断面図、出土遺物	55
第49図	SK07・SK08平・断面図、出土遺物	56
第50図	SK10平・断面図	57
第51図	SK10出土遺物(1)	58
第52図	SK10出土遺物(2)	59
第53図	SK11平・断面図、出土遺物(1)	60
第54図	SK11出土遺物(2)	61
第55図	SK12平・断面図	63
第56図	SK12出土遺物(1)	64
第57図	SK12出土遺物(2)	65
第58図	SK12出土遺物(3)	66
第59図	SK13平・断面図	67
第60図	SK14・SK15平・断面図、出土遺物	68
第61図	SK16平・断面図、出土遺物	69
第62図	SK17平・断面図	69
第63図	SK18平・断面図、出土遺物	70
第64図	SK19平・断面図	71
第65図	SK20平・断面図、出土遺物	71
第66図	SK21平・断面図、出土遺物	72
第67図	SK22平・断面図	73
第68図	SK23平・断面図	74
第69図	SK23出土遺物(1)	75
第70図	SK23出土遺物(2)	76
第71図	SK23出土遺物(3)	77
第72図	SK23出土遺物(4)	78
第73図	SK23出土遺物(5)	79
第74図	SK23出土遺物(6)	80
第75図	SK23出土遺物(7)	81
第76図	SK23出土遺物(8)	82
第77図	SK23出土遺物(9)	83
第78図	SK23出土遺物(10)	84
第79図	SK23出土遺物(11)	85
第80図	SK23・SE02上面出土遺物	87
第81図	SK24・SK25平・断面図	88
第82図	SK24出土遺物(1)	90
第83図	SK24出土遺物(2)	91
第84図	SK24出土遺物(3)	92
第85図	SK24出土遺物(4)	93
第86図	SK24出土遺物(5)	94
第87図	SK24出土遺物(6)	95
第88図	SK24出土遺物(7)	96
第89図	SK24出土遺物(8)	98
第90図	SK24出土遺物(9)	100
第91図	SK24出土遺物(10)	101
第92図	SK24出土遺物(11)	102
第93図	SK24出土遺物(12)	103
第94図	SK24出土遺物(13)	104
第95図	SK24出土遺物(14)	105
第96図	SK24出土遺物(15)	106
第97図	SK24出土遺物(16)	107
第98図	SK24出土遺物(17)	108
第99図	SK24出土遺物(18)	109
第100図	SK24出土遺物(19)	110
第101図	SK24出土遺物(20)	111
第102図	SK24出土遺物(21)	112
第103図	SK24出土遺物(22)	113
第104図	SK24出土遺物(23)	114
第105図	SK24出土遺物(24)	115
第106図	SK24出土遺物(25)	116
第107図	SK24出土遺物(26)	117
第108図	SK24出土遺物(27)	118
第109図	SK24出土遺物(28)	119
第110図	SK24出土遺物(29)	120
第111図	SK25出土遺物	121
第112図	SK24・SK25上面出土遺物	122
第113図	SX03平・断面図、出土遺物	123

表 目 次

第 114 図 SX28 平・断面図	123
第 115 図 造構外出土遺物	124
第 116 図 漆塗り構造部分類	129
第 117 図 漆の使用顕料	130
第 118 図 出土貝類の造構別個体数比	142
第 119 図 出土魚類の造構別個体数比	142
第 120 図 出土爬虫類・鳥類・哺乳類の造構別個体数比	142
第 121 図 調査位置図および周辺の現状地割	204
第 122 図 造構変遷図(1)	213
第 123 図 造構変遷図(2)	214
第 124 図 高松城跡(西ノ丸町地区)との位置関係(1)	215
第 125 図 高松城跡(西ノ丸町地区)との位置関係(2)	216
同定表(2)…	200
第 31 表 高松城下絵図一覧	211
第 32 表 塗器一覧	218
第 33 表 布皿または蓋一覧	219
第 34 表 折敷脚部一覧	220
第 35 表 梯一覧	221
第 36 表 箸・チュウ木一覧	221
第 37 表 木簡一覧	222
第 38 表 下駄一覧(1)	223
第 39 表 下駄一覧(2)	223
第 40 表 土器観察表(1)	226
第 41 表 土器観察表(2)	227
第 42 表 土器観察表(3)	228
第 43 表 土器観察表(4)	229
第 44 表 土器観察表(5)	230
第 45 表 土器観察表(6)	231
第 46 表 土器観察表(7)	232
第 47 表 土器観察表(8)	233
第 48 表 土器観察表(9)	234
第 49 表 土器観察表(10)	235
第 50 表 土器観察表(11)	236
第 51 表 土器観察表(12)	237
第 52 表 土器観察表(13)	238
第 53 表 土器観察表(14)	239
第 54 表 土器観察表(15)	240
第 55 表 土器観察表(16)	241
第 56 表 土器観察表(17)	242
第 57 表 土器観察表(18)	243
第 58 表 土器観察表(19)	244
第 59 表 土器観察表(20)	245
第 60 表 土器観察表(21)	246
第 61 表 土器観察表(22)	247
第 62 表 土器観察表(23)	248
第 63 表 土器観察表(24)	249
第 64 表 土器観察表(25)	250
第 65 表 土器観察表(26)	251
第 66 表 土器観察表(27)	252
第 67 表 土器観察表(28)	253
第 68 表 軒丸瓦観察表(1)	254
第 69 表 軒丸瓦観察表(2)	255
第 70 表 軒丸瓦観察表(3)	256
第 71 表 軒丸瓦観察表(4)	257
第 72 表 軒丸瓦観察表(5)	258
第 73 表 軒平瓦観察表(1)	258
第 74 表 軒平瓦観察表(2)	259
第 75 表 軒平瓦観察表(3)	260
第 76 表 軒平瓦観察表(4)	261
第 77 表 軒平瓦観察表(5)	262
第 78 表 軒平瓦観察表(6)	263
第 79 表 九瓦観察表(1)	263
第 80 表 九瓦観察表(2)	264

第 81 表	丸瓦観察表 (3)	265
第 82 表	平瓦観察表 (1)	265
第 83 表	平瓦観察表 (2)	266
第 84 表	平瓦観察表 (3)	267
第 85 表	平瓦観察表 (4)	268
第 86 表	軒瓦観察表	269
第 87 表	鬼瓦観察表	269
第 88 表	鰐観察表	269
第 89 表	石器観察表	269
第 90 表	金属器観察表	270
第 91 表	木器観察表 (1)	271
第 92 表	木器観察表 (2)	272
第 93 表	木器観察表 (3)	273
第 94 表	木器観察表 (4)	274
第 95 表	木器観察表 (5)	275
第 96 表	木器観察表 (6)	276

写真目次

写真 1	代表的な樹種の顕微鏡写真	131
写真 2	漆塗り構造の観察; 木胎 + 炭化下地 + ベンガラ漆	132
写真 3	漆塗り構造の観察; 炭粉下地 + サビ下地 + 朱漆	132
写真 4	漆塗り構造の観察; 炭粉下地 + 赤褐色系漆 + 朱漆 (色鉛)	132
写真 5	漆塗り構造の観察; 布着せ補強 + サビ下地 + 朱漆 + サビ下地 + 朱漆 + 朱漆	132
写真 6	動物遺存体 鱗足綱	165
写真 7	動物遺存体 二枚貝綱	166
写真 8	動物遺存体 軟骨魚綱	166
写真 9	動物遺存体 硬骨魚綱 (1)	166
写真 10	動物遺存体 硬骨魚綱 (2)	167
写真 11	動物遺存体 蜜虫綱	167
写真 12	動物遺存体 鳥綱	168
写真 13	動物遺存体 哺乳綱	169
写真 14	金属製品の元素マッピング図 (1)	172
写真 15	金属製品の元素マッピング図 (2)	173
写真 16	金属製品の元素マッピング図 (3)	174
写真 17	金属製品の元素マッピング図 (4)	175
写真 18	高松城跡 (高松北警察署) SK23から出土した 大型植物遺体	179
写真 19	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 光学顕微鏡写真 (1)	186
写真 20	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 光学顕微鏡写真 (2) - 走査型電子顕微鏡写真 ..	187
写真 21	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (1)	191
写真 22	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (2)	192
写真 23	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (3)	193
写真 24	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (4)	194
写真 25	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (5)	195
写真 26	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (6)	196
写真 27	高松城跡 (高松北警察署) 出土木材の 顕微鏡写真 (7)	197
写真 28	樹脂含浸作業	198
写真 29	真空凍結乾燥	199
写真 30	生駒家時代譜高松城下敷割図	205
写真 31	譜州高松城之図	205
写真 32	諸国当城之図	205
写真 33	高松城下図屏風	207
写真 34	譜州高松城図	207
写真 35	日本東地図譜州高松地図	207
写真 36	享保年間高松城下図	209
写真 37	高松地図	209
写真 38	寛政元年己酉五月高松之図	209

図版目次

図版 1	全景 (東から)	SD08 土層断面 b-b' (南から)
図版 2	全景 (上空から)	SD09 土層断面 (南から)
図版 3	南壁土層 (西から 10 m 付近)SK12付近)	図版 7 SE01 土層断面 (西から)
	南壁土層 (西から 14 m 付近)SD022付近)	SE01 石組検出状況 (北から)
図版 4	南壁土層 (東から 6 m 付近)	SE02 土層断面 (西から)
	東壁土層 (北端付近)	SE02 井戸枠検出状況 (西から)
	西壁土層 (南端付近)	SE02 土層断面 (西から 2段目) (西から)
	西壁土層 (南から 13 m 付近)	SE02 井戸枠検出状況 (西から)
図版 5	SD02-1 土層断面 (南から)	SE03 土層断面 (西から)
	SD04 土層断面 a-a' (東から)	SE03 井戸枠検出状況 (東から)
	SD04 土層断面 c-c' (西から)	SE03 井戸枠検出状況 (西から)
	SD04 土層断面 d-d' (西から)	SE03 土層断面 (南から)
図版 6	SD08 土層断面 a-a' (南から)	図版 10 SE04 土層断面 (南から)
	SD08 土層断面 c-c' (北から)	SE04 井戸枠検出状況 (南から)
	SD08 石組溝検出状況 (北から)	

	SE04	井戸柾検出状況(堺・竹)(南から)	図版 46	出土木器(9)
	SE04	井戸柾検出状況(最下段)(北から)	図版 47	出土木器(10)
図版 11	SE05	井戸柾検出状況(北東から)	図版 48	出土木器(11)
	SE05	井戸柾検出状況・土層断面(北から)	図版 49	出土木器(12)
	SE06	井戸柾検出状況(西から)	図版 50	生駒家時代譲岐高松城屋敷割図 譲州高松城之図
	SE06	土層断面(西から)		譲国当城之図
図版 12	SE07	井戸柾検出状況(北から)	図版 51	譲州高松城圖
	SE07	井戸柾検出状況(北から)	図版 52	高松城下図屏風
	SE07	土層断面(北から)	図版 53	日本輿地図譲州高松地図 享保年間高松城下図
図版 13	SK01	土層断面(西から)	図版 54	高松地図 寛政元年己酉五月 高松之図
	SK04	土層断面(東から)		
	SK11	土層断面(西から)		
図版 14	SK12	土層断面(東から)		
	SK12	土層断面(東から)		
	SK12	土層断面(南から)		
	SK12	土層断面(南から)		
図版 15	SK12(下層)	瓦出土状況(北から)		
	SK15	土層断面(西から)		
	SK15	瓦出土状況(西から)		
図版 16	SK18	土層断面(北から)		
	SK21	土層断面(北から)		
	SK22	土層断面(南から)		
図版 17	SK23	土層断面(東から)		
	SK23	土層断面(東から)		
図版 18	SK23	土層断面(北から)		
	SK23	土層断面(南から)		
図版 19	SK23	土層断面(東から)		
	SK23	土層断面(北東から)		
	SK23	土層断面(北から)		
図版 20	SK24	遺物出土状況(北から)		
	SK24	遺物出土状況(南から)		
	SK24	遺物出土状況(南から)		
図版 21	SK24	土層断面(西から)		
	SK24	土層断面(西から)		
	SK25	土層断面(西から)		
図版 22	出土土器・陶磁器(1)			
図版 23	出土土器・陶磁器(2)			
図版 24	出土土器・陶磁器(3)			
図版 25	出土土器・陶磁器(4)			
図版 26	出土土器・陶磁器(5)			
図版 27	出土土器・陶磁器(6)			
図版 28	出土土器・陶磁器(7)			
図版 29	出土土器・陶磁器(8)			
図版 30	出土土器・陶磁器(9)・石器			
図版 31	出土瓦(1)			
図版 32	出土瓦(2)			
図版 33	出土瓦(3)			
図版 34	出土瓦(4)			
図版 35	出土瓦(5)			
図版 36	出土瓦(6)			
図版 37	出土金属器			
図版 38	出土木器(1)			
図版 39	出土木器(2)			
図版 40	出土木器(3)			
図版 41	出土木器(4)			
図版 42	出土木器(5)			
図版 43	出土木器(6)			
図版 44	出土木器(7)			
図版 45	出土木器(8)			

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

香川県警察高松北警察署の移転工事に伴い、香川県教育委員会では平成8年に試掘調査を実施した。江戸時代の絵図によれば、移転地は上級武家屋敷が立ち並ぶ場所であったが、JR検診センター跡地であったことから構造物による大規模な攪乱が及んでいることが懸念された。しかし、試掘調査の結果江戸時代の遺構が残存することがわかり、構造物による攪乱の及んでいない900m²について文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断された。

平成10年4月1日付で香川県教育委員会と財團法人香川県埋蔵文化財調査センターの間で「埋蔵文化財調査委託契約」を締結した。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

高松城跡（高松北警察署）の調査は、平成10年3月に表土掘削のみを行い、発掘調査は平成10年4月1日～6月30日に実施した。

整理作業は平成28年8月1日～11月30日に実施した。遺物の実測・浄書の一部については株式会社イビソクに委託した。

第3節 調査体制・整理体制の体制の経過

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

平成10年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会文化行政課			財團法人香川県埋蔵文化財調査センター		
範括	課長 小原 克己	範括	所長 香原 良弘		
	課長補佐 北原 和利		次長 小野 喬範		
範務	係長 中村 順伸	範務	監事 別枝 義昭		
	主査 三宅 陽子		副主幹 兼係長 田中 秀文		
	主査 松村 駿史		主査 長尾 寿江子		
			主査 新 一郎		
			主査 林 照代		
			主事 織川 信哉		
埋蔵文化財	副主幹 渡部 明夫	調査	主事 長尾 重光		
	係長 西村 審文		主任文化財専門員 大山 真光		
	主任技師 瑛崎 誠司		主任文化財専門員 齋藤 政郎		
			文化財専門員 吉岡 利		
			文化財専門員 山元 素子		
			調査技術員 通井 理加		

平成28年度整理作業体制一覧表

香川県教育委員会生涯学習・文化財課			埋蔵文化財センター		
範括	課長 小柳 和代	範括	所長 増田 宏		
	副課長 片桐 孝浩		次長 森 格也		
範務・生涯学習推進 グループ	副主幹 松下 由美子	範務課	課長（兼） 森 格也		
	主事 和木 麻佳		副主幹 斎藤 政好		
文化財グループ	課長補佐（兼） 片桐 孝浩		主任 寺岡 仁美		
	主任文化財専門員 山下 平重		主任 丸尾 真知子		
	主任文化財専門員 乗松 真也		主任 岩崎 昌平		
		資料普及課	課長 古野 勝久		
			文化財専門員 山元 素子		
			嘱託 齋藤 真理		
			嘱託 甲斐 美智子		
			嘱託 高橋 千恵		
			嘱託 正本 由紀子		
			嘱託 森 后代		

第2章 遺跡の立地

第1節 地理的・歴史的環境

高松城跡は瀬戸内海に面した高松平野の中央北端部付近に位置する。高松平野は西から南側に五色台へと続く山地、東側は立石山山地により囲まれ、香東川をはじめ本津川、春日川、新川等の河川により運ばれた土砂の堆積物により形成された扇状地である。高松市街地は扇状地の末端に形成された三角州帯であり、香東川の旧河道と砂堆が認められる。周辺の地形復原や発掘調査の成果から、高松市街地は旧河道に挟まれた微高地であった可能性があり、この微高地は高松城周辺でもっとも海側へ広がっていたとみられる。

高松城下付近で古代以前の遺構はほとんど認められない。

平安時代後期にはこの地域が野原郷と呼ばれたようで、応徳3年(1086)に白河天皇の退位に伴い、野原郷内の勅旨田が立券されて野原庄が成立したことが資料に残される。康治2年(1143)の太政官牒案によれば、野原庄の四至が条里によって表記されており、条里呼称がこの地域まで及んでいたことがわかる。

文安2年(1445)の「兵庫北関入船納帳」には兵庫北関に入船した多くの讃岐船が記載されるが、「野原」を船籍地とするものがみられ、港町としての機能を併せ持ったと考えられる。高松城跡(西の丸町地区)の発掘調査では、11世紀後半～13世紀前半の、高松城築城以前の港湾施設と考えられる礫敷き遺構が見つかり、交易品と考えられる土器・陶磁器類が多量に出土し、この頃から港町として繁栄したことがわかった。また、高松城跡(西の丸町地区)の西に隣接する浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺をはじめ交易によりもたらされた他地域の陶磁器類が多く出土する、13世紀末～15世紀末の都市的な様相を持つ集落が確認できた。高松城跡(寿町一丁目)では、16世紀に文献上でも存在が確認されている無量寿院に関連する遺構・遺物が見つかっている。中世の野原周辺が港町として栄えた様子が窺え、高松城築城にあたっての場所の選定にもこのような背景があったと考えられる。

高松城跡の地理的・歴史的環境については、『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊「高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ」2003.3香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 第2章』に詳しいので、参照されたい。

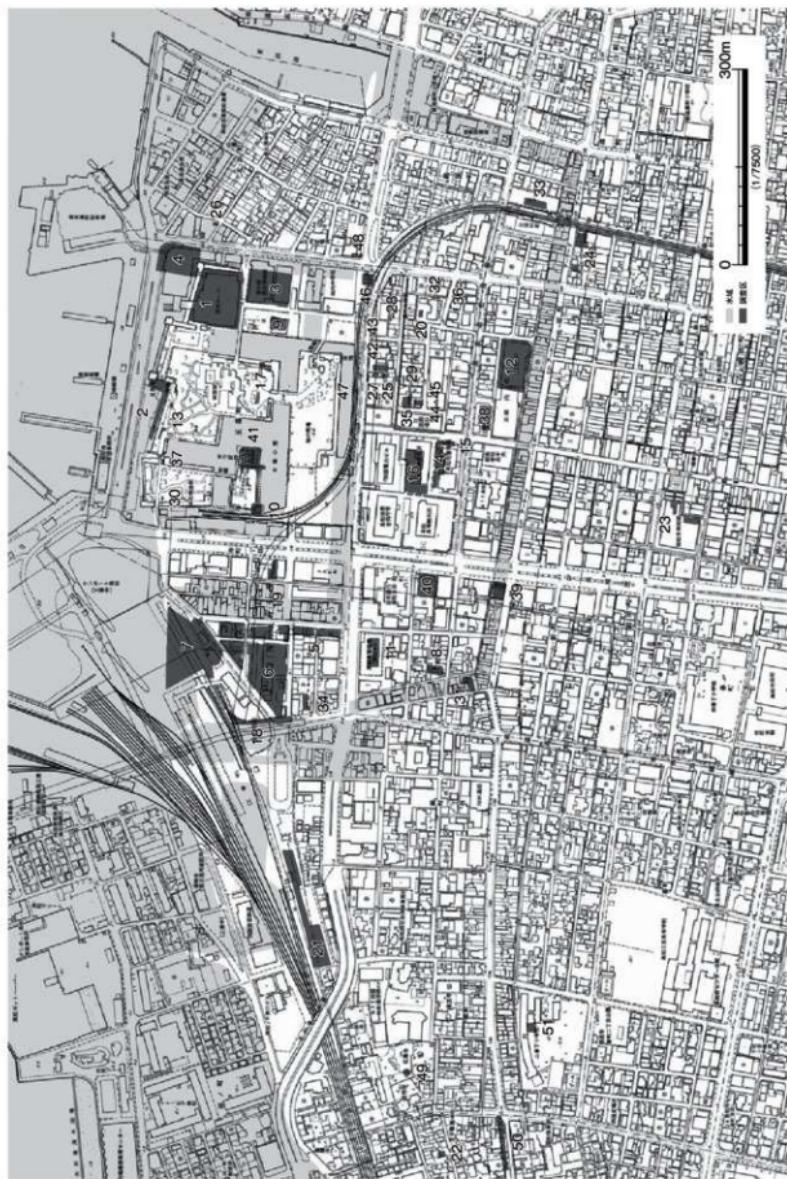
第2節 これまでの調査（第2図、第1表）

高松城下の発掘調査は、1985年の県民ホール建設予定地の調査を皮切りに香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センター、高松市教育委員会により進められてきた。

城内では、高松市教育委員会により玉藻公園の整備に伴い水手御門等の小規模調査が実施されてきた。平成9年度以降は城内の石垣修復に伴う調査が実施され、平成9～13年度には地久櫓台、平成17年度には鉄門、平成17～19年度には天守台石垣解体修理に伴う発掘調査が行われた。天守台の調査では、地下1階部分で「田」の字に並ぶ礎石と礎石により区切られた空間の中央で掘立柱の痕跡を確認し、天守の上部構造を知るうえで重要な成果を得ることができた。

東の丸では、県民ホール・アクトホール・香川県歴史博物館(現香川県立ミュージアム)建設に伴う

第2図 周辺の調査地及び関連する遺跡（高松市都市計画図No.20 高松市街に加筆）



番号	調査区名	調査原因	調査主体	調査期間	調査面積
1	県民ホール地点	県民ホール建設	県教委	1983.4.15 ~ 1986.5.31	6,047
2	水手御門	玉瀬公園整備	市教委	1990.5.14 ~ 1990.6.5	540
3	歴博地点	県歴史博物館建設	理文調査 センター	1994.4.18 ~ 1994.6.30 1996.4.1 ~ 1996.3.31	6,000
4	アクトホール地点	県民ホールアクトホール建設	県教委	1995.2.7 ~ 1995.5.31	225
5	西の丸町 A 地区	サンボート高松総合整備	理文調査 センター	1999.4.1 ~ 1999.6.23 2000.11.27 ~ 2000.12.22	670
6	西の丸町 B 地区	サンボート高松総合整備	理文調査 センター	1995.12.1 ~ 1997.3.31	4,539
7	西の丸町 C 地区	サンボート高松総合整備	理文調査 センター	1997.6.2 ~ 1997.7.29 1999.4.1 ~ 2000.3.31	10,652
8	西内町	香川県高等学校 PTA 会館建設	市教委	1997.7.10	47
9	作事丸	(財) 松平公益会事務所改築	市教委	1997.11.17 ~ 1997.12.26	300
10	地久橋	史跡整備	市教委	1997.12.3 1999.10.25 ~ 1999.11.26 2000.11.16 ~ 2001.2.19 2001.12.17 ~ 2002.2.27	174
11	高松北署地区	高松北警察署建設	理文調査 センター	1998.4.1 ~ 1998.6.30	900
12	内町	三棟床	市教委	1998.4.16	65
13	三の丸	史跡整備	市教委	1998.7.8 ~ 1998.8.11	14
14	丸ノ内地区	家庭裁判所	理文調査 センター	2001.4.1 ~ 2001.9.30	1,164
15	松平大膳上屋敷跡	新弁護士会会館建設	市教委	2002.2.1 ~ 2002.3.25	99
16	松平大膳上屋敷跡	新ヨンデンビル別館建設	市教委	2002.4.15 ~ 2002.8.31	970
17	三の丸、竜潜台北側	玉瀬公園整備	市教委	2002.10.7 ~ 2002.10.10	12
18	西の丸町 D 地区	サンボート高松整備事業	県教委	2002.10.10 ~ 2002.10.30	131
19	寿町一丁目(無量寿院跡)	都市計画道路高松駅南線建設	市教委	2002.11.28 ~ 2003.3.14	820
20		土地取引	市教委	2002.12.17	18
21	浜ノ町道路	サンボート高松総合整備	理文調査 センター	2000.2.15 ~ 2000.3.31 2000.4.1 ~ 2000.11.30 2001.10.1 ~ 2002.3.31	4,992
22	窟町一丁目道路	都市計画道路兵庫町西通町線建設	市教委	2001.10.11	93
23	組屋町道路	市立美術館建設	市教委	1985.10.28 ~ 1985.11.22	100
24	片原町道路	片原町駅西第3街区第1種市街地再開発	市教委	2000.6.15~16-22	120
25	丸の内	ビル建設	市教委	2002.11.28 ~ 2002.11.29	10
26	中郷、北浜町	共同住宅建設	市教委	2003.5.13	14
27	丸の内、	都市計画道路高松海岸線建設	市教委	2003.6.11	23
28	丸の内、再生活水管布設工事	再生活水管布設	市教委	2003.8.18 ~ 2003.9.22	296
29	丸の内、個人住宅建設	個人住宅建設	市教委	2003.8.25 ~ 2003.8.26	22
30	二の丸、	公園整備	市教委	2003.8.26 ~ 2003.9.4	10
31	玉瀬公園西門料金所整備工事	市教委	2003.10.8 ~ 2003.10.9	30	
32	外堀、西内町、共同住宅建設	共同住宅建設	市教委	2003.11.12 ~ 2003.11.19	50
33	東町奉行所跡	共同住宅建設	市教委	2003.12.8 ~ 2004.3.15	511
34	西の丸町	ビル建設	市教委	2004.7.13 ~ 2004.7.19	6
35	丸の内	ビル建設	市教委	2004.7.21	19
36	丸の内	個人住宅建設	市教委	2004.11.9	48
37	鉄門	史跡整備	市教委	2005.1.24 ~ 2005.8.19	62
38	既路	立体駐車場建設	市教委	2005.2.21 ~ 2005.5.12	511
39	外堀、長康町	ビル建設	市教委	2005.5.11 ~ 2005.5.12	320
40	寿町二丁目地区	ビル建設	市教委	2006.1.12 ~ 2006.3.28	550
41	天守台	史跡整備	市教委	2006.1.11 ~ 2008.8.31	1,530
42	江戸長屋跡 I	都市計画道路高松海岸線建設	市教委	2007.6.18 ~ 2007.7.31	84
43	江戸長屋跡 II	都市計画道路高松海岸線建設	市教委	2008.4.1 ~ 2008.4.28	70
44	丸の内	共同住宅建設(試験)	市教委	2008.11.19	4
45	丸の内	共同住宅建設	市教委	2009.3.2 ~ 2009.3.19	45
46	城内中学校	シールド掘進機発進立坑掘削	市教委	2009.4.9 ~ 2009.7.13	230
47	中郷南岸石垣	石積復旧工事	市教委	2009.10.16	3
48	本町	事務所建設	市教委	2010.2.16	32
49	生駒親正夫妻墓所	市教委	2005.10.26 ~ 2005.11.10	88	
50	窟町一丁目道路	都市計画道路	市教委	2009.5.1 ~ 2009.6.30	467
51	二番丁小学校道路	新設統合第二小学校建設	市教委		

第1表 高松城跡周辺の調査実績及び関連する遺跡（番号は第2図に対応）

発掘調査が実施された。東の丸の遺構や石垣・外堀の他、東の丸造営以前の武家屋敷や町屋、それらに伴う石垣が検出され、石垣が海の方へ向かって拡張する様子も明らかとなった。

中堀の西側、西の丸町地区では平成7~12・14年度にわたりサンポート高松総合整備事業に伴う大規模な調査が実施された。この調査では、北面する石垣を4列検出し、4度にわたり城下が徐々に海側へ広がる様子が明らかとなった。また、出土遺物と検出遺構面により時期が明らかになった遺構群と、当時の絵図資料と比較検討することで、各時期の城下の地割や屋敷地の様相が明らかになった。その他、高松城造営以前である11世紀後半~13世紀代の港湾遺構が検出され、搬入品を多く含む多量の遺物が出土した。外堀の西側約220m付近で調査を実施し、鎌倉~室町時代の流通にかかわる集落が見つかった浜ノ町遺跡とともに、築城以前には港町として繁栄した様子も明らかになった。

中堀の南側と外堀の間では、家庭裁判所建設・弁護士会館建設（丸の内地区）に伴う調査、都市計画道路建設、民間開発等に伴う調査などが実施され、高松平藩重臣である松平大膳家屋敷をはじめ、武家屋敷や東町奉行所、廻跡等の調査が行われ、絵図資料との比較により屋敷地割や街路の位置などの復元が行われている。

城外においては、紺屋町遺跡（高松市立美術館）、亀井戸の調査等により町屋の様子や絵図にも描かれた共同井戸の内容が明らかにされた。



第3図 調査位置図および周辺の現状地割（高松市都市計画図 No.20 高松市街に加筆）

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

前述のとおり調査対象地はJR検診センターの跡地であったため、構造物があった北半部は大規模な搅乱により遺構面は残されておらず、遺構面が残された南半部の調査を行った。

調査は直営方式で実施し、遺構面までは重機による掘削を行った。また、調査対象地を分割せず、全面で調査を実施した。調査区南半部についても、近代以降の搅乱が深くまで及び最終遺構面しか残されておらず、すべての遺構を搅乱を除去した同一の面で検出した(第5図 遺構配置図)。この面においても搅乱が深くまで達する個所が多く認められ、近代以降の遺物が多く混入していた。

測量に要する基準杭は業者に委託して設置した。全体の測量はラジコンヘリにより行った。

遺構名は、報告書作成に当たり、調査時に付したものから変更した。

第2節 土層(第4・6～8図)

調査区の西・東・南壁で土層図を作成した。層位を大別すると次のとおりである。

1. 搅乱・造成土
2. 黄灰色砂質土・シルト層。西壁断面(3、10～12)および南壁断面(30、31、38、47～50)で確認したのみである。厚さは最大40cm程度であるが、東半部では認められなかった。土層断面によりSD04、SK12を覆うことがわかる。この層を掘り込み面とする遺構は認められなかった。SK12を覆うことから18世紀中頃以降の堆積である。おおむね標高0.6mまでである。
3. 褐灰色・明黄褐色粘土・シルト層。西壁(18・19)、東壁(7)、南壁(54～57、64、78、83)などが相当する。遺構はおおむねこの面を掘り込み面とする。調査区全体に認められる。概ね標高0.6～-0.2mで堆積する。
4. 黄色・灰色砂礫・粘土層など。砂堆堆積層と考えられる。標高0.2m以下である。

第3節 遺構・遺物

①ビット

調査区西端付近、SD02-1 東側付近で南北に連なって検出したほか、SD08 東側、SE04・06 付近で散在して検出した。大規模な搅乱や大型土坑が多く、ビットはそれらにより失われた可能性もある。

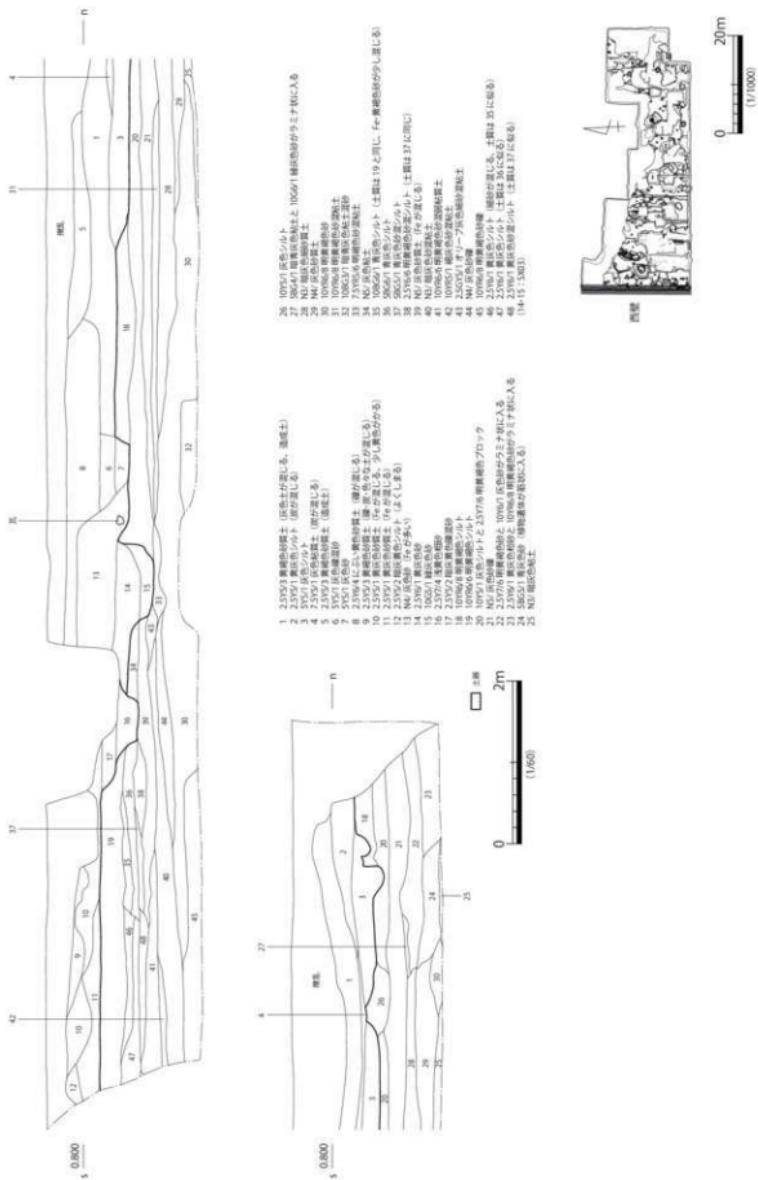
SP12(第9図)

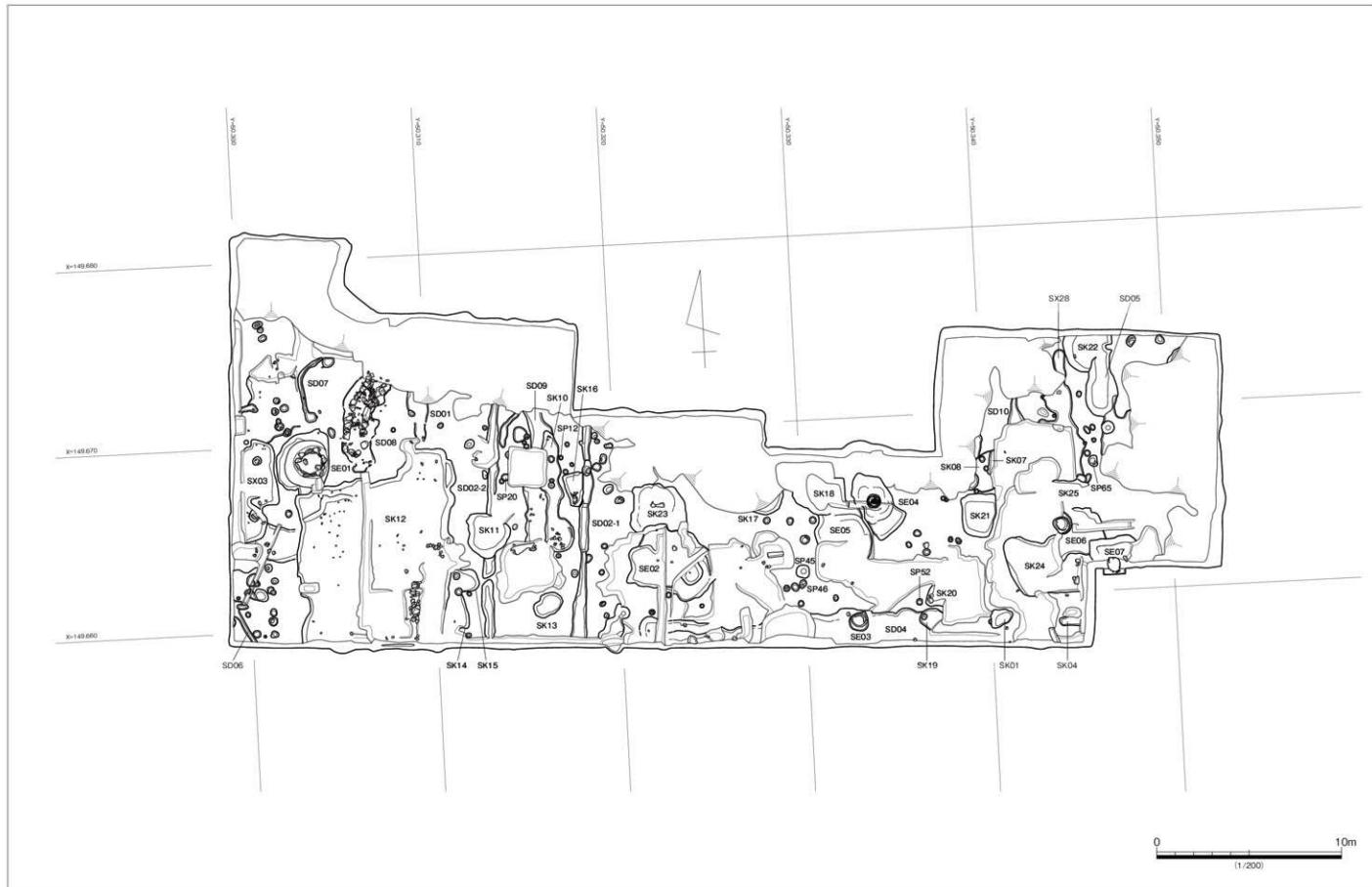
SK10の東側に接して検出した。直径25cm、深さ2cmで非常に浅い。埋土中からは土師質土器皿が出土した。

1は土師質土器皿。A IV形式。17世紀後半(様相4)。

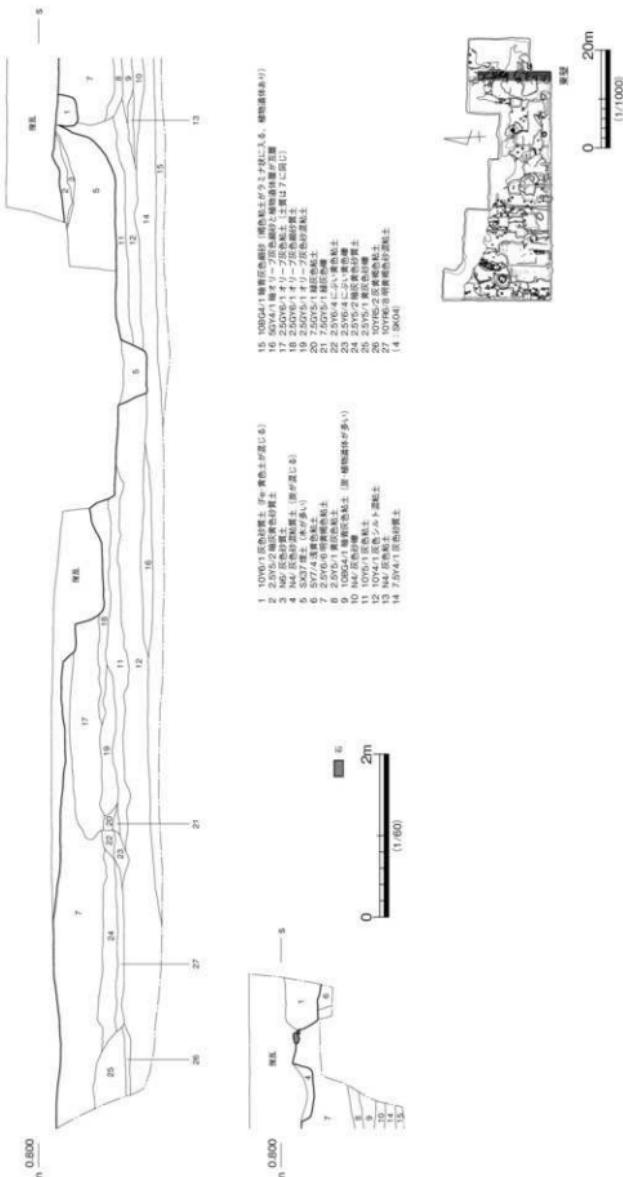
出土遺物により遺構の時期は17世紀後半と考えられる。

第4図 西壁土層断面図



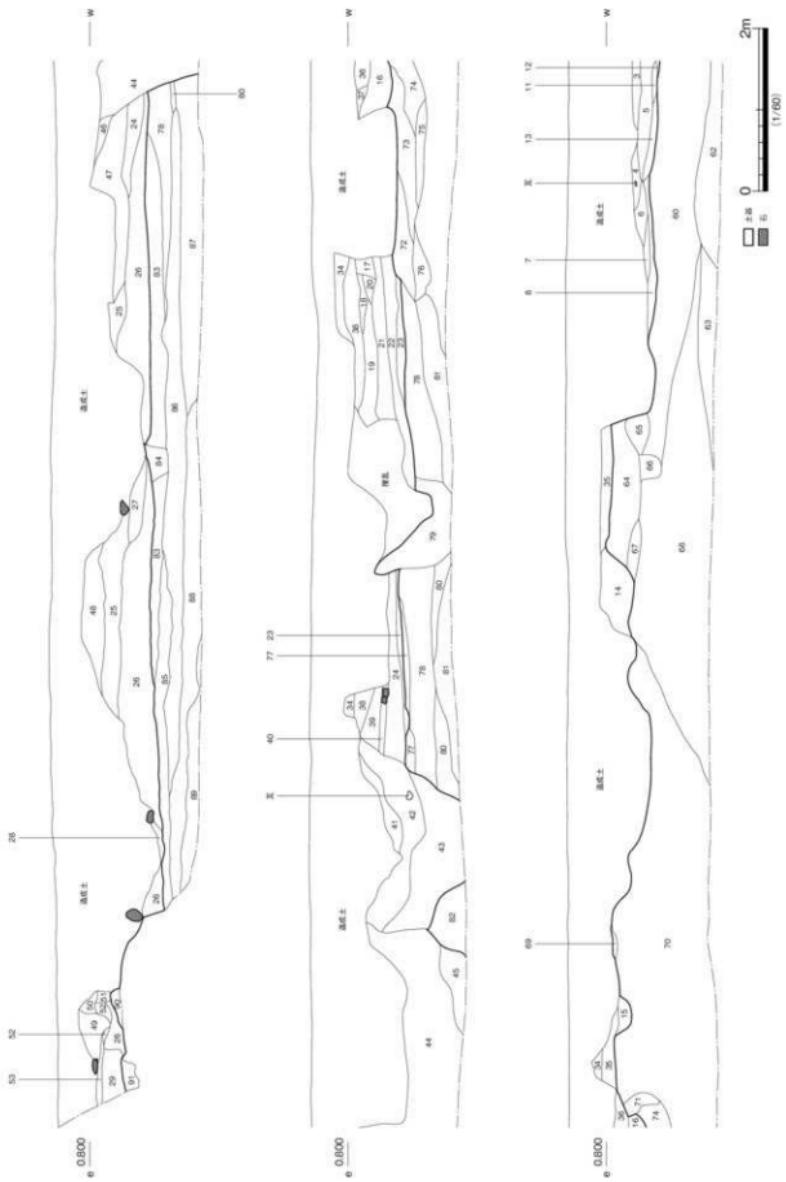


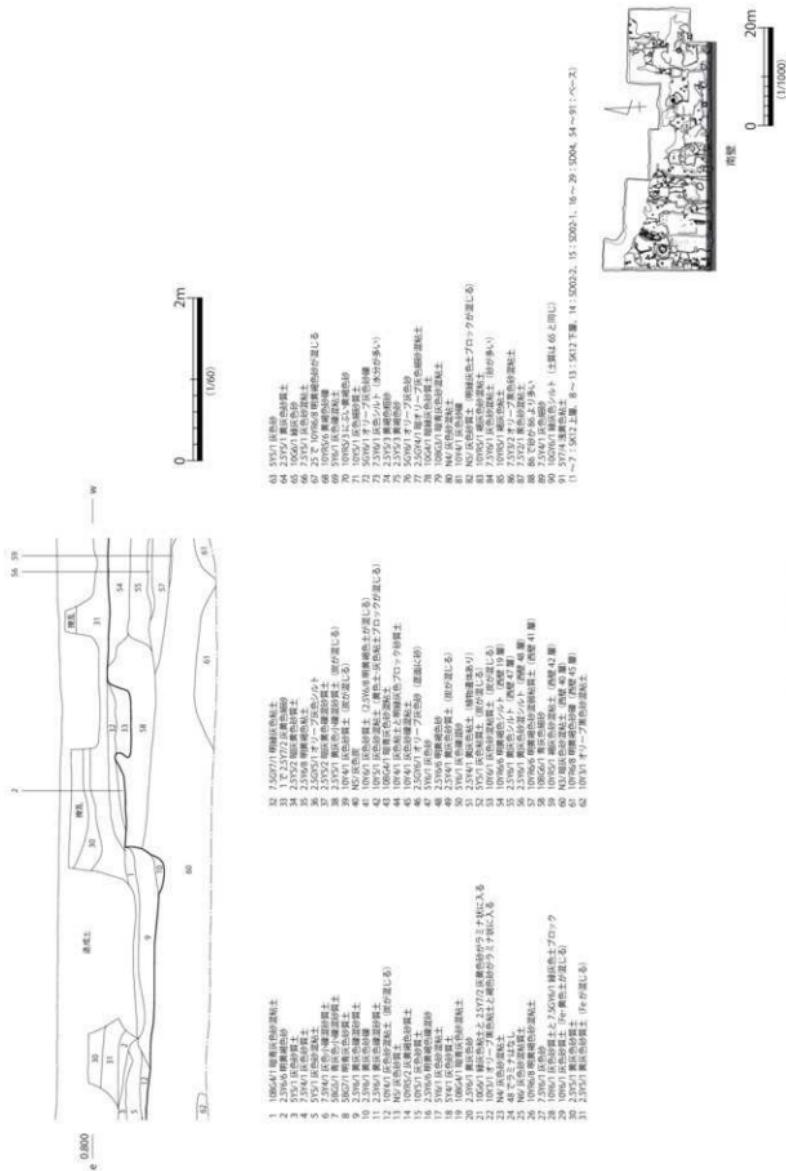
第5図 造構配置図



第6図 東壁土層断面図

第7圖 南壁土層剖面圖(1)





第8圖 南望土層斷面圖(2)

SP20(第9図)

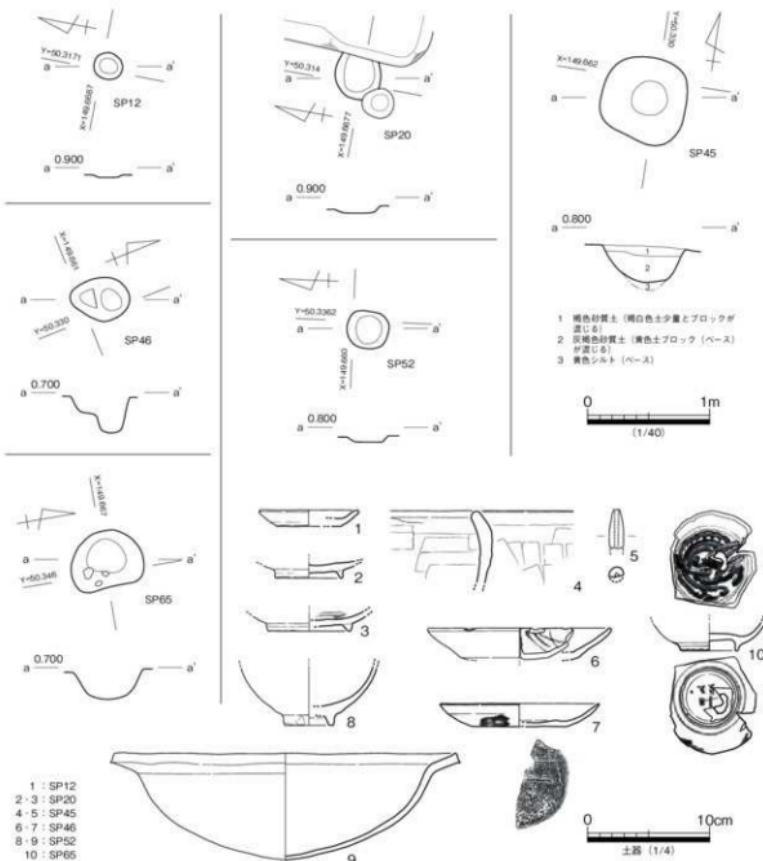
SD02-2の東側で検出した。直径40cm、深さ2cmで浅い。一部が攪乱と他のピットにより消失する。埋土中からは土師質土器挽小片。3は内面にヘラミガキが観察できる。12世紀前半頃。

2・3は土師質土器挽小片。3は内面にヘラミガキが観察できる。12世紀前半頃。

遺構の時期は、出土遺物の時期である12世紀前半の可能性もあるが、17～18世紀の遺構に中世遺物が混入する場合もあることから遺構の時期は決めがたい。

SP45(第9図)

調査区中央付近で検出した。隅丸方形で1辺70cm程度、深さ30cmである。埋土中からは土師質土器片などが出土した。



第9図 SP12・SP20・SP45・SP46・SP52・SP65 平・断面図、出土遺物

4は土師質土器擂鉢。17世紀中頃（様相3）。5は管状土錘。

出土遺物により、遺構の時期は17世紀中頃と考えられる。

SP46（第9図）

調査区中央付近、SP45の南側に接して検出した。2段掘り状を呈し、北側が低い。楕円形で長軸50cm、短軸38cm、深さ30cmである。

6は肥前系陶器段皿。内面に鉄絵を施し、口縁端部1ヶ所に輪花状に窺ませる個所が残る。17世紀前半。7は土師質土器皿。外面にススが付着し、灯明皿として使用したと考えられる。A V形式。18世紀前半（様相5）。

遺構の時期は7の時期である18世紀前半と考えられる。

SP52（第9図）

調査区東南部、SD04の北側で検出した。円形で直径45cm、深さ5cmで浅い。

8は肥前系磁器碗。高台内は施釉しない。初期伊万里。17世紀中頃（様相3）である。9は土師質土器培塿。外型成形によるもので明治以降に下る。

遺構の時期は出土遺物により明治以降に下る可能性が高い。

SP65（第9図）

調査区東端近くで検出したピットである。ほぼ円形で直径50～60cm、深さ25cmである。

10は中国産磁器碗。景德鎮窯。高台内に「富貴□□」銘がある。16世紀前半。

17～18世紀代の遺構からも景德鎮窯の遺物が出土する場合があり、遺構の時期は決めがたい。

②溝

溝は10条検出した。現在の地割と方向が同じものは8条、その中で東西方向の溝は1条、南北方向の溝は7条で、南北方向の溝は調査区西側1/3の部分に集中する。

SD01（第10図）

調査区西部で延長約2.1m検出した。北側は調査区外へ延び、南側はSK12により消失する。深さは4cm程度で、遺構の残存状況は悪い。

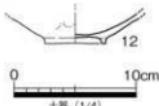
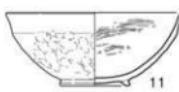
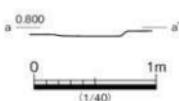
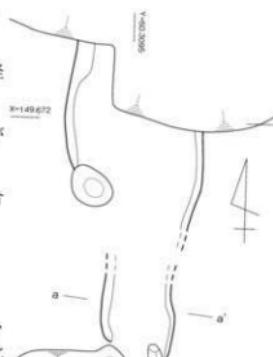
埋土中からは瓦器片、土師質土器小片がわずかに出土した。

11・12は和泉型瓦器碗。12世紀後半。高松城跡（西の丸町地区）で検出した港湾施設と同時期の遺物と考えられるが、摩滅が著しく混入と考えられる。

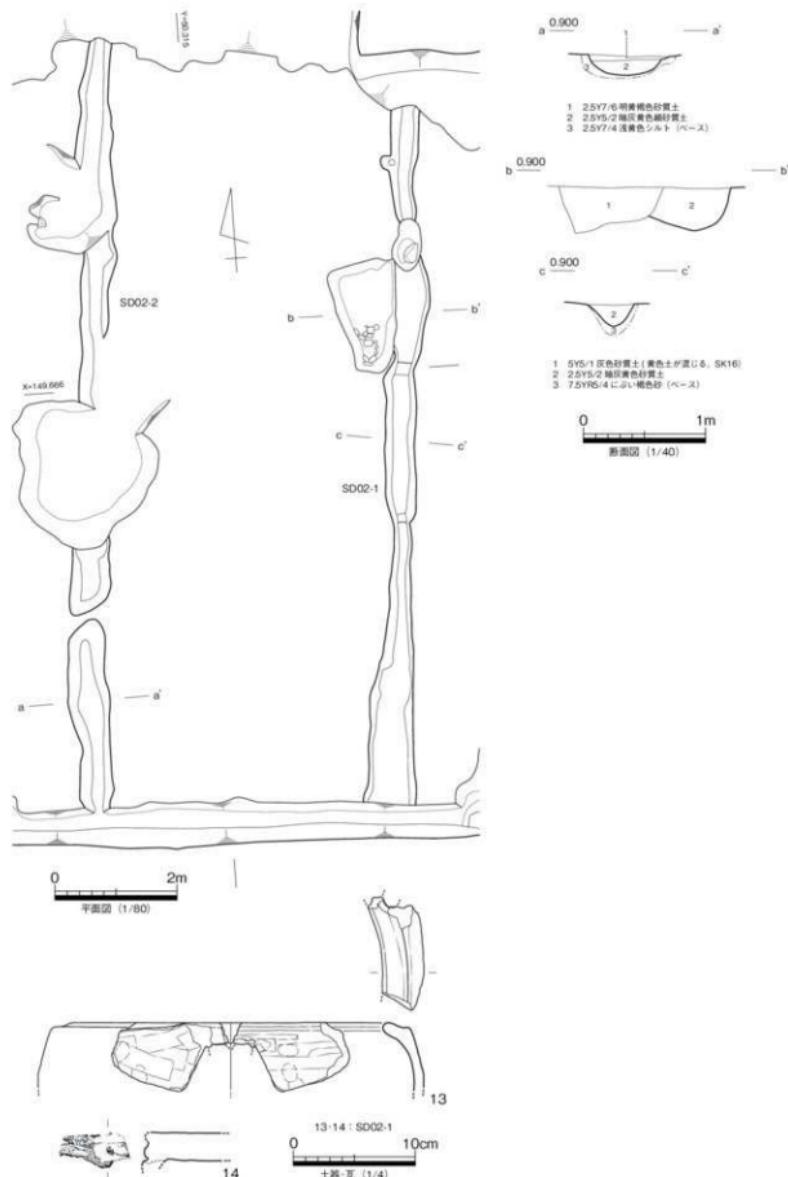
19世紀前半のSK12との関係から、遺構の時期はそれ以前である。

SD02-1・2（第11図）

調査区西部、SD01の約4m東側で検出した。東側をSD02-



第10図 SD01 平・断面図、出土遺物



第11図 SD02-1・SD02-2 平・断面図、出土遺物

1、西側を SD02-2 とした。規模や埋土の類似性、平行して位置することから 2 条がセットとなり機能したと考えられる。2 条の溝の中心間の距離は約 5m である。SD02-1 は SK16 に、SD02-2 は SK11 により一部消失することから、SK16、SK11 より古い。ともに幅 45 ~ 90cm、深さ 15 ~ 30cm で、底のレベルは標高約 0.5 ~ 0.6 m である。断面形状は丸く、埋土は暗灰黄色砂質土である。埋土中からは瓦小片、土師質土器片が少量出土した。

13 は土師質土器内耳付鍋。14 は軒平瓦。SD09、SK23 などの他、高松城天守台、高松城跡（西の丸町地区）などで同文瓦が多く出土する。

遺物の出土が少なく時期比定は難しいが、遺構の時期は土師質土器把手付鍋の時期と、SK11、SK16 との遺構の前後関係から 17 世紀中頃（様相 3）と考えられる。

高松城跡（西の丸町地区）では、17 世紀前半に比定される第 6 遺構面で鍵型に屈曲する街路を検出し、「高松城下図屏風」にみえる鍵型の街路に相当することが明らかとなった。（財團法人香川県埋蔵文化財調査センター 2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 冊 高松城跡（西の丸町地区）II』香川県教育委員会）SD02-1・2 はそれらのほぼ延長部に相当し、同様に「高松城下図屏風」に記載された街路となる可能性がある。

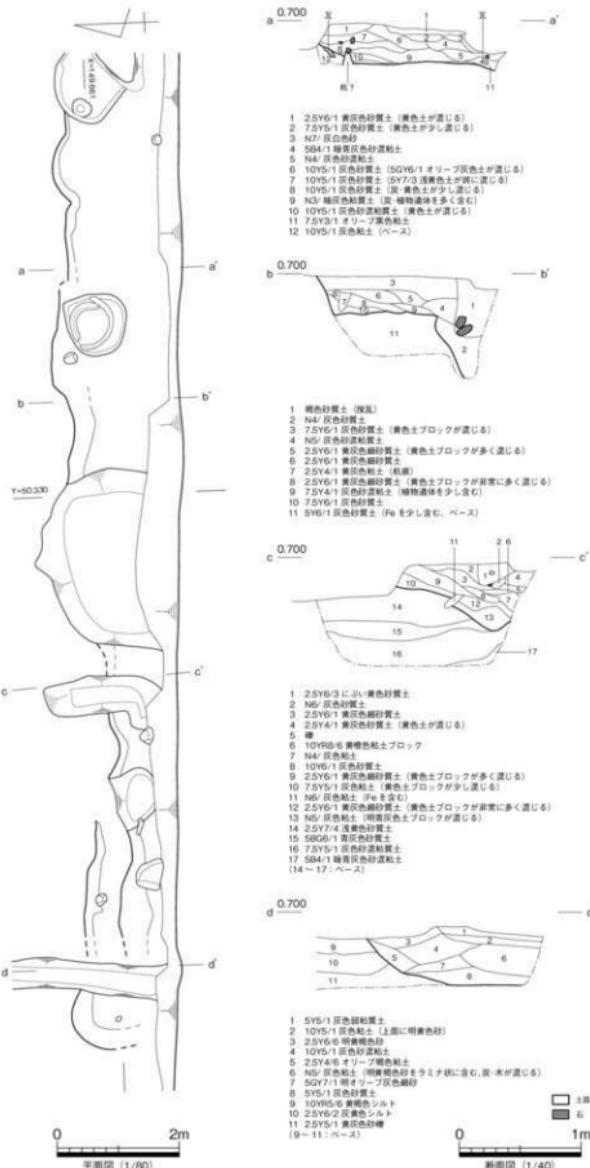
SD04（第 12 ~ 15 図）

調査区南端付近で検出した東西方向の溝である。検出長約 24m、幅 1.3m 以上、深さ 30 ~ 55cm 程度、溝底のレベルは標高 0m 程度である。下位はおおむね灰色粘土・砂混粘土・砂質土層で一部には植物遺体や炭を含み、中位～上位は灰色・黄灰色などの砂質土・細砂質土層でベースブロックが混ざり、人為的に埋め戻された様子が窺える。遺構の南肩は調査区外へ延びる。遺構の前後関係により SE03 より古い。

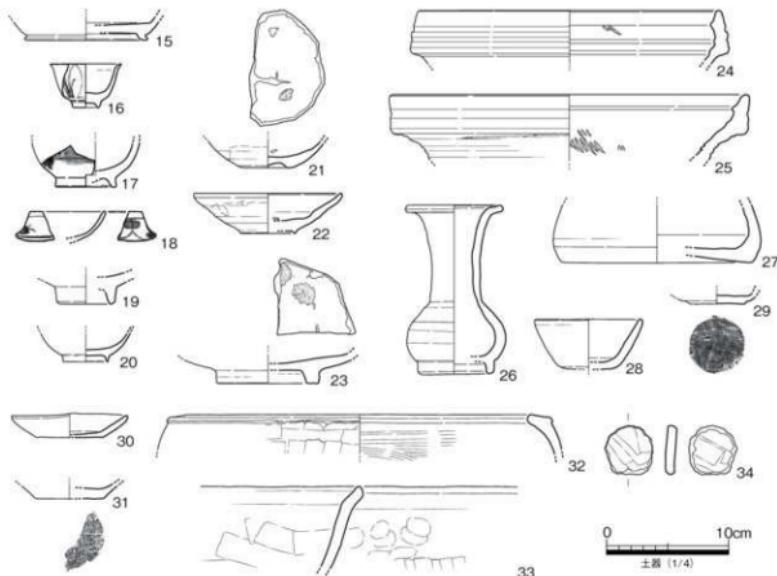
調査区東端では擾乱が著しく、溝のラインは明確ではなかった。調査区東壁土層によれば、SD04 に連続する位置で溝の断面が観察できるが、溝底部の標高はやや高く、0.2 ~ 0.25m であった。SD04 の西側については平面検出では SD02-1 の東側で途切れる、調査区南壁でも SD02-1 から西では SD04 の埋土は認められず、SD02-1 の東側で途切れると考えられる。溝底のレベルはおおむね 0m であるが、溝が収束する手前で徐々に溝底のレベルは上がる。遺物は溝の西端を除きおおむね均等に出土している。SD04 東部の溝底部から瓦が集中して出土した。

15 は須恵器高台付杯。8 世紀後半の遺物で混入と考えられる。16 ~ 18・20 は肥前系磁器。16 は小杯。高台内無釉で初期伊万里。17 ~ 20 は碗。19 は青磁碗。14 世紀後半～15 世紀初頭で中国からの貿易陶磁器。21 ~ 27 は陶器。21 ~ 23 は肥前系皿。21・22 は見込みに胎土目積痕を残し、23 には砂目積痕を残す。22 は段皿。24・25 は備前焼擂鉢。24 は乗岡編年近世 1b 期、25 は口縁部外面に溶着痕がある。乗岡編年近世 2b 期。26 は花生。肥前系。27 は備前焼建水。28 ~ 33 は土師質土器。28 は杯、29 ~ 31 は皿である。29・31 は底部に静止糸切痕を残す。ともに A II 形式。30 は摩滅のため底部切り離し方法は不明であるが、形状から A I 形式と考えられる。32 は把手付鍋、33 は鍋である。34 は土師質土器壺の小片を円盤状土製品に転用したものである。

35・36 は軒丸瓦である。35 は巴文の尾が連結する個所としない個所がある。36 は珠文の部分 2ヶ所に斑傷が認められる。37 ~ 44 は軒平瓦である。37 ~ 41 は山型の中心飾りに左右に 2 転する唐草文を持つ。すべて同范である。42 ~ 44 は唐草の一部しか残らないが、文様の類似性や瓦当の大きさか



第12図 SD04 平・断面図



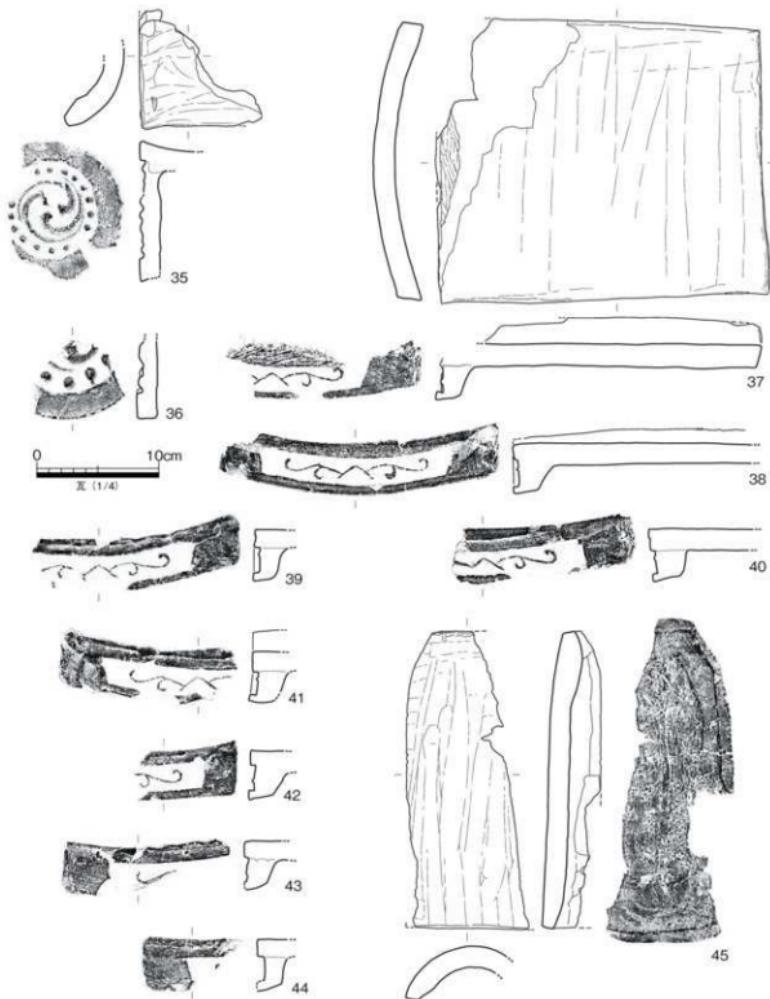
第13図 SD04 出土遺物(1)

ら37～41と同范の可能性が高い。SK24出土遺物に同范瓦と考えられる個体があるが、他の高松城跡の調査では類例は見られない。37は平瓦部分がほぼ完形である。瓦当上面に平瓦との接合を強固にさせるための刻み目がある。45～47は丸瓦。45は玉縁を持つないもの。他の2点より小型で全長24.5cmを測る。46・47は全長30～32cm程度で凹面に吊り紐痕を残す。48は平瓦。大きさは37の平瓦部分とおむね同じである。49は毛抜きである。

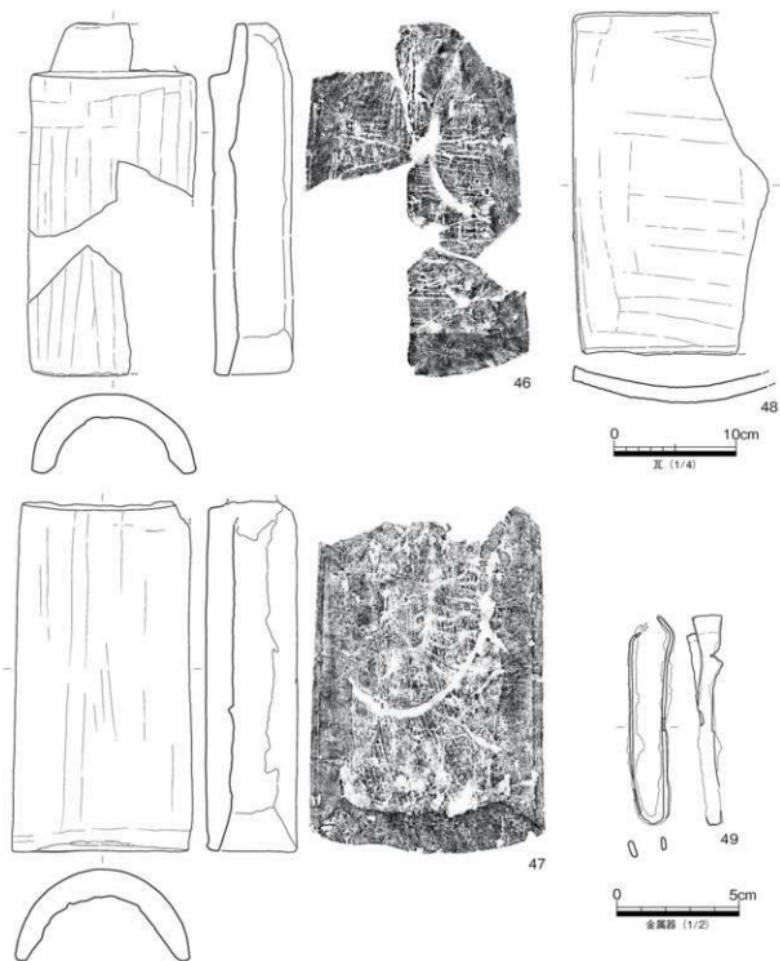
陶磁器類の時期は、初期伊万里(16)、肥前系陶器皿(21・22)、備前焼鉢・土師質土器杯・皿など様相1～2を中心で、肥前系磁器碗、土師質土器鍋類など様相3に下るものもみられる。軒平瓦の時期については検討が必要であるが、軒丸瓦(35)や丸瓦(46・47)は様相1、17世紀前半頃と考えられる。

遺物の時期は様相1～3(17世紀初頭～中葉)となる。SD04は17世紀初頭～前半には開削され、17世紀中葉に廃絶したと考えられる。軒平瓦は同一施設で使われた可能性が高く、屋敷地境であるSD04の廃絶に伴って廃棄されたと思われる。

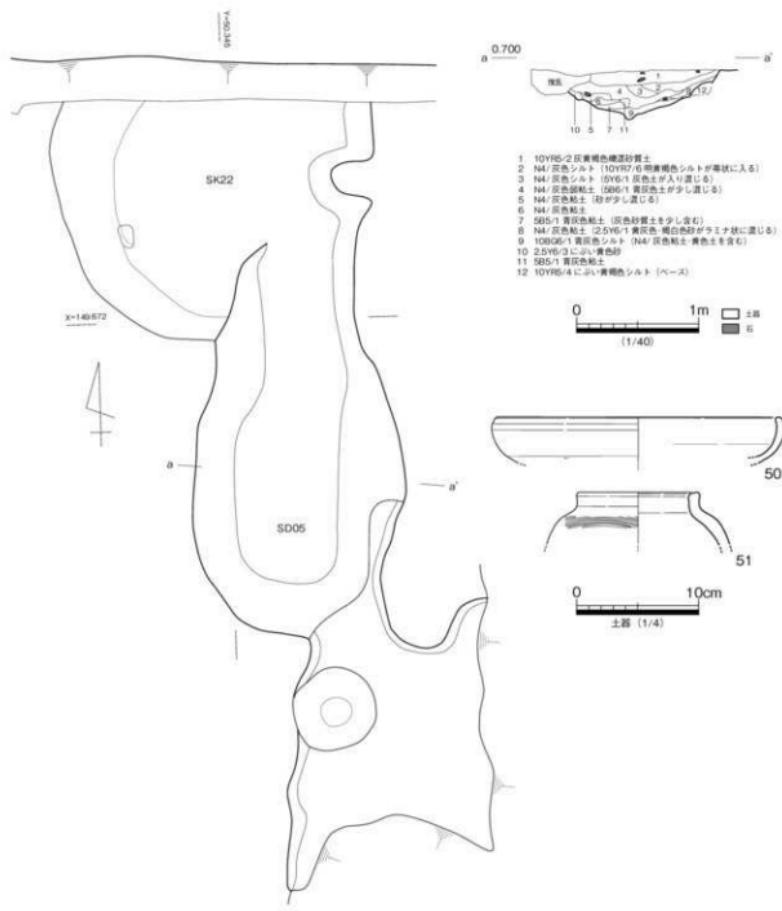
生駒期の絵図や「高松城下図屏風」ではこの位置に屋敷地境が存在するが、享保年間(1710～1735)の絵図以降はこの屋敷地境は廃絶する。各絵図資料の作成時期を考え合わせれば、SD04の廃絶時期と符合すると考えられ、SD04は当該期の屋敷地境と考えられよう。SD02より西へ及ばないことからも、SD04は屋敷地境であり、SD02が街路を形成することがいえよう。



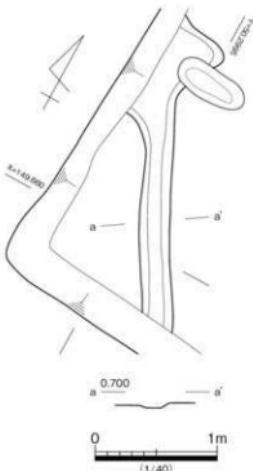
第14図 SD04出土遺物(2)



第15図 SD04 出土遺物 (3)



第16図 SD05 平・断面図、出土遺物



第17図 SD06 平・断面図

SD05(第16図)

調査区東端付近で検出した南北方向の溝である。検出長4.0m、幅1.7m、深さ42cm。断面形状は浅いボウル状である。中堀の外側ラインの延長からおよそ26m西側にあたる。遺構の前後関係によりSK22より新しい。遺物の出土量は少ない。

50・51は備前焼である。50は大平鉢。51は壺。肩部に波状文を描く。

出土遺物により遺構の時期は17世紀中葉前後と考えられる。

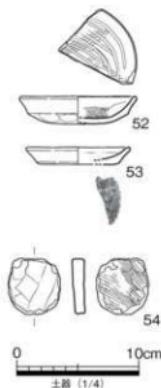
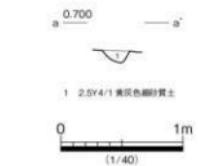
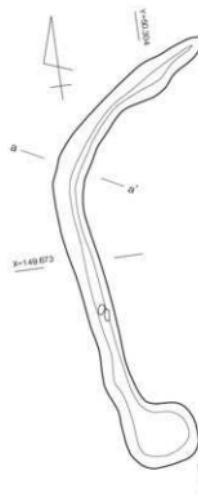
SD06(第17図)

調査区西南隅で検出した溝である。南東から北西方向を向く。北西及び南東は調査区外へ延びる。検出長は約2mである。幅30cm、深さ4cmを測る。周辺の遺構と主軸方位が異なる。埋土中からは瓦器小片が出土した。

遺構の主軸方位が周囲の遺構と異なることや出土遺物から遺構の時期は12世紀後半頃と考えられる。

SD07(第18図)

調査区西部で検出した。ほぼ南北方向を向き、約24m北で北東方向へ屈曲する。検出長は約3.8mでSD08の2.0～2.5m西側で検出した。幅20cm、深さ10cm、



第18図 SD07 平・断面図、出土遺物

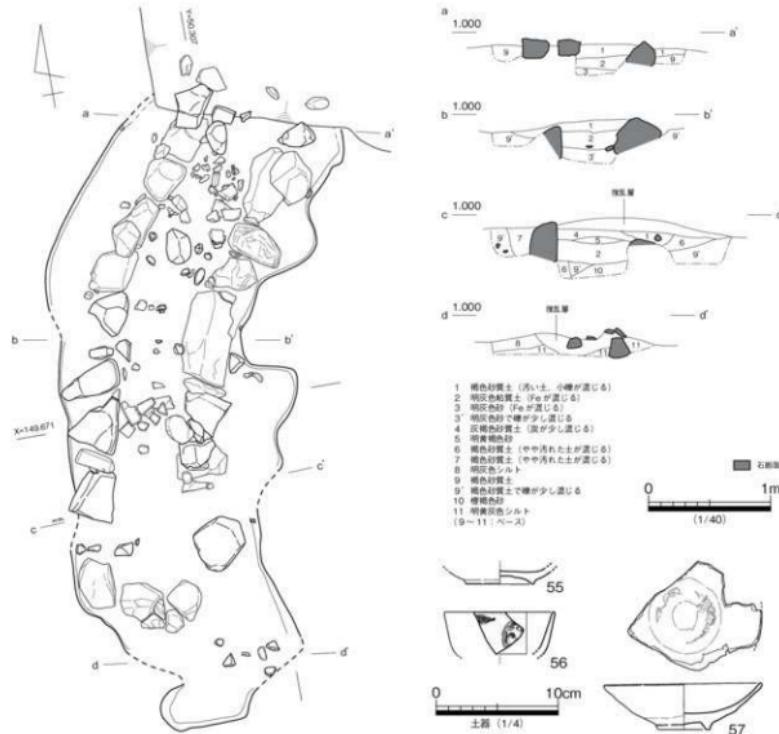
断面形状は逆V字型に近い。埋土中からは瓦器小皿片、土師質土器皿などが出土した。

52は瓦器小皿。内面にはヘラミガキ、外面には指押さえ痕が顕著に残る。53は土師質土器皿。底部には回転糸切り痕を残す。A III形式。54は円盤状土製品。土師質土器甕の破片を転用する。

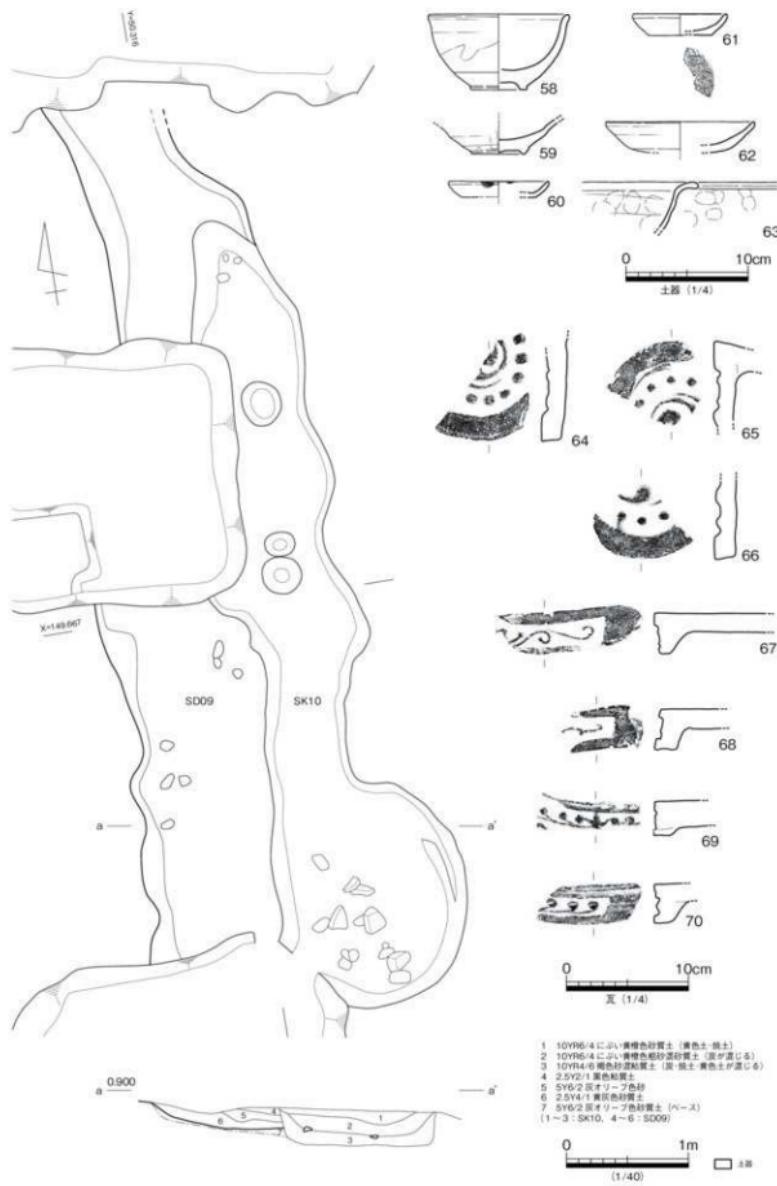
53の遺物により造構の時期は17世紀中葉（様相3）と考えられる。

SD08(第19図)

調査区西部で検出した石組溝である。SD07の20～25m東側で、上面の搅乱を除去後に検出した。北から約5mを検出し、それより南側はSK12により消失する。石組の内法で幅50～60cm、深さ30cm程度、北東から南西方向を向き、北から1.5m付近でやや東へ屈曲して、それより南側では現在の地割に近い南北方向を指す。南側ではSK12により石組が消失する。調査区南壁土層でもSD08の延長部は確認できなかったが、SD08を壊すSK12の底のレベルはSD08の底のレベルとおおむね同じであるため、SD08が南へ延びるかどうかは不明である。理土はおもに褐色砂質土、明灰色砂質土で、下



第19図 SD08 平・断面図、出土遺物



第20図 SD09 平・断面図、出土遺物(1)

層や中層に部分的に薄く砂層が堆積する。

高松城跡（西の丸町地区）では、第5面（1650～1718）で石組溝が出現し、第3面（～1748）で用地境を本格的に石組溝へ改築する。これは高松大火（1718）を契機としたものとされている。SD08の石はやや小ぶりであり、第5面で検出した石組溝に対応すると考えられる。

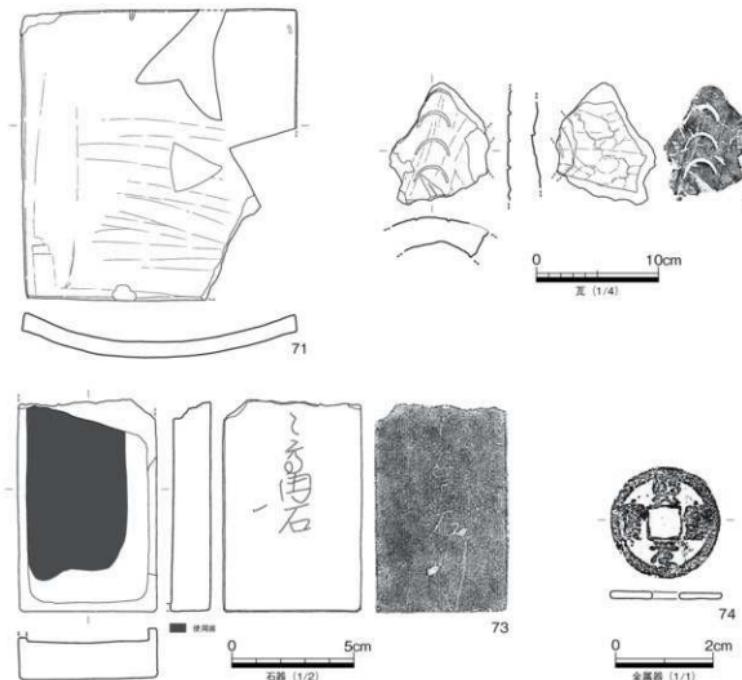
埋土中からは陶磁器片、瓦小片が出土したが、量は少ない。

55・56は磁器碗。55は瀬戸美濃産。底部外面は蛇の目凹型高台の形状である。56は銅版転写により施文する。55・56は19世紀末～20世紀代へ下るもので、上面の攪乱からの混入と考える。57は肥前系陶器皿。見込みに蛇の目釉刺ぎを施す。17世紀後半。

遺構の時期は、SK12以前で高松城跡（西の丸町地区）第5面の時期である17世紀後半～18世紀前半頃としたい。

SD09（第20・21図）

調査区西部で検出した南北方向の溝である。溝の東側のラインは18世紀前半の遺構であるSK10により消失する。検出長は約7mである。北側は調査区外へ延び、南側は攪乱により消失するが、攪乱より南側では確認できなかった。また、SD09 延長部の南壁部分では溝底部のレベルより深い攪乱が及び、



第21図 SD09 出土遺物(2)

溝の有無を確認することはできなかった。幅11m以上、深さ16cmで、断面形状は浅い皿型を呈する。

SD02-1・2は17世紀中葉の街路の東西の側溝の可能性が考えられるが、検出位置からSD09も街路の一部を構成する溝の可能性がある。SD09とSD02の前後関係については検討課題として残った。

58・59は肥前系陶器。58は天目碗。外面に鉄釉を掛ける。59は段皿。被熱痕がある。いずれも17世紀前半。60～62は土師質土器皿。60・61はA III形式、62はA V形式である。60は灯明皿として使用された。63は焼烙小片。

64～66は軒丸瓦。いずれも小片。64・65は左巻き、66は右巻きの巴文である。いずれも巴が互いに連結せず、珠文数は12個程度と考えられる。様相4～5に該当しよう。67～70は軒平瓦。67は2転する唐草文にわずかに三つ葉の中心飾りが残る。68はSE07出土231と類似する。69・70はSK23に同文瓦が多いほか、SD02・SE07に同文瓦がある。その他高松城跡（西の丸町地区）、高松城天守台など城下に類例が多い。71は平瓦。凹面は横方向の板ナデを主とし、左右端のみ縦方向の板ナデを施す。72は鰐小片。半円形の模様を並べてうろこを表現する。側面に孔の一部が残る。73は硯。表面には使用による摩滅がほぼ全面にある。裏面には「[] 之高田石」と読める線刻がある。74は熙寧元寶。北宋銭。

遺構の時期は、土師質土器の時期である17世紀中葉（様相3）としたい。軒平瓦の時期とも適合する。18世紀前半（様相5）までに下る遺物はSK10からの混入と考えられる。

SD10（第22図）

調査区東部で検出した溝である。北・南とも擾乱により消失し、1.4m程度検出したにとどまる。幅84cm、深さ11cmである。埋土中からは土師質土器小片がわずかに出土したのみであった。

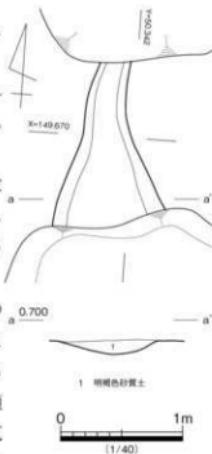
③井戸

SE01（第23・24図）

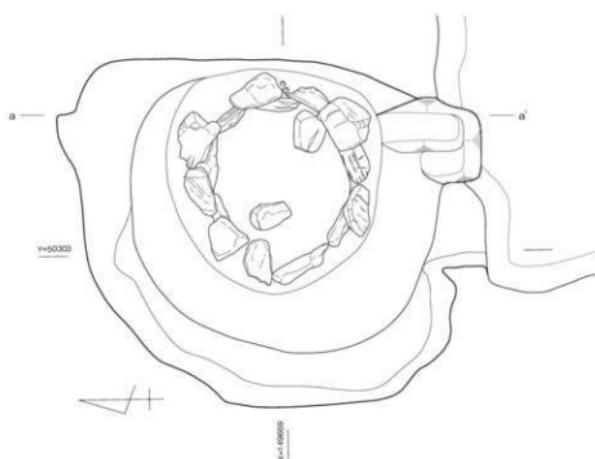
調査区西端付近で検出した円形の石組井戸である。井戸の掘り方は径2.8～3.6m、石組井戸の直径がおよむね1.6m、深さ12.8m、底のレベルは-0.8mである。最下段から2段目、地表面から深さ65cm程度まで石組が残され、それより上部は石組は抜き取られたと考えられる。SK12との遺構の前後関係によりSK12より古い。

75～85は石組内から出土した遺物である。75・76は弥生土器。75は鉢、76は壺底部である。弥生時代後期。いずれも混入と考えられる。77～79は中国からの輸入磁器。77～79は白磁碗。玉縁状の口縁を持つ。白磁IV類。12世紀前半。79は内面に獅子文を施す。白磁VI類。12世紀前半。80・81は土師質土器皿。80は底部に静止糸切痕を残す。A II形式（様相1～2）。82は足釜脚部。13～14世紀。

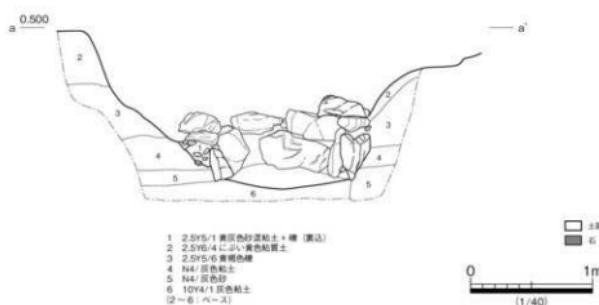
83・84は容器の蓋または底板である。85は卒塔婆。表に「釋 南無[]、願主[]」の記載がある。



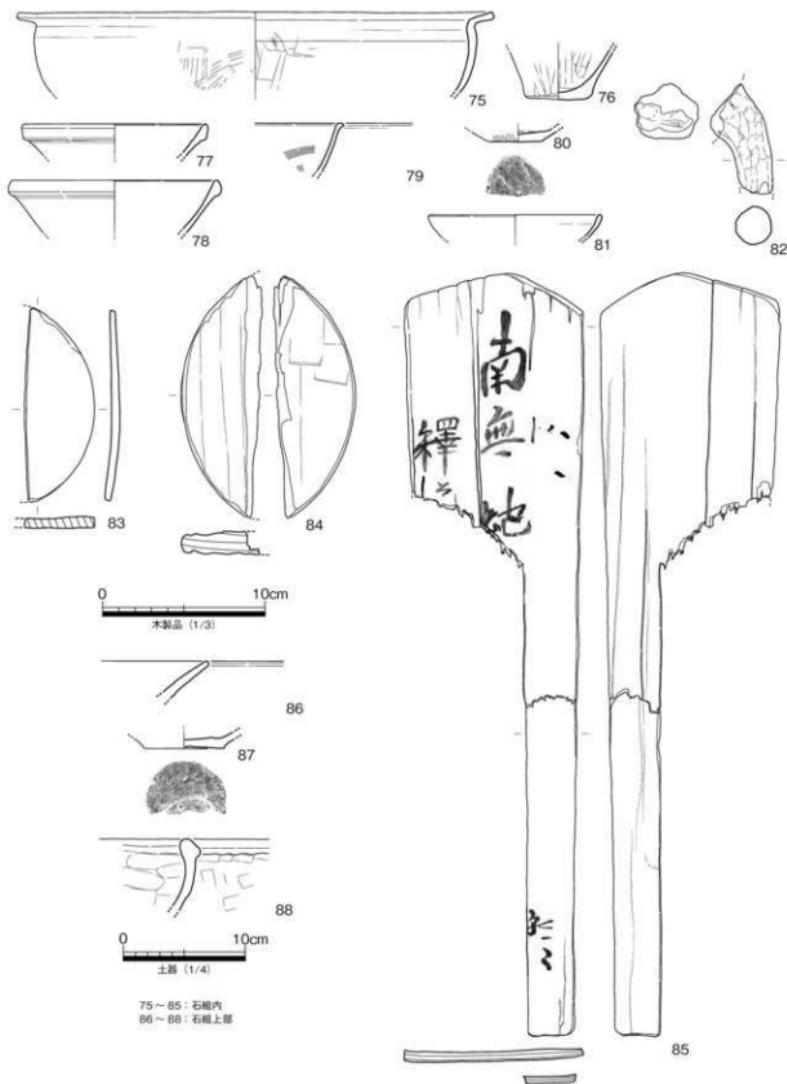
第22図 SD10 平・断面図



- 1 2.5Y6/6 明褐色粘土
2 2.5Y6/6 黄褐色粘土
3 SY5/1 灰色粘土
4 70Y5/1 黄色砂粘土 (砂多い、やや水分が多い)
5 10Y5/1 黄褐色砂粘土
6 10Y3/1 黄褐色砂粘土 (黄色土の大ブロックが多い)
7 NU/ 灰色砂混粘土
8 NU/ 灰色砂混粘土 (塊、黄色土が混じる、水分が多い)
9 10Y5/1 黄褐色粘土 (黄色土ブロックが多い)
10 70Y6/1 黄褐色粘土 (砂多、土質は 12 に同じ)
11 70Y6/6 明褐色粘土
12 2.5Y6/6 明褐色粘土 (Feが多い)
(10 ~ 12 : ベース)



第23図 SE01 平・断面図



第24図 SE01 出土遺物

86～88は石組上部の埋土から出土した遺物である。86は肥前系陶器大皿。87・88は土師質土器。87は皿。底部は静止糸切り痕を残す。A II形式。88は把手付鍋。

他の井戸に比べ遺物出土量は少なく、瓦は小片がわずかに出土しているのみである。

本調査区唯一の石組井戸で、他の井戸より古いと考えられる。12世紀代の遺物が多く出土するが、遺構の時期は土師質土器(80)により17世紀前半と考えられる。

SE02(第25～27図)

調査区中央付近で検出した。遺構検出時に、上面数cmはSK23との判別がつかず同時に掘り下げた。想定される掘り方は長楕円形で、最大で長軸4.8m、短軸3.2mである。井戸枠は掘り方のやや北西寄りに設置され、下部には直径60～70cm、高さ90cm、2ヶ所にタガがある桶が据えられていた。上部の井戸枠は残らなかったものの、タガが残っていたことから、桶を2段重ねて井戸枠としていたことがわかる。深さ1.64m、井戸底の標高は約-1.2mである。埋土の堆積状況から一度に埋められたことがわかり、上部付近には人頭大の礫が投棄されていた。SK23との前後関係により、SK23より新しい。

89～94は井戸枠内部から出土した遺物である。89は弥生土器甕底部。90～92は肥前系磁器。90・91は碗。91は外面に山水文、内面に梅花文を描く。いずれも17世紀後半。92は青磁香炉。内面に芭蕉文、脚部に放射状の片彫りを施し、口縁端部内面には辰砂を塗布する。17世紀前半。93は備前焼擂鉢。口縁部外面に火捺が掛かる。乗岡編年近世3期。94は土師質土器皿。A III形式。

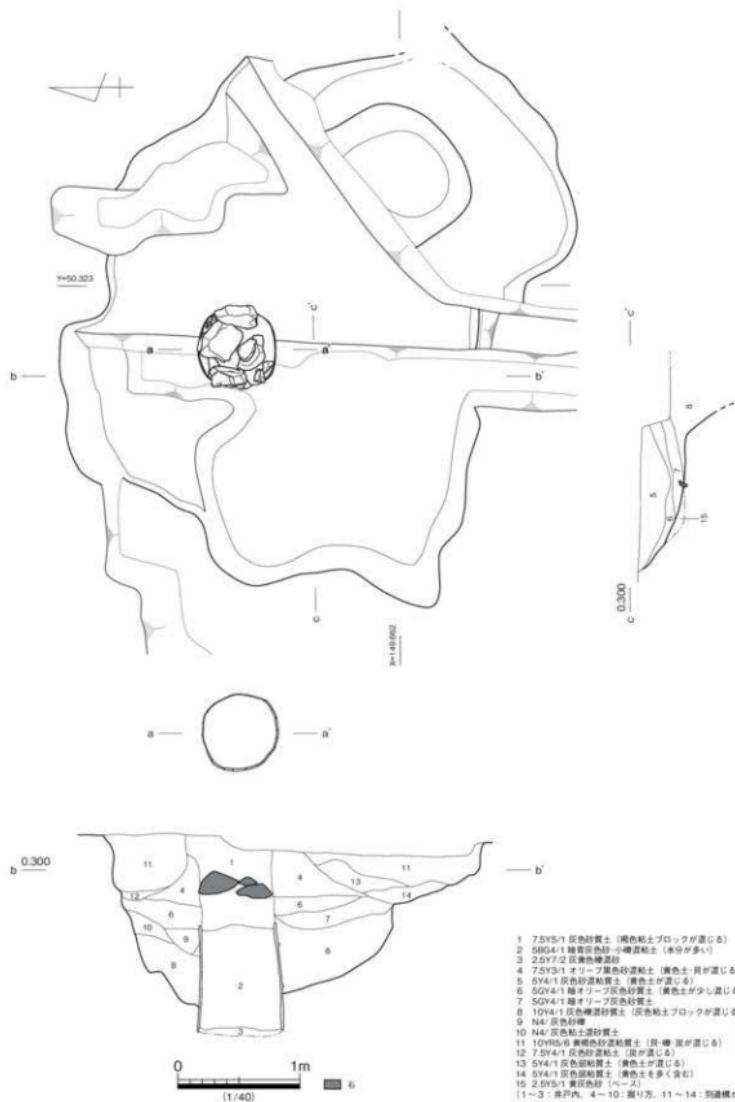
おおむね17世紀後半～18世紀前半(様相4～5)の遺物と考えられる。

95～98は井戸掘り方から出土した遺物である。95は肥前系磁器碗小片。外面には鳥が、口縁部内面には四方櫛文が描かれる。96は肥前系陶器。呉器手。97は肥前系陶器香炉。98は土師質土器皿。A X形式。

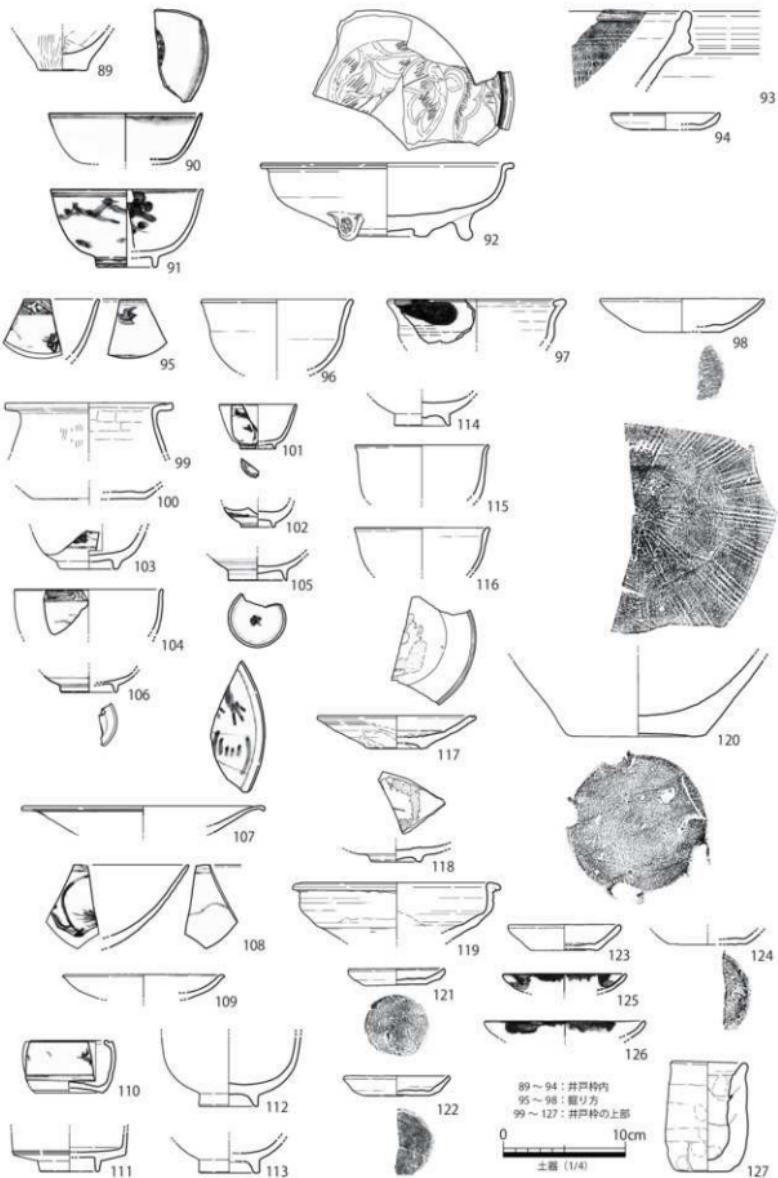
遺物の時期はおおむね井戸枠内と同じ17世紀後半～18世紀前半(様相4～5)と考えられる。

99～140は掘り方部分を含んだ井戸枠上部から出土した遺物である。99は弥生土器甕。香東川流域で弥生時代後期。100は須恵器杯。底部外面に火捺がかかる。9世紀。101～111は磁器である。101が景德鎮窯、他は肥前系である。101・102は小杯。103～106は碗。103は高台裏に砂が付着する。105・106は高台裏に銘がある。107～109は皿。107は内面に芙蓉手の染付けを描く。109は青磁。110は合子の身。焼成不良で釉の発色が悪い。111は火入れ。内面が無釉である。112～120は陶器である。112～119は肥前系。112～116は碗。112～114、116は呉器手。115は焼成不良のため釉の発色が悪いが呉器手と考えられる。117・118は皿。117は溝縁皿。117・118とも内面に砂目積みがある。119は香炉。120は擂鉢。素焼きで底部外面に糸切痕を残し、底部と体部の境の4ヶ所に窓を作る。121～129は土師質土器。121～126は皿。121～123はA III形式、124はA V形式。125・126は煤が付着し、灯明皿として使用したことがわかる。127は焼塙壺。在地系の手捏ねのもの。128・129は火鉢。129は脚部。外側に孔があるので、火鉢の脚の3脚のうちの一つと考えられる。130・131は瓦質土器。130は焙培小片。内耳部分が残る。131は鉢。

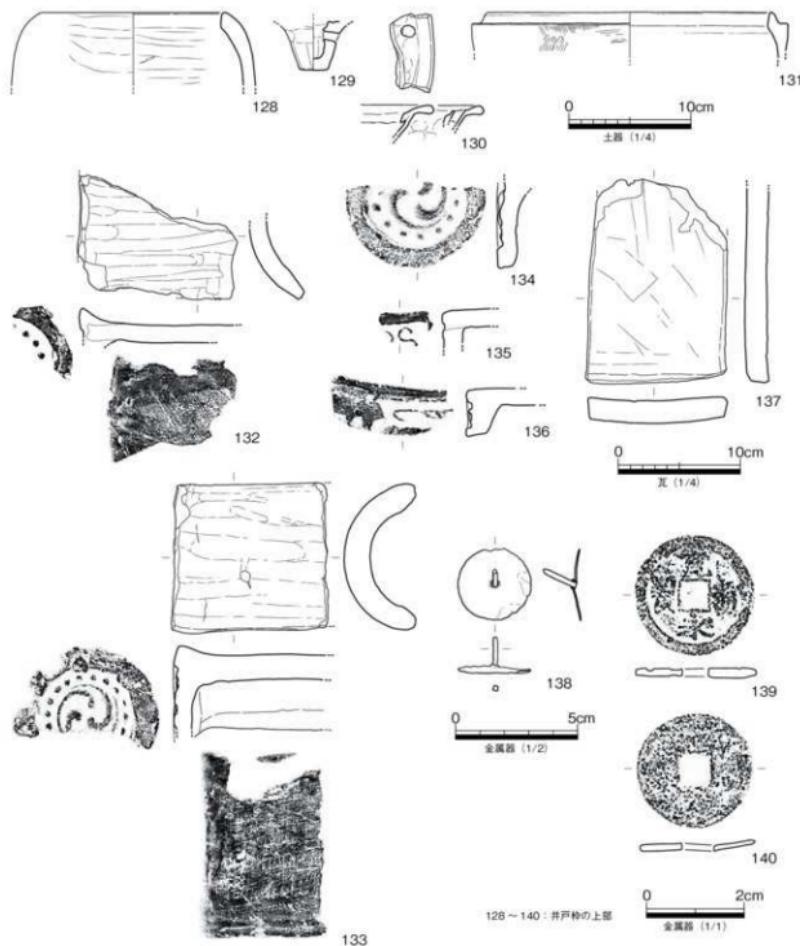
132～134は軒丸瓦。132は瓦当文様は不明であるが、珠文間隔が狭く、取り付く丸瓦の凹面にはコビキA痕(糸切痕)が残る。133はSD04(35)、134はSK23(491～494)と同範の可能性が高い。SK23で出土した瓦(491～494)は棟込瓦であり、134も棟込瓦と考えられる。135・136は軒平瓦。135は小片であるが様相2～3に属する歴博地點資料165と瓦当文様が類似する。137は駿斗瓦。



第25図 SE02 平・断面図



第26図 SE02出土遺物(1)

128～140：井戸枠の上部
128～140: Surface of well frame

138は不明青銅製品。円盤の中央部に棒が差し込まれた形状である。139・140は錢貨。139は寛永通宝、140は損傷が激しく錢種不明である。

井戸枠内部から出土した遺物は17世紀後半～18世紀前半であることから、SE02の時期はこの時期と考えられる。

SE03(第28・29図)

調査区南端中央付近で検出した。SD04の上面で検出し、SD04埋没後に掘り込まれたことがわかる。井戸枠の最上段には直径72cmの凝灰岩(豊島石)を使用し、その下部では2段分の桶を検出した。深さは約2.7m、底のレベルは-1.6mである。下部の桶は直径約60cm、高さ1.4m、タガが3段ある。上部は直径約60cm、高さは約44cm残り、途中で破損した状況である。豊島石の井戸枠は桶の破損後に上部に重ねたものと考えられる。埋土の状況から、桶の部分までは一度に埋め戻され、凝灰岩の井戸枠の内部は自然堆積であった状況が窺える。井戸の掘り方は不明瞭で、調査区南壁ではSE03掘り方の埋土は認められなかった。

141～145は桶の井戸枠内から出土した遺物である。141は肥前系磁器皿。器形は型打ち成型により方形にする。142は肥前系陶器碗。143は土師質土器皿。A V形式。内面には梵字で2文字、底部外面には中心から外側へ向かって「何處有『』」、「□□」と墨書がある。高松城跡西の丸町地区II801(整地土II層)に類例があり、墨書は放射状に4方向に「迷放三界城」「悟故十方空」「本來無東西」「何處有南北」と書かれていたと考えられる。地鎮などまじないにかかる土器と考えられる。144は軒丸瓦。145は軒平瓦である。

桶の井戸枠内の出土遺物はおおむね18世紀前半頃と考えられる。

146～149は凝灰岩井戸枠内部から出土した遺物である。146は型紙摺りの磁器碗。19世紀末頃。147は肥前系溝縁皿。148は陶器蓋。土瓶などの蓋と考えられる。149は瓦質土器火鉢。幅広の脚が1ヶ所で残り、外面には細かい波状文が施される。

おおむね19世紀末頃と考えられる。

150・151はSE03上面で出土した。150は肥前系磁器皿。内面には細かい花唐草文を描く。151は土師質土器皿。A V形式。いずれも18世紀前半頃。

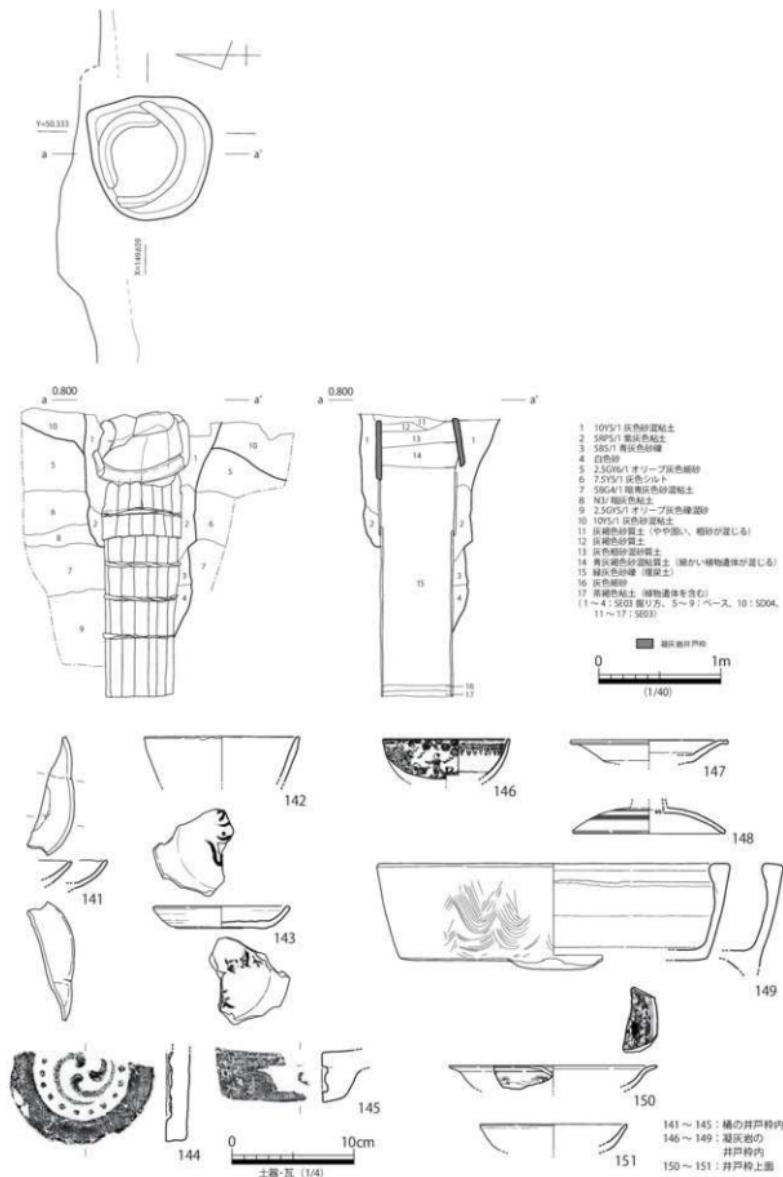
152は最上部に設置された凝灰岩製井戸枠。内面下部に突帯状に巡らせる。外面及び上部に顕著に工具痕を残す。

凝灰岩井戸枠内部の出土遺物から、最終的な埋没時期は明治時代以降と考えられる。

SE04(第30～34図)

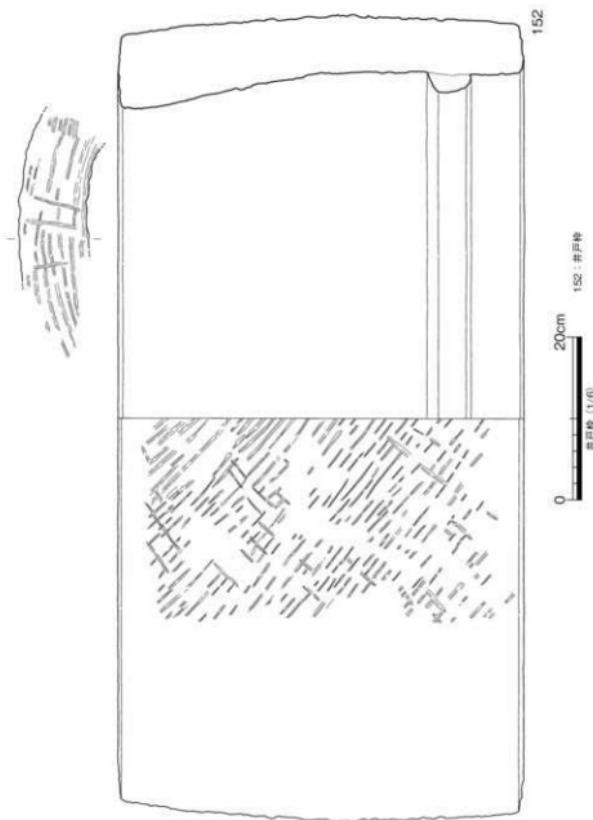
調査区東部北端付近で検出した。長軸3.7m、短軸1.8mの掘り方で、南東側に約80cm幅の段を持つ。深さ約86cmの位置に、直径74cmの土師質土器の井戸枠が約70cm残り、その下部は直径60～65cmの桶の井戸枠が44cm残されていた。井戸枠にはマツ属複雑管束亜属の木材を使用する。当初は桶の井戸を設置したが、井戸枠の破損により土師質土器の井戸枠を設置したと考えられる。土師質土器井戸枠の上部も失われているが、井戸内からはさらに1個体の土師質土器井戸枠が出土しており、2段に組まれていたと考えられる。深さは約2m、底のレベルは-1.3mであった。井戸枠内には竹が1本立てられていた。井戸廃棄時の祭祀に関わる行為と考えられる。埋土中からは陶磁器片、瓦、木製品等の他、貝類等が出土している。

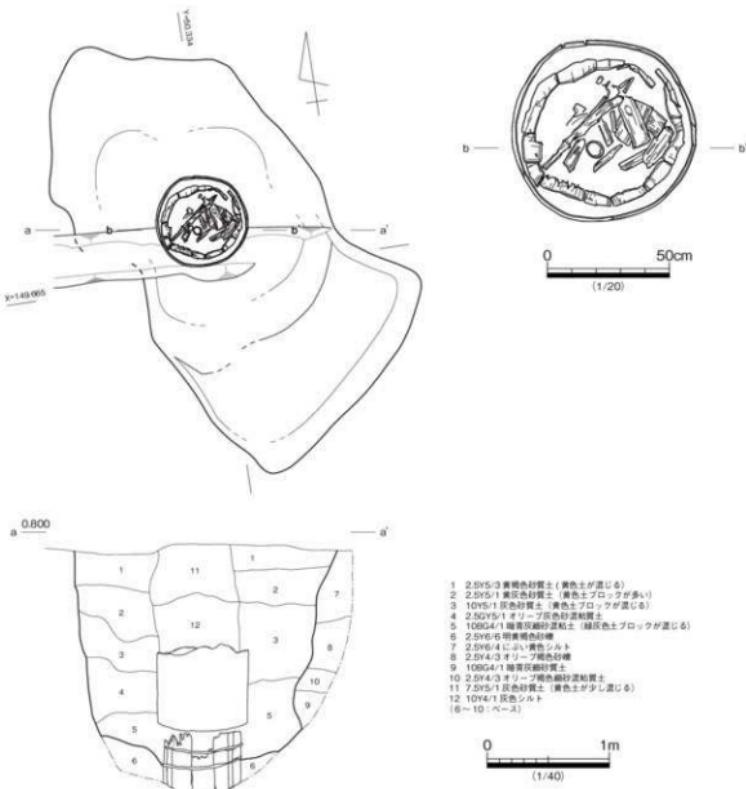
153～158は井戸内の出土遺物である。153は軒丸瓦、154は丸瓦である。ともに銀化し、154は凹面



第28図 SE03 平・断面図、出土遺物(1)

第29図 SE03出土遺物(2)

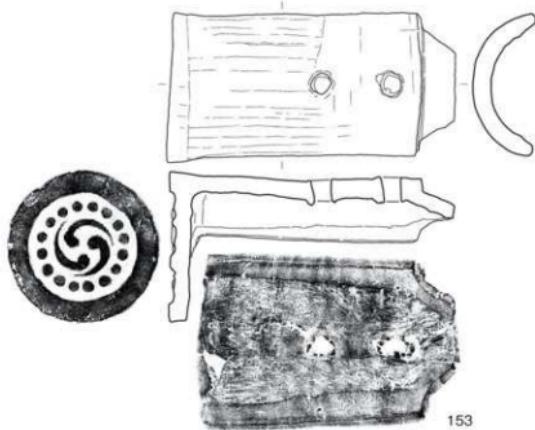




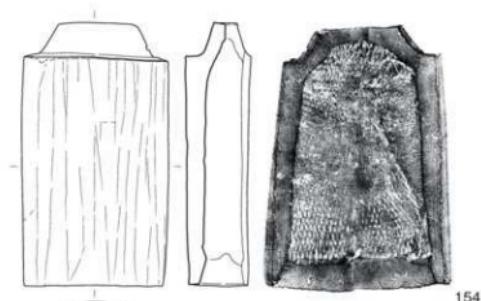
第30図 SE04 平・断面図

に布目の他刺し子痕を残す。19世紀前半～中頃（様相8）。155は唇。先端には耳掻き、耳掻き部分の下部には三つ葉の模様がある。真鍮製。156・157は手桶の側板。ともに上部に把手を通す円形の孔がある。158は蓋または底板の一部。円盤状の形態で2/3程度切り取られた形状である。直線をなす側縁の2ヶ所に小孔がある。側縁にホゾを設けた部品を継ぎ足し、円形の蓋または底板としたと考えられる。

159～169は土師質土器井戸枠上面で出土した遺物である。159・160は弥生土器。159は壺、160は高杯脚部である。ともに弥生時代後期。161は肥前系陶器碗。17世紀後半～18世紀前半。162は備前焼擂鉢。口縁部外面に自然釉が掛かる。乗岡編年近世3期。163は陶器鉢。口縁端部に2条の沈線が巡る。164～166は土師質土器皿。いずれも灯明皿として使用されたもので煤が付着する。164はAⅢ形式、17世紀後半。165・166は薄手でA XII形式。167は土師質土器擂鉢。17世紀前半。168は馬形土製



153



154

153～155：井戸内



155

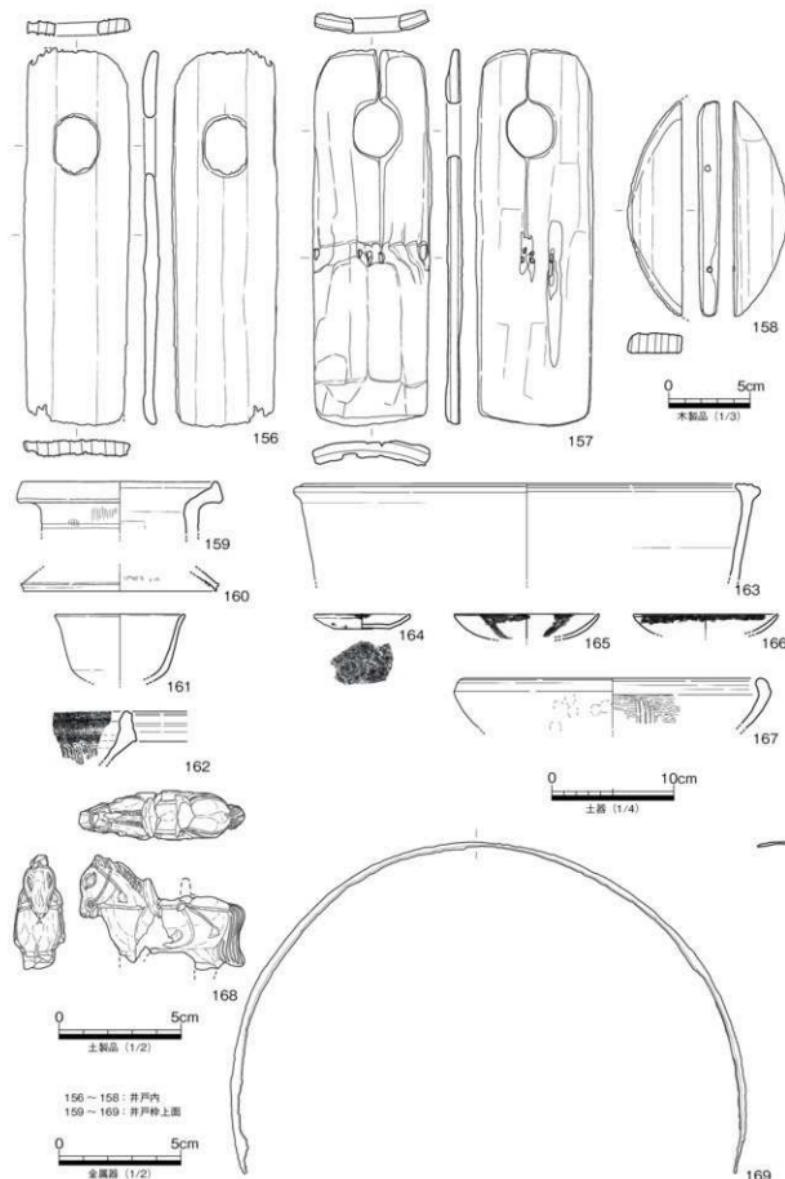
0 10cm

瓦 (1/4)

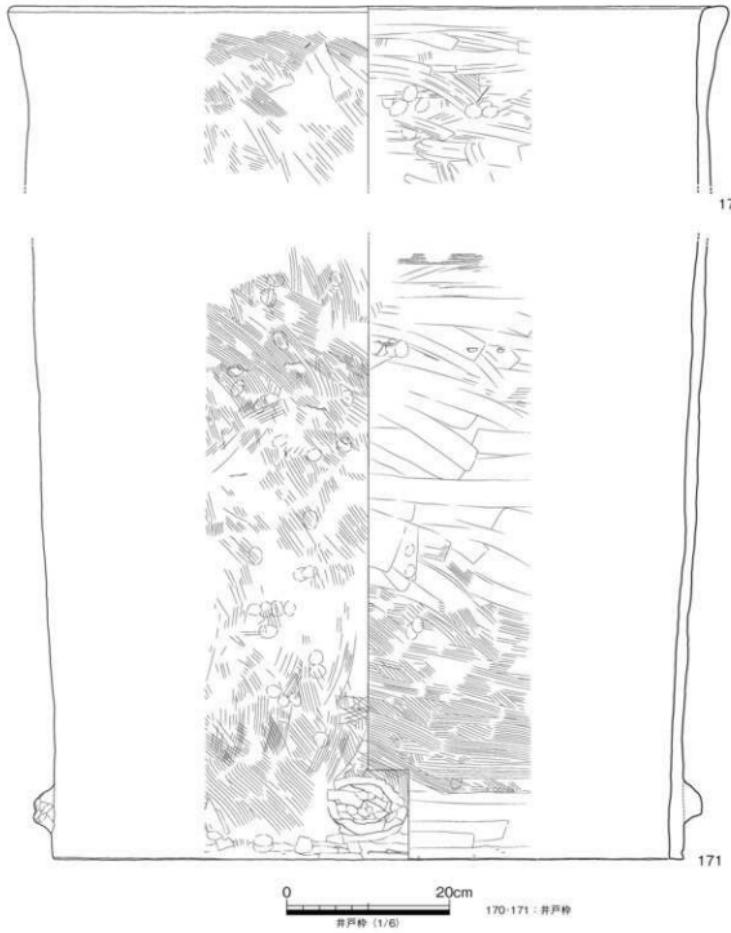
0 5cm

金属綱 (1/2)

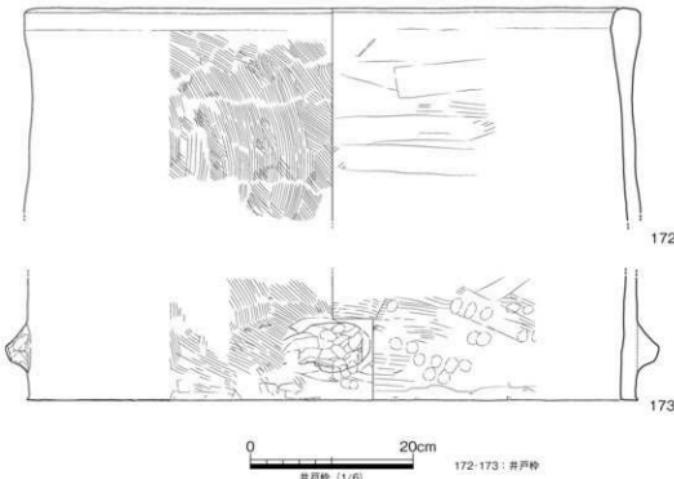
第31図 SE04出土遺物(1)



第32図 SE04出土遺物(2)



第 33 図 SE04 出土遺物 (3)



第34図 SE04出土遺物(4)

品。型打ち成型で褐色釉を掛ける。169は鉄製の容器の把手である。

170～173は土師質土器井戸枠である。それぞれ直接は接合しないが、胎土や色調などから170と171、172と173が同一個体と考えられる。ともに内面を指押さえ後ハケ、板ナデ、外面をハケで調整する。口縁端部を丸く収め、外面下部には2ヶ所に突起を持つ。大きさや形態、製作方法は類似するが、口縁端部の形状はやや異なる。170・171が下段の井戸枠、172・173は上段の井戸枠と考えられる。

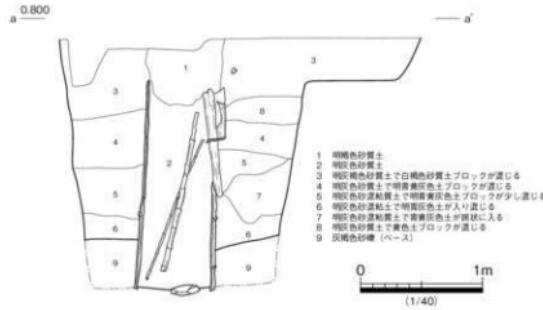
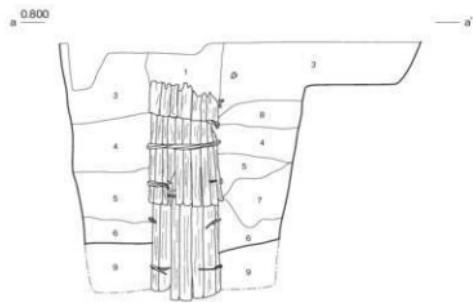
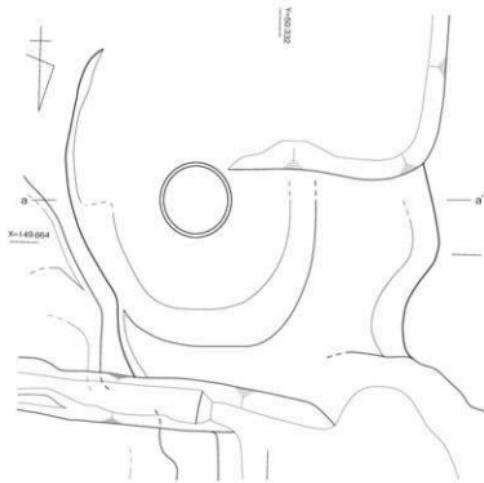
桶の井戸枠の設置は廻る可能性もあるが、土師質土器井戸枠や井戸内から出土した瓦から、最終的な遺構の埋没時期は19世紀前半～中頃（様相8）と考えられる。

SE05(第35・36図)

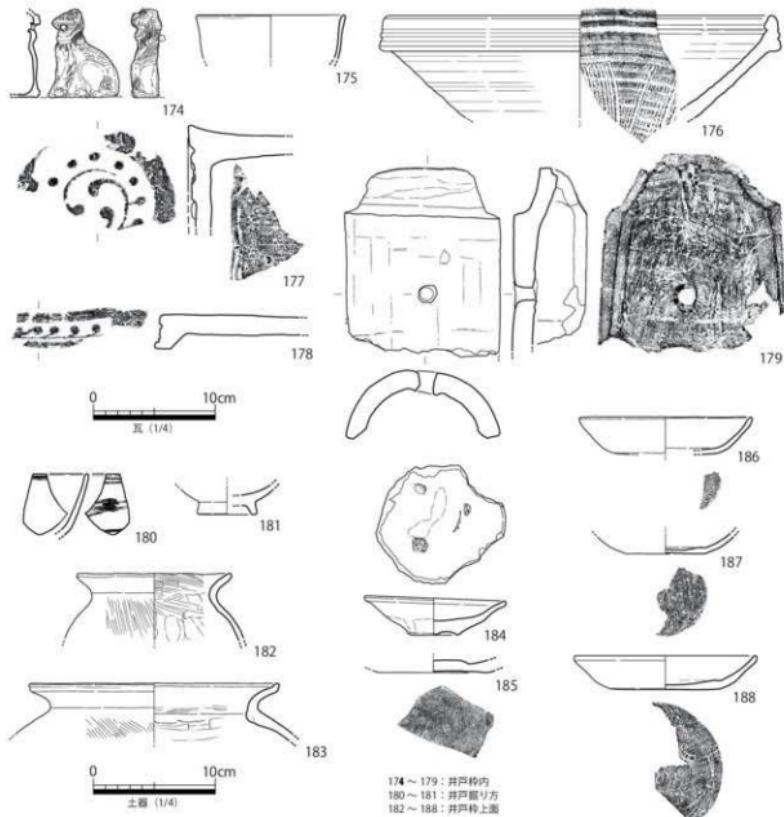
調査区中央付近、SE04の南西に隣接して検出した。北側でSK18によりわずかに消失し、南側は搅乱により消失する。SE04との遺構の前後関係はない。掘り方は約3m×3mの不整形で、西・北側は2段掘り状を呈する。そのやや東寄りに直径60cm、高さ約90cmの桶を3段に組んで井戸枠とする。井戸の深さ約2m、底のレベルは-1.4mである。桶内の埋土は明灰色砂質土の単層で、一度に埋め戻されたことがわかる。桶の中には竹が2本立てられる。井戸廃棄時の祭祀に関わる行為であろう。桶の井戸枠内及びその上部から貝、獸骨類が多く出土した。

174～179は井戸枠内から出土した。174は磁器狛犬。型打ち成型によるもの。175は肥前系陶器碗。176は備前焼擂鉢。口縁部下端に重ね焼き痕跡が残る。乗岡編年近世2a期。177は軒丸瓦。瓦当面の2ヶ所に范傷がある。178は軒平瓦。SD02、SD09、SK23に同范瓦があるほか、高松城跡西の丸町地区、高松城天守台など同文瓦が多数出土する。179は丸瓦。釘孔が1ヶ所残る。

180・181は掘り方から出土した遺物である。180は肥前系磁器碗。181は肥前系陶器碗。呉器手。182～188は井戸枠上面から出土した遺物である。182・183は弥生土器甕。弥生時代後期。184は肥前系陶器皿。見込みに砂目積痕を残す。185は備前焼壺底部。外面にヘラ描き「×」がある。186～188



第35図 SE05平・断面図



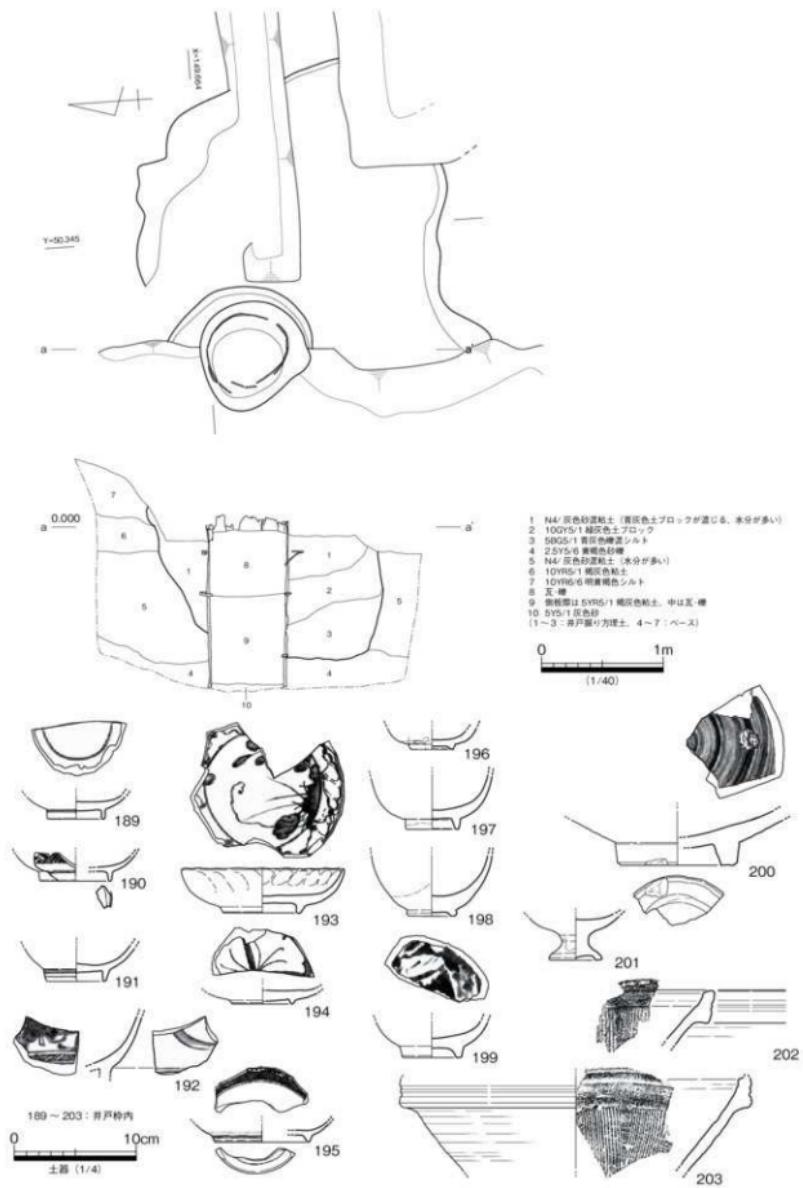
第36図 SE05出土遺物

は土師質土器皿。A X形式。

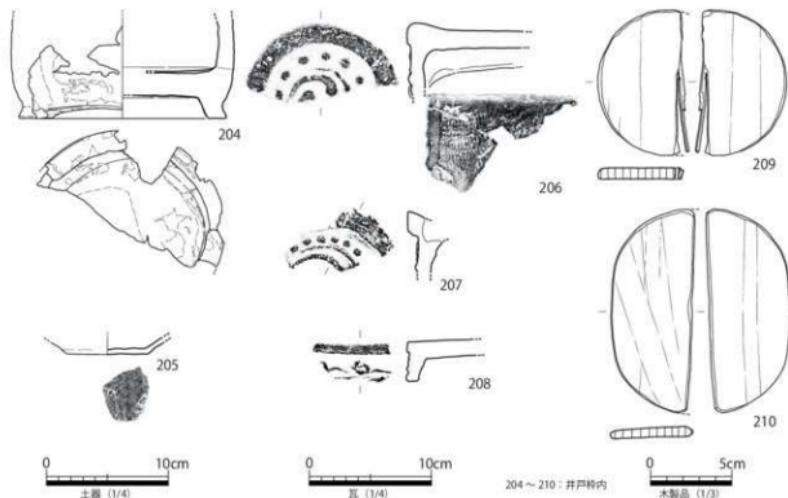
174の磁器狛犬は近代まで下る遺物であるが、他の遺物から、遺構の時期は18世紀前半と考えられる。174はSK18からの混入と考える。

SE06(第37・38図)

調査区東端付近で検出した。遺構の前後関係によりSK24より新しい。また、西半部は搅乱により消失する。掘り方は南東-北西方向に軸を持つ楕円形と考えられ、短軸2.5m程度、長軸2.5m以上である。井戸枠には直徑約65cm、高さ140cmの桶を据える。桶のタガが3段残る。井戸の深さは1.4m程度で、底のレベルは-1.3mである。井戸枠内は瓦や砾で埋められており、井戸を廃棄する際に不要となったものを投棄したものであろう。



第37図 SE06 平・断面図、出土遺物 (1)



第38図 SE06出土遺物(2)

189～210は井戸枠内から出土した遺物である。189～195は磁器。189～191は碗。189は景德鎮窯、190・191は肥前系である。192～195は皿。192は景德鎮窯。内外面ともに被熱のため器面が荒れている。193は輶轆成形と型打ち成型を併用する。194は高台径の小さいもので、初期伊万里である。見込みにイチヨウ文を施す。196～204は陶器。196～199は碗。196は瀬戸美濃、197～199は肥前系である。197には被熱痕がある。198は内面から体部外面に鉄軸を掛ける。199は刷毛目碗。200は肥前系刷毛目鉢で見込みに砂目積痕が残り、高台部1ヶ所に切れ込みを入れる。201は肥前系。仏飯器。内面～体部外面に鉄軸を掛ける。底部外面は削り出して高台とし、接地部分には糸切り痕を残す。202・203は備前焼擂鉢。ともに乗岡編年近世2b期。204は鉢。体部内面以外に厚い軸を掛け、高台部分は4等分したうち対角の2ヶ所を削り2脚で体部を支える形状である。205は土師質土器皿。AⅢ形式。

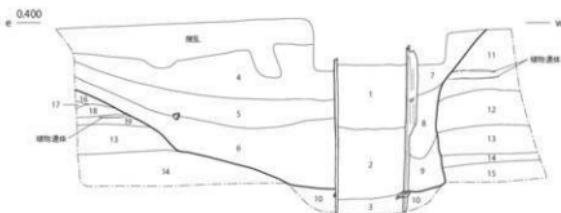
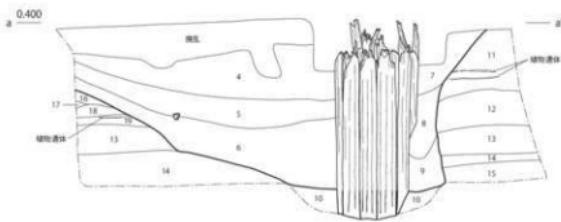
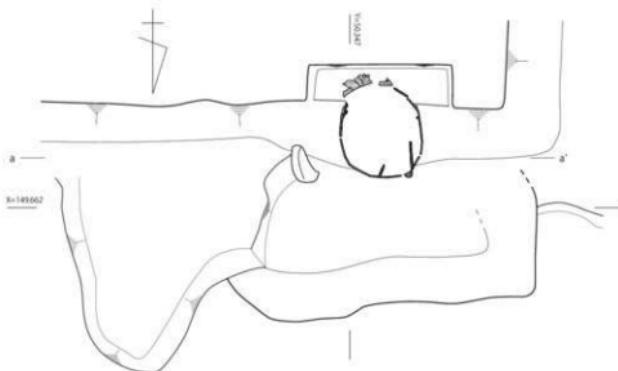
206・207軒丸瓦。207は珠文数が多く巴の尾が長く伸び、古い様相を呈する。丸瓦の剥離痕が残る。丸瓦先端に刻みなどは入れない。208は軒平瓦。209・210は底板または蓋。209は円形、210は梢円形である。

17世紀前半の出土遺物も含まれるが、出土遺物はおおむね18世紀前半（様相5）であり、遺構の時期も同時期と考えられる。

SE07(第39～46図)

調査区東部南端付近で検出した。遺構の前後関係によりSK24より新しい。井戸枠は直径65～70cm、長さ160cm程度が残る桶で、タガは検出できなかった。深さは約1.6m、底のレベルは-1.2mである。埋土中からは陶磁器類、瓦類の他、動物の骨や貝類が出土した。井戸を埋める際に主に瓦を投棄した層があり、遺物の大半はこの層から出土した。

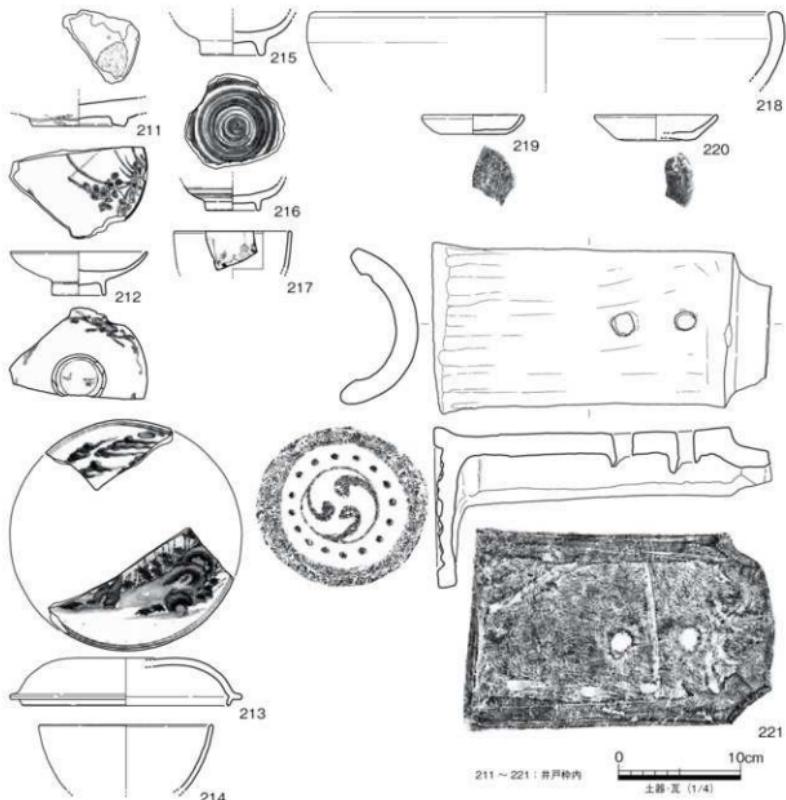
211～250は井戸枠内から出土した遺物である。211～213は肥前系磁器。211は大型の碗。内外面



19 7.5%V/V 灰色粘土泥砂
(4~9 : 5607.111 : 5624 黏土, 10:12~19:25=3)



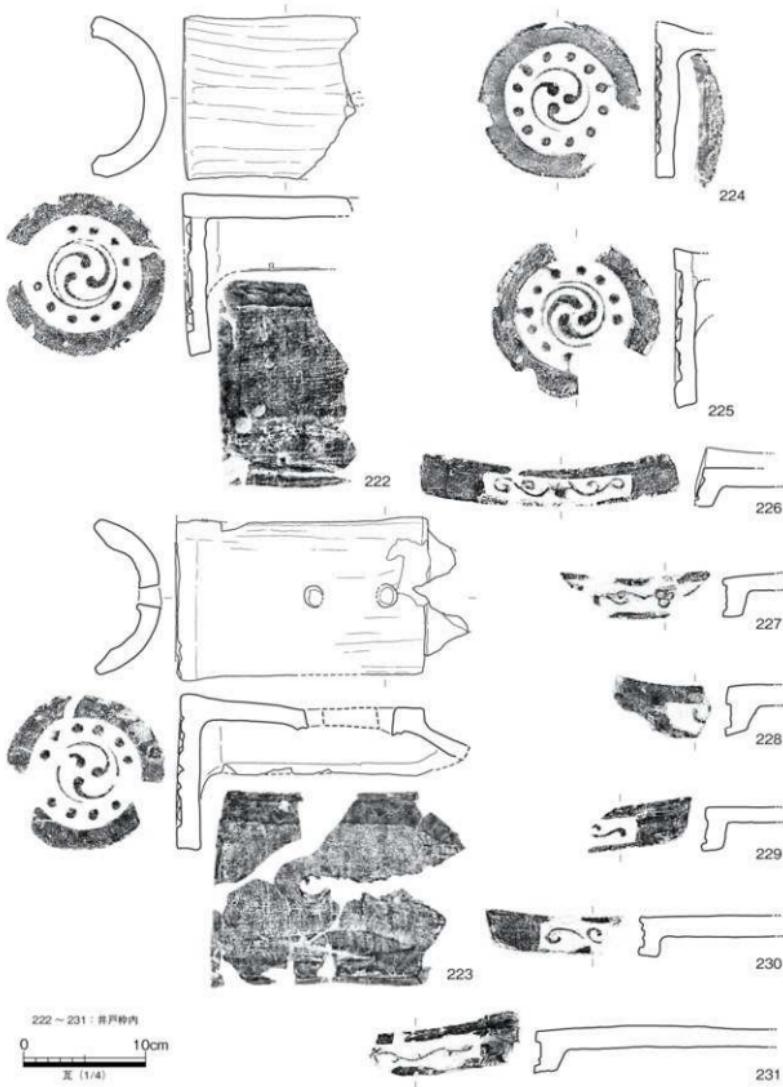
第39図 SF07平・断面図



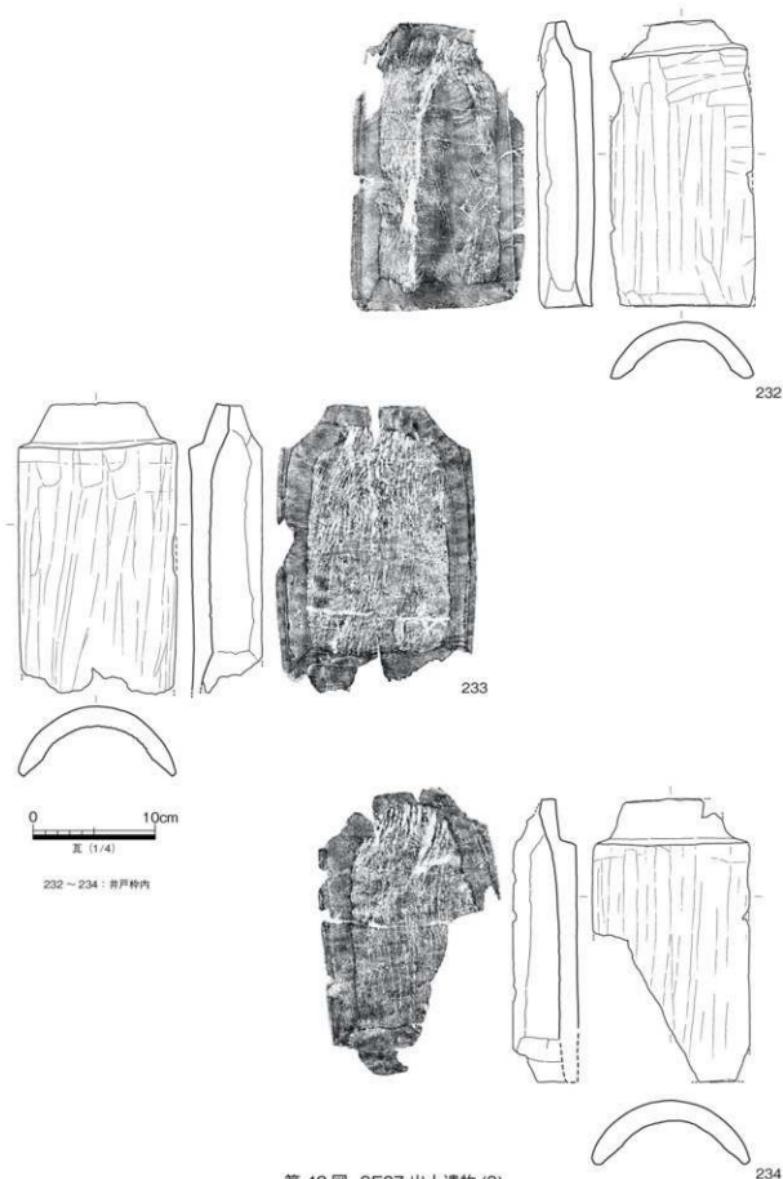
第40図 SE07出土遺物(1)

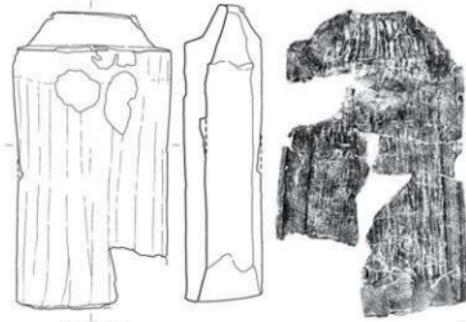
ともに砂目積痕が残る。212は皿。内面に草花文、高台裏には「太明」銘がある。口縁端部には口銷を施す。213は蓋。図の2片は直接接合しないが、器形、大きさ、染付の類似性から同一個体とした。人物と上部には雲を配する。釉は生掛けである。おおむね17世紀前半。214～217は肥前系陶器碗。214・215は呉器手、216は刷毛目碗、217は京焼風陶器である。いずれも18世紀前半（様相5）。218は陶器備前焼大平鉢。219・220は土師質土器皿。219はA III形式、220はA V形式で、17世紀中葉～後半（様相3～4）である。

221～225は軒丸瓦。221は巴の尾が互いに連結する。丸瓦の凹面にはコビキB痕が残る。17世紀前半～中葉（様相2～3）。222～225は珠文数12、瓦当径は13cm程度、文様区径は9～10cmである。222は、巴文に圓線が巡り、巴文の尾が圓線に付く。歴博地点資料530と同文と考えられる。17世紀初頭（様相1）か。223～225は瓦范は違うものの、いずれも巴の尾は連結せず、大きさ、文様構成も同じで、17世紀後半（様相4）の様相を呈する。223は瓦當に全長24cm程度の小形の丸瓦が取り付く。

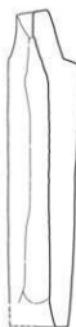
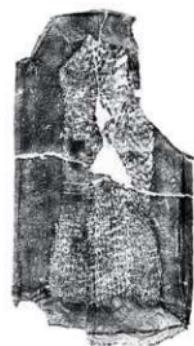


第41図 SE07 出土遺物(2)





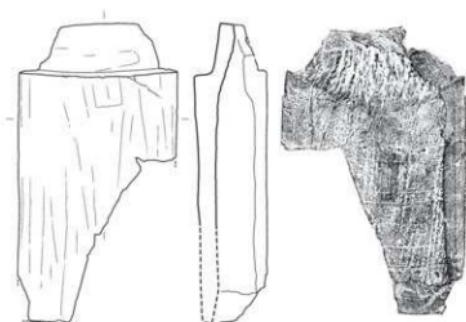
235



236

0
10cm
瓦 (1/4)

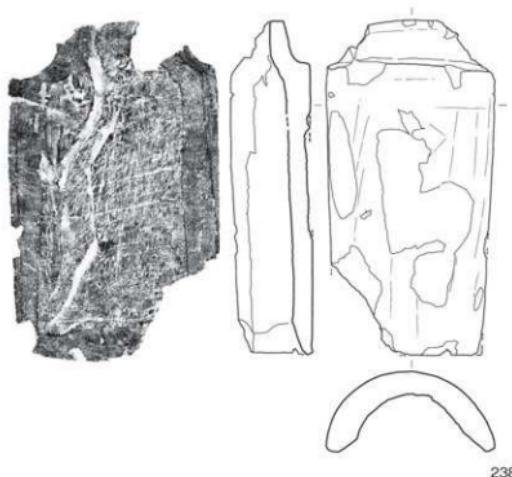
235～237：井戸内



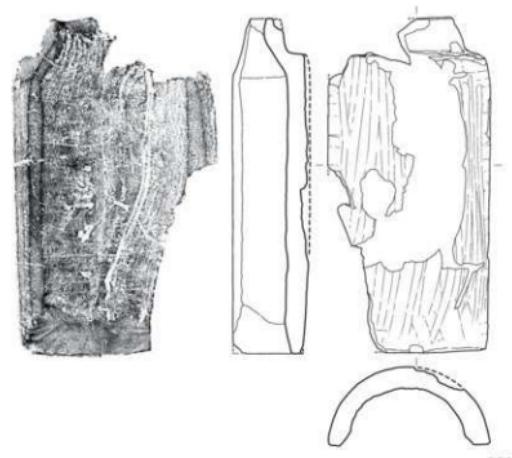
237



第43図 SE07 出土遺物(4)



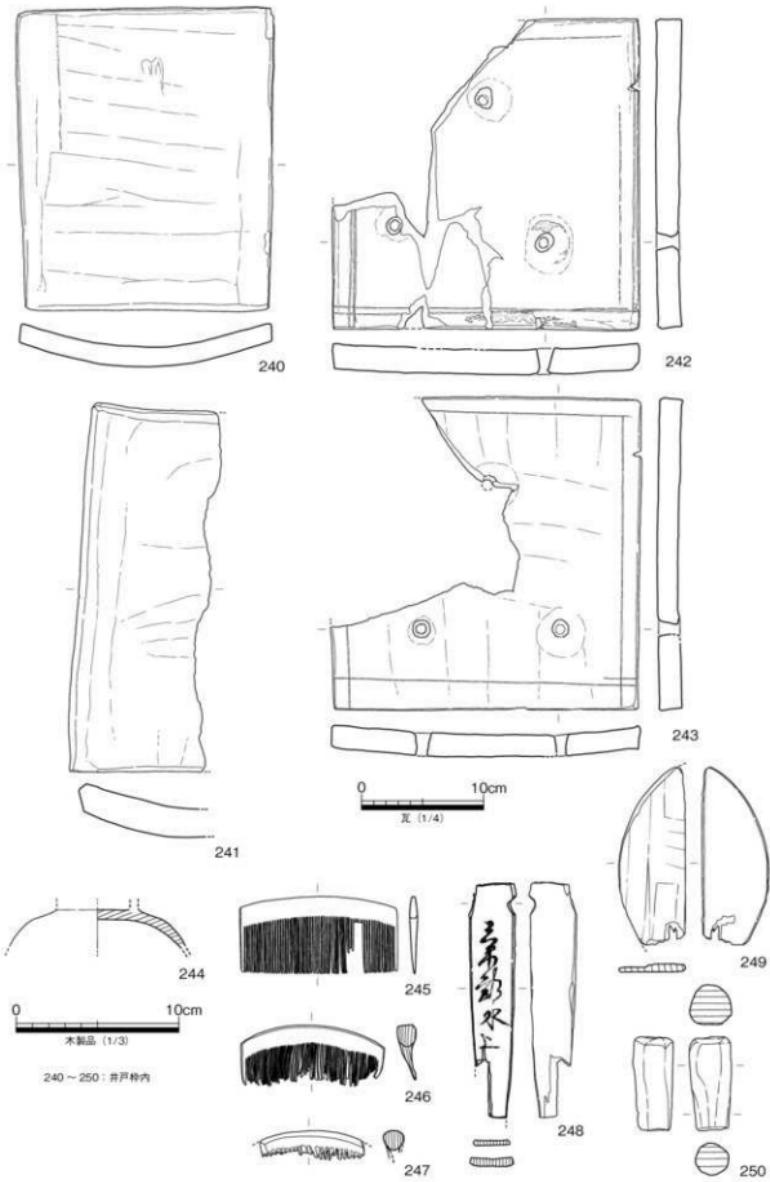
238



239

238-239：井戸内
0 10cm
瓦 (1/4)

第44図 SE07出土遺物(5)

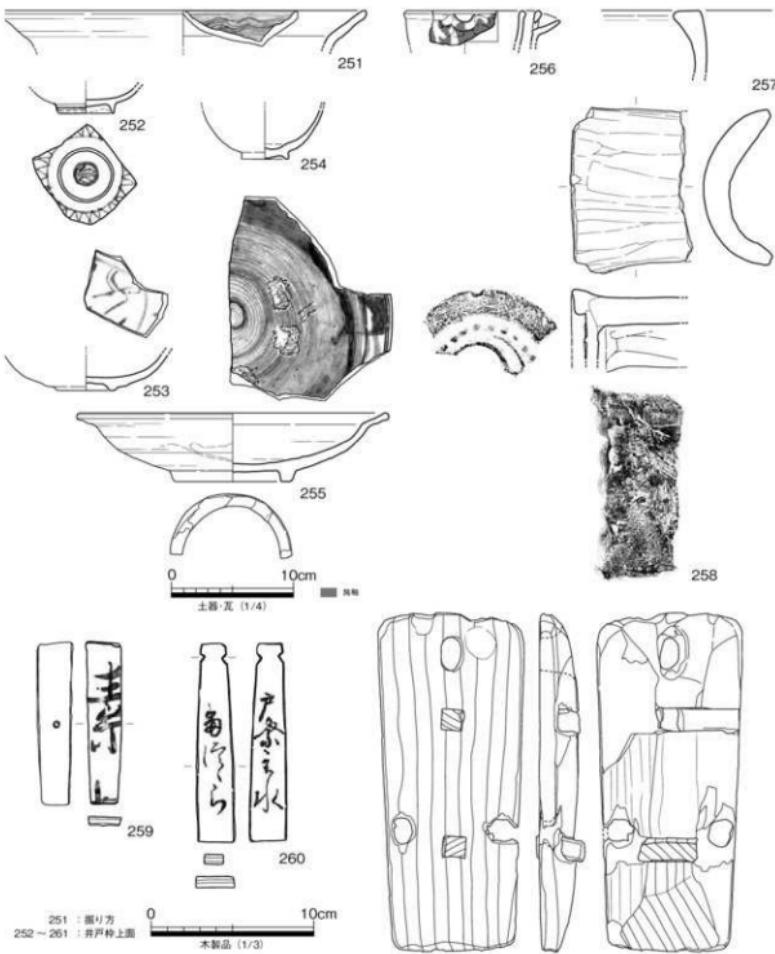


第45図 SE07出土遺物(6)

225 は范の傷みが激しい。

226～231 は軒平瓦である。226 は高松城跡（西の丸町地区）II（83）に類似し 18 世紀前半（様相 5）に位置付けられる。227 は 3 葉の中心飾りがある。228～230 は唐草部分しか残らず、詳細は不明である。231 はわずかに中心飾りが残る。

232～239 は丸瓦である。232～235・237 は全長 23.2～24.4cm の小型の丸瓦、236 は全長 26cm、238・239 は全長 27cm 程度の中型の丸瓦である。軒丸瓦 221 は中型丸瓦、軒丸瓦 223 は小型丸瓦が付



第 46 図 SE07 出土遺物 (7)

く。小型丸瓦は側縁の面取りの幅や厚さも類似し、おおむね同一の規格と考えられる。

240・241は平瓦。240は小型丸瓦に対応する大きさである。241は側縁を凹面・凸面の2方向から面取りしており、やや大型である。242・243は海鼠瓦。同じ規格の瓦でいずれも3ヶ所に焼成後穿孔する。裏面には4辺それぞれ端から1.2~2.2cmの位置にヘラで直線を描く。243の孔の1ヶ所には鉄釘の銷が残る。

244~250は木製品である。244は漆碗蓋。内外面に赤漆を塗る。245~247は横櫛。245は漆が塗布される。247は櫛の歯が粗い。248は荷札木筒。片面に「三木郡水上」と読める。249は蓋または底板。250は栓。直径2cm程度の孔を塞ぐ。

251は井戸掘り方から出土した遺物である。肥前系陶器大皿。内面に刷毛目が施される。

252~261は井戸枠上面から出土した遺物である。252・253は肥前系磁器。252は碗。外面に一重網目文、高台裏に銘を描く。253は皿。高台径の小さい初期伊万里で、高台裏に砂が付着する。焼成不良で釉の発色が悪い。254~256は肥前系陶器。254は碗。255は刷毛目皿の大皿で、見込みに砂目積み痕を持つ。高台部1ヶ所に切れ込みを入れる。256は片口。外面に鉄釉、その上から白色釉を掛ける。257は瓦質土器火鉢小片。258は軒丸瓦。

259~261は木製品。259・260は木筒。259は中央付近に孔があり、片面に「主參」の墨書がある。260は荷札木筒。上部に切れ込みを入れる。片面に「戸祭主水」、片面に「番つづら」の墨書がある。261は下駄。歯は差し込み式で、差し込みの出っ張りが下駄の表に見える露卯下駄である。後ろの歯の一部が残る。親指付近に圧痕が残る。

遺物の時期には17世紀前半（様相2）と17世紀後半~18世紀前半（様相4~5）のものがあるが、SK24との関係から遺構の時期は18世紀前半としたい。

260の「戸祭主水」は、寛文元年（1661）4月11日 公令為軍役人数割（香川県立文書館史料集1 高松藩御令條之内書抜 上巻 P62）に同名の記載があり、総300石と記載がある。17世紀後半の人物である。

④土坑

SK01（第47図）

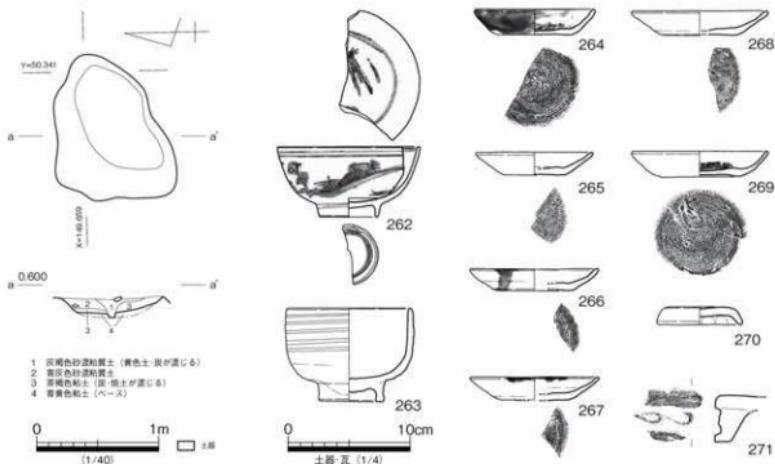
SD04の東端で検出した。楕円形で長軸1.2m、短軸0.84m、深さ12cm、断面形状は浅い皿型である。埋土下部に炭を含む。陶磁器類や土器、瓦などが出土した。SD04とは何らかの関係があると考えられ、SD04で報告した27はSK01出土遺物と接合した。

262は景德鎮窯の磁器碗。263は瀬戸美濃産陶器碗。体部外面に5条の凹線を施す。いずれも17世紀前半（様相2）。264~269は土師質土器皿。底部はいずれも回転糸切りにより、A V形式で様相3である。264・266・267・269は煤が付着しており、灯明皿として使用したと考えられる。270は焼塙壺蓋。手捏ねで在地産である。

271は軒平瓦。上向きに2転する唐草文で、高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ軒平瓦26と唐草文の形態が類似する。瓦当上面を面取りする。17世紀初頭（様相1）と考えられる。

陶磁器・瓦は古い様相を示すものがあるものの、遺構の時期は土師質土器の時期である17世紀中葉と考えられる。

SK04（第48図）



第47図 SK01 平・断面図、出土遺物

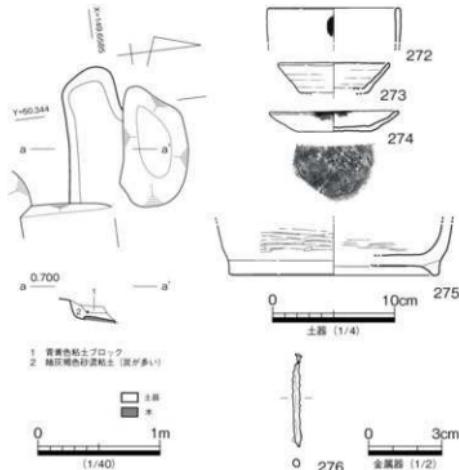
調査区東南隅付近で検出した土坑である。北・東は擾乱により消失する。幅45cm以上、深さ12cm程度で、埋土の底部は炭が多く含む粘土、その上部はベース土のブロックで埋められる。埋土中からは陶器片・土器片・板片等が出土した。

272は肥前系陶器碗。外面には鉄絵を施す。273・274は土師質土器皿。273はA IV形式、274はA V形式。様相3と考えられる。274は口縁端部に煤が付着し、灯明皿として使用したことがわかる。275は瓦質土器火鉢。276は針状の金属製品である。

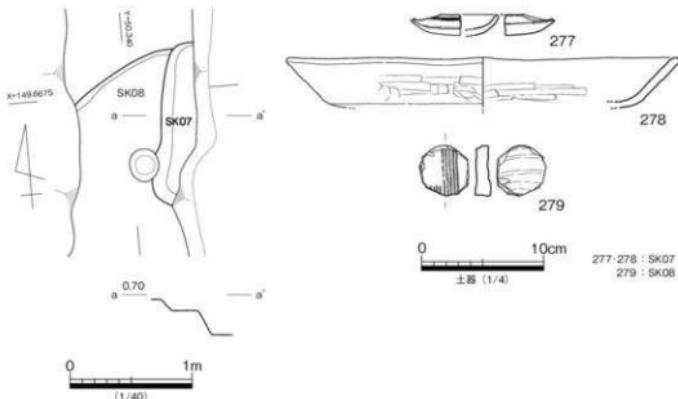
出土遺物により遺構の時期は17世紀中葉と考えられる。

SK07・SK08(第49図)

調査区東部で重なり合って検出した土坑である。西側・東側とも擾乱により消失する。



第48図 SK04 平・断面図、出土遺物



第49図 SK07・SK08 平・断面図、出土遺物

SK07は大部分が消失するため、全体の規模、形状は明らかではないが、長さ1.4m以上、深さ9cm程度である。埋土中からは磁器・土師質土器片が出土した。

SK08はSK07により東部が消失する。全体の規模、形状は明らかではないが、幅2m以上、深さ8cm程度である。埋土中からは陶器・土師質土器・瓦片が出土した。

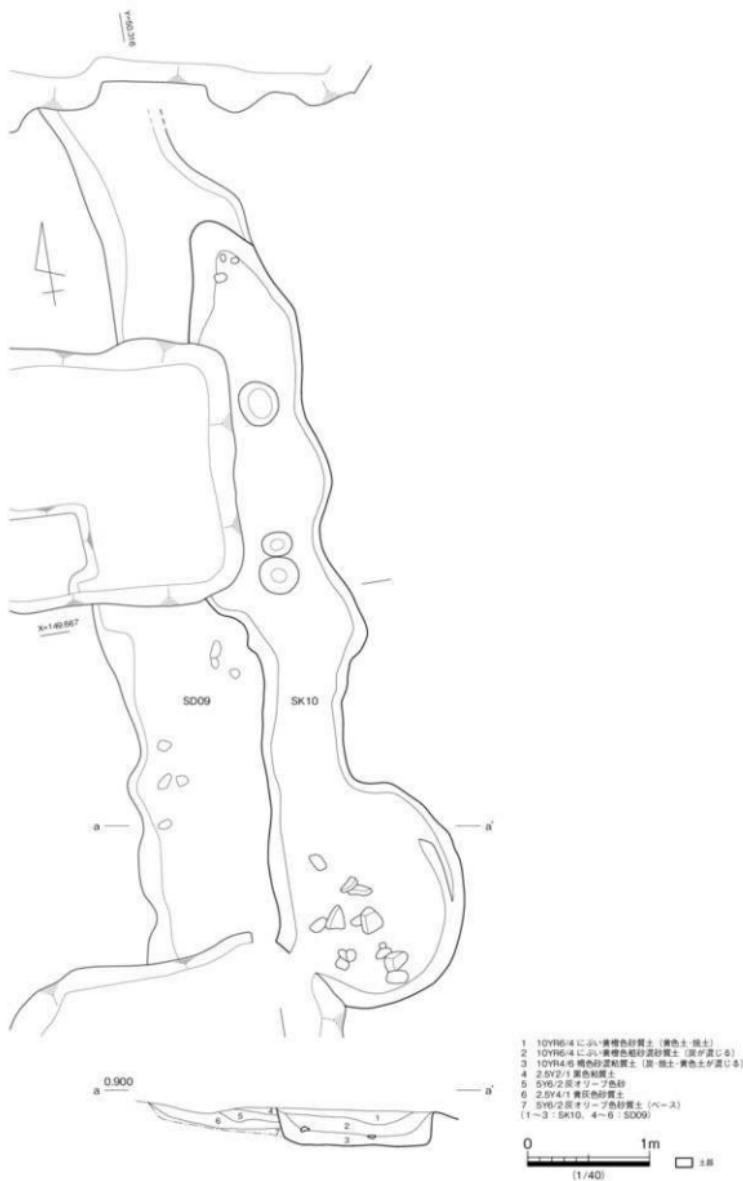
277・278はSK07から出土した遺物である。277は磁器皿。景德鎮窯。278は土師質土器焰烙。279はSK08から出土した遺物である。円盤状土製品。備前焼擂鉢からの転用品で、擂鉢は乗岡編年近世2期のものである。

SK10(第50～52図)

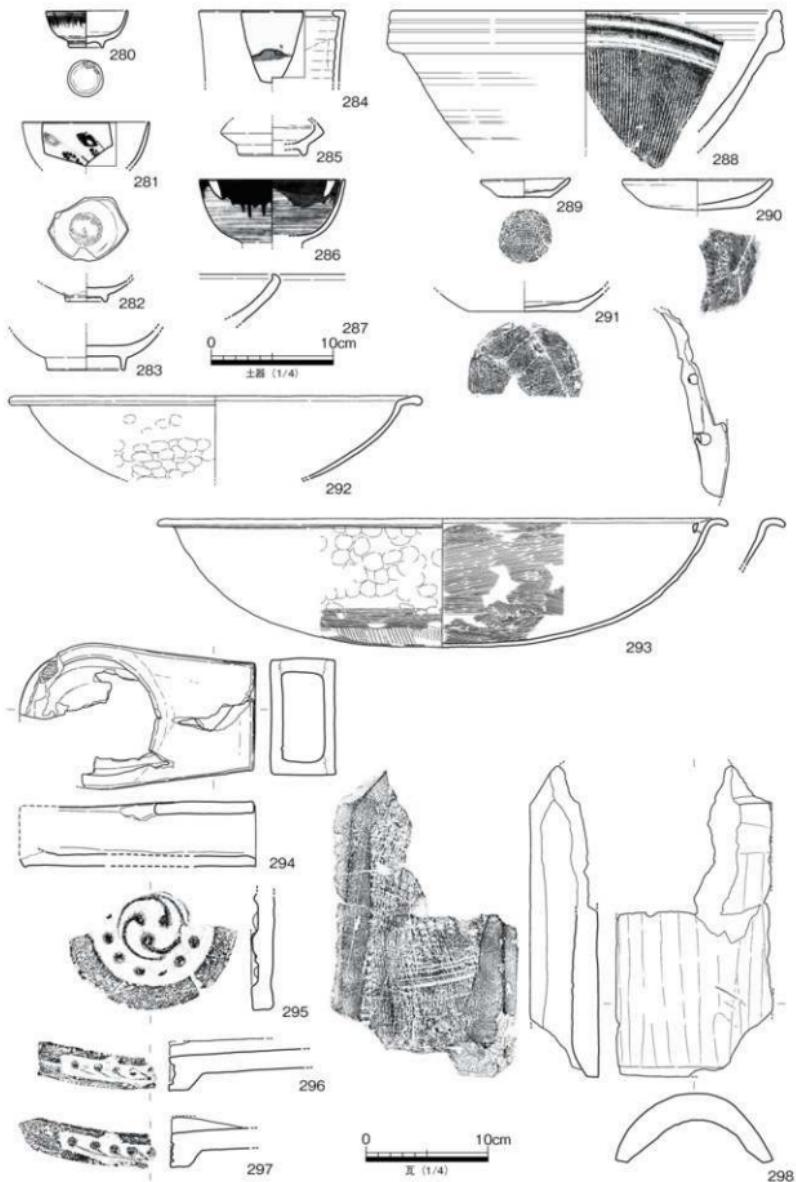
調査区西部で検出した南北に細長い土坑である。遺構の前後関係によりSD09より新しい。長軸は約6.8m、幅は約90cmで南端部のみ直径150cm程度の円形を呈する。深さは30cm程度、断面は逆台形である。埋土はベースブロックに炭や焼土が多く混入する。高松城跡(西の丸町地区)の調査では、高松大火(1718)などによる被災後の整理に伴う土坑が報告されており、SK10も同様の遺構の可能性を考えられる。位置関係からはSD09廃絶直後の廃棄土坑とも考えられる。埋土中からは多くの遺物が出土した。

280～285は肥前系磁器。280は小杯。外面に雨降り文を描く。高台部に砂が付着する。281～283は碗。282は見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、砂が付着する。283には漆緞ぎの痕跡が残る。284は火入れ。285は青磁の花生である。286は肥前系陶器碗。刷毛目碗で長崎・現川窯の製品と考えられる。287・288は備前焼。287は大平鉢。288は擂鉢。乗岡編年近世3期と考えられる。289～294は土師質土器。289～291は皿。289は底部に静止糸切痕を残す。A II形式。290・291はAX形式。292・293は焰烙。293は内耳を残す。294は七輪の風口。

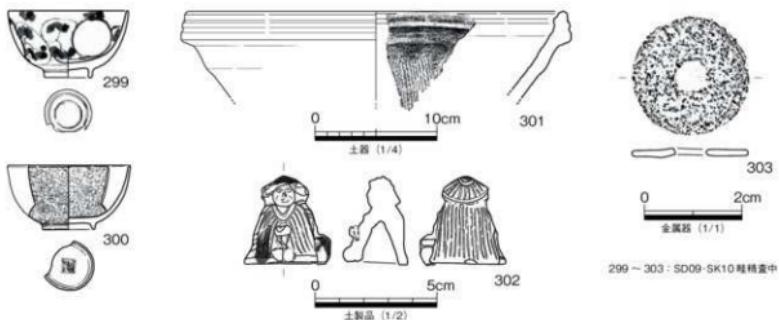
295は軒丸瓦。巴の尾が連結する部分としない部分がある。296・297は三つ葉の中心飾りに左右に3転する唐草文を配する。SD09、SK23などに同范瓦がある他、高松城跡(西の丸町地区)、高松城天守台など城下の調査で類例が多い。298は丸瓦。全長27cm程度の中型品と考えられる。



第50図 SK10 平・断面図



第51図 SK10出土遺物(1)



第52図 SK10 出土遺物(2)

292・294などやや新しい様相を示すものもあるが、これらは擾乱からの混入と考え、遺構の時期はおおむね18世紀前半頃と考えられる。

299～303はSD09との土層観察用の珪を精査中に出土した遺物である。299・300は肥前系磁器碗。299は唐草に円窓を組ませた文様を3単位巡らせる。300は高台内に「渦福」銘がある。301は備前焼擂鉢。乗岡編年近世3期。302は土師質土器人形。僧形で緑色釉を掛ける。303は銭貨。鋸がひどく銭種は不明。

302は新しい様相を示すが、他の遺物はおおむね18世紀前半と考えられる。302は擾乱などからの混入と考える。

SK11(第53・54図)

調査区西部、SK10の約4m西側で検出した。遺構の前後関係によりSD02より新しい。不整円形で、直径21～23m、深さは40cm程度、断面形状は浅い皿状である。土坑南半部の底付近には瓦や礫の集中部があった。廃棄土坑と考えられる。

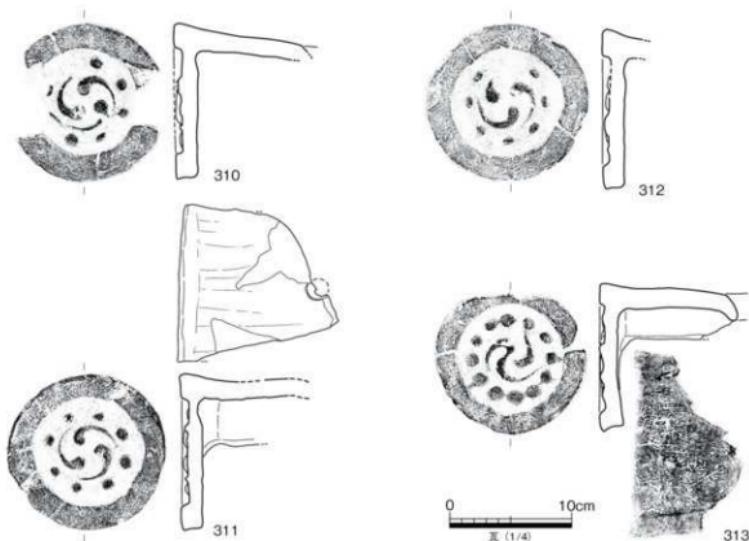
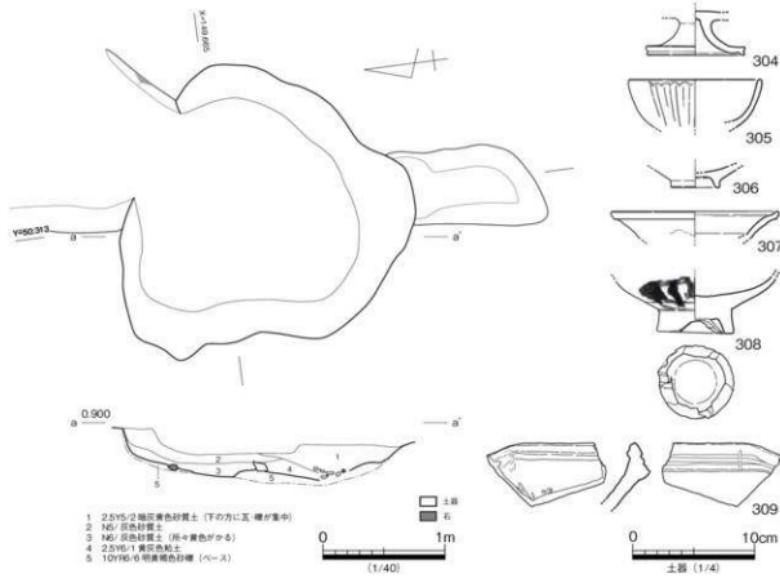
出土遺物のほとんどは土坑南半部底付近から出土した。瓦類が多数を占める。

304は須恵器高杯。305は青磁碗。外面に退化した鎧連弁がある。龍泉窯。16世紀前半～中頃。306～309は陶器。306～308は肥前系。306は碗。内外面とも鉄軸を施す。307は溝縁皿。308は鉢。高台部3ヶ所に切れ込みを入れる。309は備前焼擂鉢。乗岡編年近世2b期。

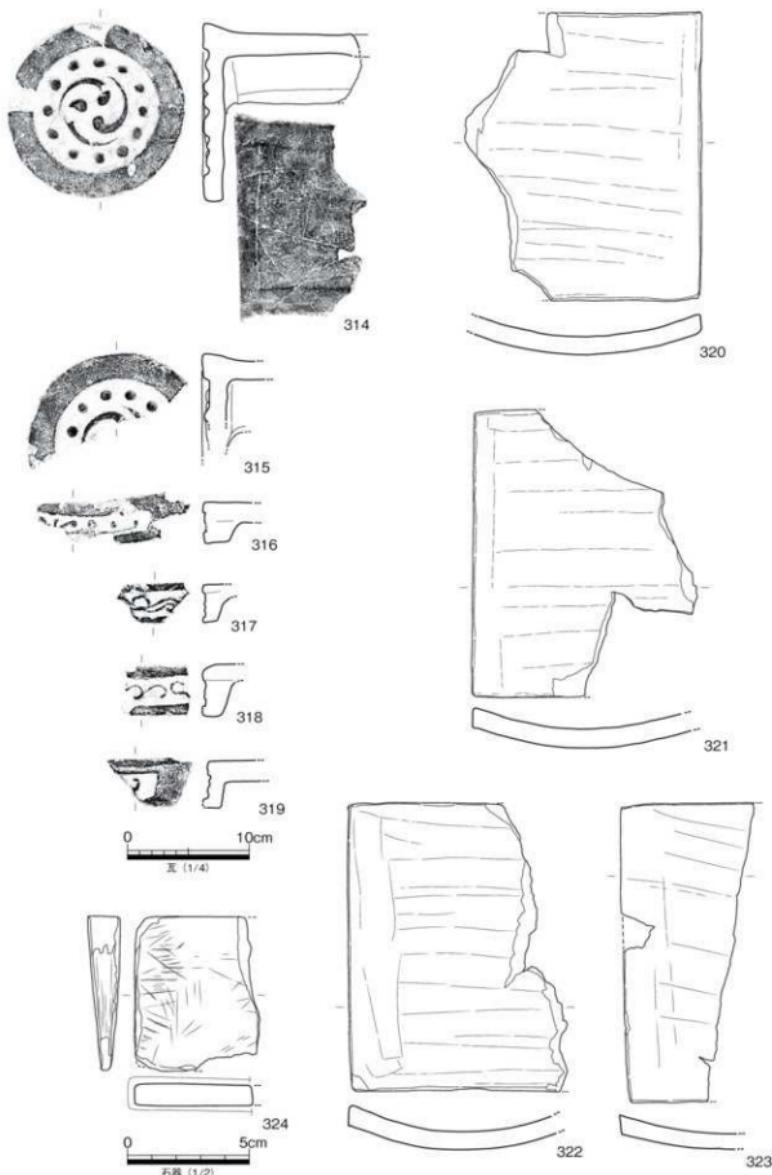
310～315は軒丸瓦。310～312は同范。瓦当径が13cm前後でやや小振りである。313は瓦当径が12.2cmでさらに小振りで、范傷やへたれが多く残り、瓦范の傷みが著しい。314・315は珠文数・間隔、巴の巻き方、瓦当径などが類似することから同文の可能性がある。316～319は軒平瓦。316はSK10、SK23などに同范の瓦がある他、高松城跡(西の丸町地区)、高松城天守台など城下にも同文瓦が多い。317は丸い中心飾りに唐草文が付く。318は3転する唐草文が残る。歴博地点資料165(様相2～3)に類似する。319は瓦当右端小片で文様は不明である。320～323は平瓦。いずれも全長23.5cm前後の小型平瓦で、同規格の瓦と考えられる。凹面は横方向の板ナデを施し、最後に横縁辺部に縦方向の板ナデを施す。

324は砥石。残存部分全体に使用による摩滅痕が残る。

陶磁器類は数量が少ないが、おおむね17世紀第2四半期～後半、瓦の時期は17世紀後半前後が想定



第53図 SK11 平・断面図、出土遺物(1)



第54図 SK11出土遺物(2)

される。

遺構の時期は、出土遺物及びSD02を切り込むことから17世紀後半と考えられる。

SK12(第55～58図)

調査区西部で検出した大型の方形土坑である。北東隅に張り出しがある形状で南側は調査区外へ延びる。長辺8.5m以上、北東の張り出し部分1.9m程度、短辺8m、深さは約30cmで、断面形状は浅い皿状である。遺構の上面には擾乱があり、擾乱を除去して検出した。遺構の南東隅付近は擾乱により消失する。

遺構は区画溝の可能性の高いSD08を壊している。SD08による区画が廃絶する際の廃棄あるいは整地土坑と考えられようか。

土坑の南東部では南北方向の石の集中部分を検出した。SK12により壊された石組溝の痕跡の可能性もあるう。

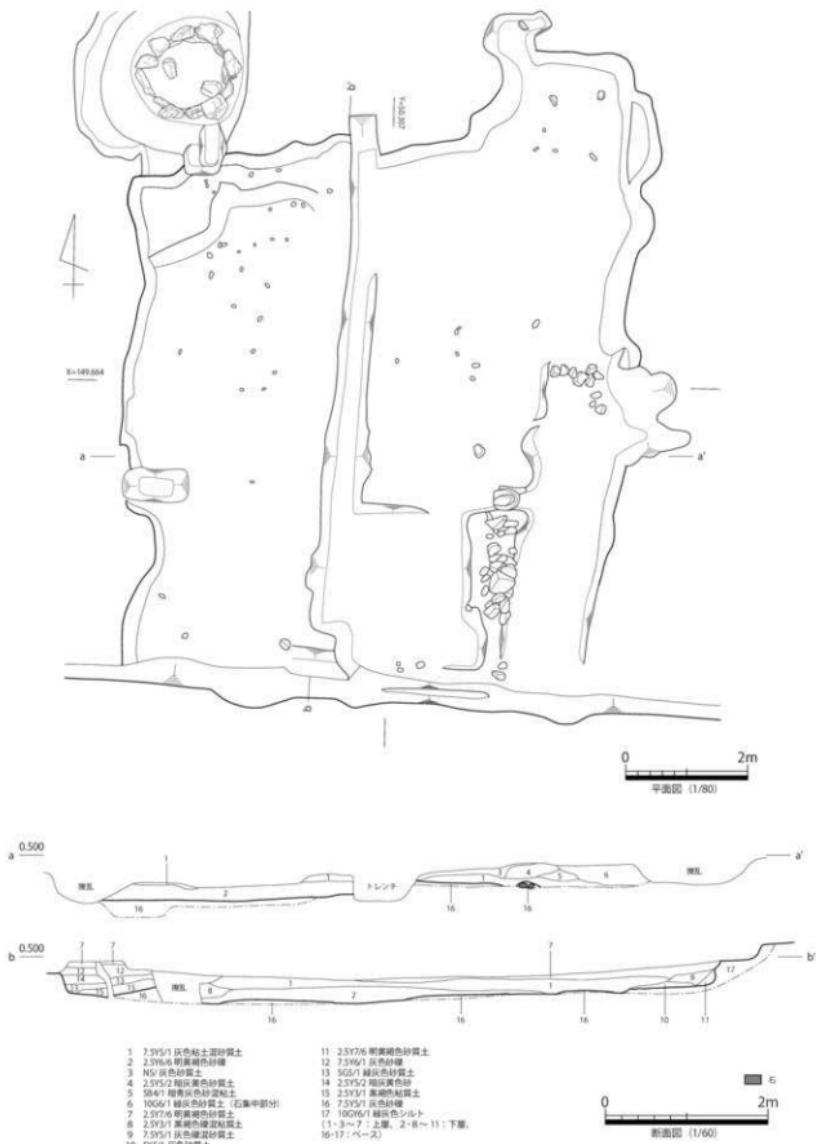
遺物は、おおむね上層・灰色粘土混砂質土、下層・明黄褐色砂礫に分けて取り上げた。上層出土遺物には擾乱からの混入遺物が含まれる可能性も考えられる。

325～340は下層から出土した遺物である。325・326は磁器。325は小杯で景德鎮窯。326は肥前系で皿小片。口縁端部には口銷を施す。327～334は肥前系陶器。327・328は碗。327は見込みに砂目積を残す。328は呉器手。329～332は皿。いずれも見込みに砂目積痕を残す。329は段皿。333・334は円盤状に加工したもの。肥前系陶器碗の体部を完全に丁寧に打ち欠き、高台部も大半を打ち欠く。326・328は18世紀前半であるが、その他は17世紀前半の様相を示す。

335・336は軒丸瓦。ともに左巻き巴文、珠文が12個と考えられ、瓦当径は12cm強と考えられる。17世紀後半（様相4）。337・338は軒平瓦。337は瓦当右半分が残るもので、上向きに巻く唐草文の下部に直線的に伸びる唐草文を配する。高松城跡（西の丸町地区）II軒平瓦13に類似する。18世紀前半（様相5）。339は丸瓦。全長23cm程度の小型のものである。340は鬼瓦。鬼の顔上半部が残る。鬼面が取り付く背面の部分は剥離する。

341～359は上層から出土した遺物である。341～345は磁器。341・342は景德鎮窯。341は小杯、342は碗である。343～345は肥前系。343・344は碗。343は複数条の鍋と文字を配す。344は外面上に2単位の唐草文を施す。ゆがみが著しい。345は皿。高台径が小さい初期伊万里。346～351は陶器。346・347は肥前系陶器皿。いずれも見込みに砂目積痕を残す。347は高台部の1ヶ所を打ち欠く。348・349は茶瓶（349）およびその蓋（348）でセットと考えられる。京焼。350は備前焼擂鉢。口縁端部外面に溶着痕が残る。乗岡編年近世2b期。351は器種不明。図示した2片は直接接合しないが、特徴ある形状と色彩から同一個体であることは確実である。器形の向き及び破片の間隔は想定であり、実際と異なる可能性がある。図面上位に亀甲文、上位から中位に2条1対の刻み目突帯が2ヶ所で残り、他は一方向の刷毛が全体に施される。図面上位に円孔が1ヶ所、中位で方形の孔が1ヶ所残存する。透明釉、青色釉が掛け分けられる。胎土から理兵衛焼の可能性がある。青色釉が掛けられることから19世紀前半以降と考えられる。352は土師質土器。有溝円孔土錐。円孔を4ヶ所に施し、縦方向の中心線附近を溝状に窪ませる。

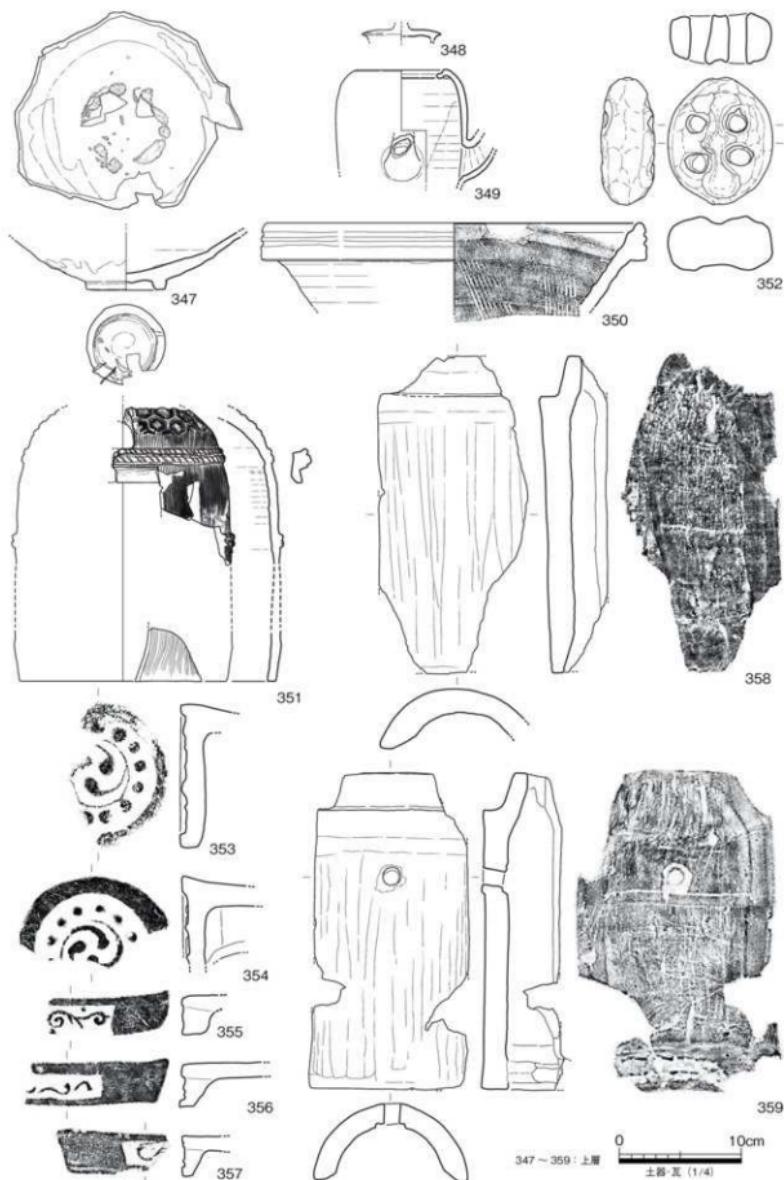
353・354は軒丸瓦。353は巴の尾が互いに連結し、團線状になる。珠文は12個と考えられる。17世紀前半～中葉（様相2～3）。355～357は軒平瓦。356は2転する唐草が残る。中心飾りは残らないが、高松城跡（西の丸町地区）II 67・174に類似すると思われ、17世紀中頃（様相3）と考えられる。358



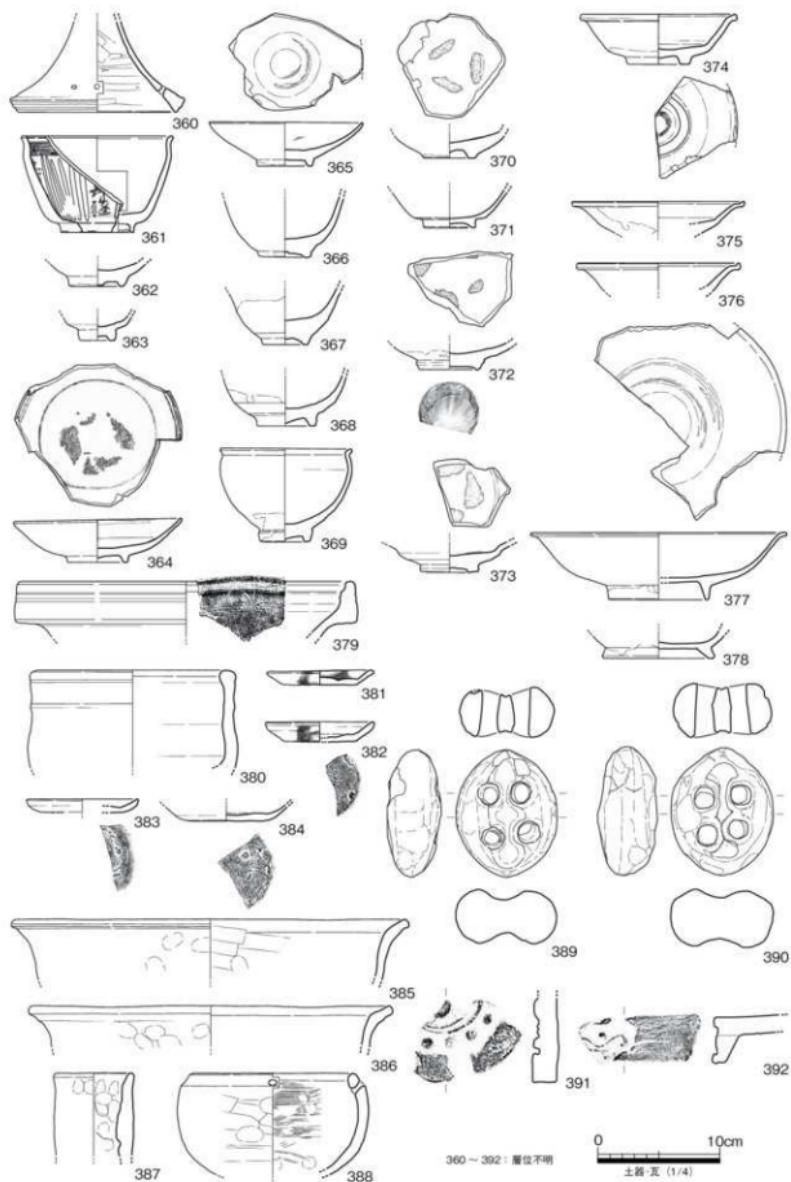
第55図 SK12平・断面図



第 56 図 SK12 出土遺物 (1)



第57図 SK12出土遺物(2)



第58図 SK12出土遺物(3)

は丸瓦。全長26cm程度の中型品である。359は軒丸瓦。丸瓦部分はほぼ完存するが、瓦当部分は完全に剥離し、瓦当文様は不明である。全長26cm程度の中型品でやや後方に釘孔が残る。

上層の陶磁器類の大半は17世紀前半～後半であるが、351は19世紀代まで下る。

360～392は層位不明の遺物である。360は弥生土器高杯。弥生時代後期。脚部には2孔1対の円孔が1ヶ所に残る。香東川流域産土器。361～365は肥前系磁器。361は器面に6条1組の鎬と「壽福」の文字が入る。高台置付に砂が付着する。362は焼成不良。364・365は皿。364は見込みに砂目積を、365は見込みに蛇の目剥ぎを施す。17世紀前半。366～370、372～378は肥前系陶器。366～370は碗。369は肥前内野山窯の天目碗。高台置付部分に糸切り痕を残す。17世紀中頃。370は見込みに砂目積を残す。369以外は17世紀前半。371は京焼碗。17世紀後半。372～378は皿。372・373は見込みに砂目積を残す。372は高台置付に糸切痕を残す。17世紀前半。374～376は溝縁皿。374は高台内に円形の墨書を描く。377は見込みに蛇の目釉剥ぎを施し、その部分に溶着痕が残る。377・378は18世紀代である。379・380は備前焼。379は擂鉢。乗岡編年近世2a期。380は建水。381～390は土師質土器。381～384は皿。381・382はAV形式。いずれも煤が付着し、灯明皿として使用されたことがわかる。383はAV形式、384はAX形式である。385・386は鍋。いずれも外面に煤が付着する。387は焼塙壺。手捏ねにより作製された在地産のものである。388は鉢。外面には煤が付着する。口縁端部1ヶ所に孔がある。389・390は有溝円孔土錘。いずれも縱方向中心線付近を溝状に窪ませ、4ヶ所に円孔を設ける。

391は軒丸瓦。392は軒平瓦。

上層からは17世紀前半～後半の遺物、下層からは17世紀中頃の遺物が多く出土した。陶磁器類は多く出土しているが、瓦類の出土量は他の遺構と比較しても少ない。

前述のように、SK12は街路を区切る可能性のあるSD08を壊しているので、SK12はSD08廃絶後の廃棄土坑である。SD08が廃絶し、屋敷地がSK12の西側まで広がったとすれば、SK12は屋敷地割の改変が行われた際に周囲の屋敷地から陶磁器類が投棄され、整地された痕跡ではないだろうか。SD08は存続期間は17世紀後半～18世紀前半頃、SK12はそれ以降の屋敷地割の変更に伴うもので、遺構の時期は18世紀前半～中葉以降、最終的な埋没は理兵衛焼の19世紀代まで下ると考えられる。

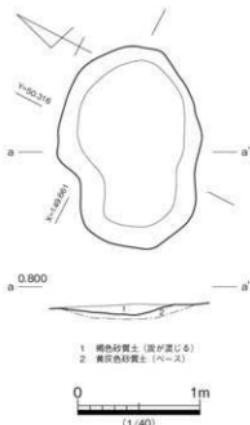
SK13(第59図)

調査区西南部で検出した。楕円形で長軸1.65m、短軸1.2m、深さ9cmで断面形状は浅い皿状である。埋土は褐色砂質土(炭混じり)で、炭を含む点でSK10下部と共に通する。SK10とは南北に連なる位置関係であり、関連する遺構の可能性もある。埋土中から17世紀中頃の備前焼擂鉢が出土した。

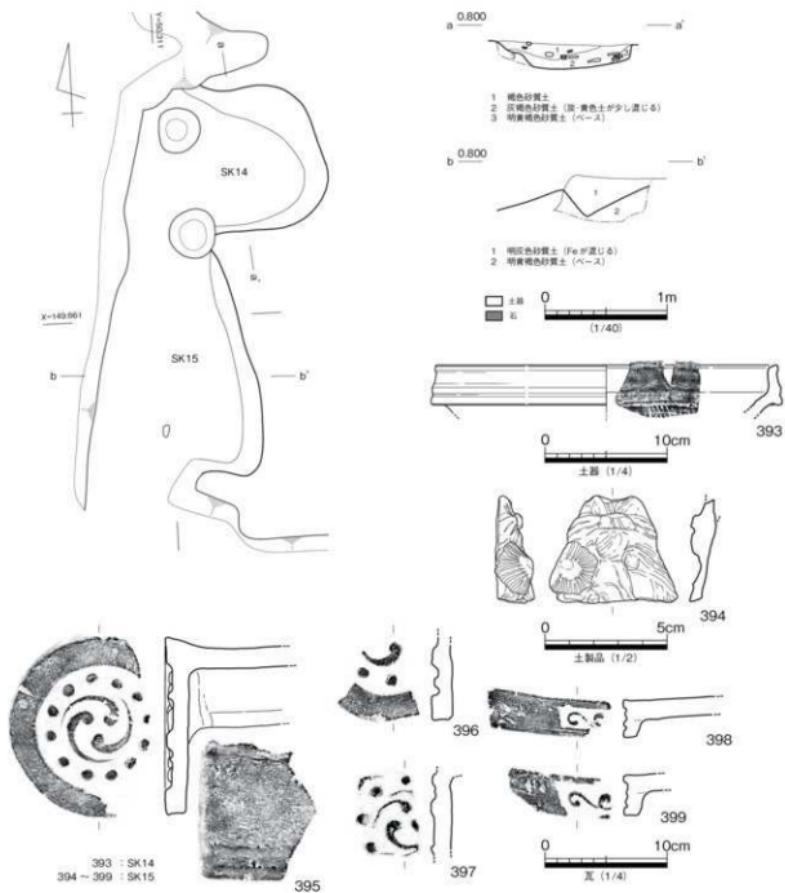
遺構の時期はSK10との関連から18世紀前半と考えられる。

SK14・15(第60図)

SK12の東辺の南部に沿って検出した。いずれもSK10により遺構の西側が消失する。遺構の前後関係によりともにSK12より古い。SK14・15の前後関係は不明であるが、両者は埋土の違いか



第59図 SK13 平・断面図



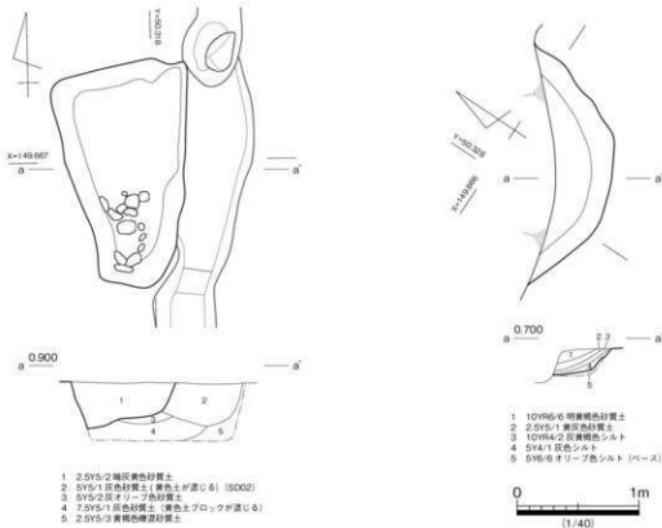
第60図 SK14・SK15 平・断面図、出土遺物

ら別遺構と考える。

SK14は不整形で、長軸1.65m、短軸1.15m以上、深さは32cm、断面形状は逆台形である。埋土中には炭が少し混じる。土坑内からは擂鉢片、土師質土器足釜片、須恵器片が出土したが、いずれも小片であった。

SK15は梢円形の土坑状の遺構で、長軸1.85m以上、短軸1.3m以上、深さ20cmで、断面形状は逆台形に近い。埋土中からは珪化木が出土した。

393はSK14出土遺物である。備前焼擂鉢。乗岡編年近世I a期。16世紀後半。394～399はSK15



第61図 SK16 平・断面図、出土遺物

出土遺物である。394は西行人形。型作りで背面および首から上は欠損する。右手に笠を持ち胸の辺りに結び目がある。縄縦を描ける。395～397は軒丸瓦。395はSK11の314の瓦当文様と酷似する。398・399は軒平瓦。ともに小片で、2転する唐草文が残る。小片のため詳細は不明であるが、瓦当文様は同文の可能性もある。

SK14の時期は、埋土の類似性からSK13と同じ18世紀前半頃、SK15はSK12との遺構の前後関係から18世紀前半～中葉以前と考えられる。

SK16(第61図)

SD02-1の北寄りで西側に接して検出した。遺構の前後関係によりSD02-1より新しい。長楕円形で、長軸1.85m、短軸0.93m、深さ36cm、埋土は暗灰黄色砂質土で、断面は逆台形である。遺物は須恵器片、土師質土器片がわずかに出土したのみである。

400・401は土師質土器。400は杯。17世紀初頭～前半(様相1～2)。401は皿。A V形式、18世紀前半(様相5)。400はSD02からの混入の可能性が高く、遺構の時期は18世紀前半頃と考えられる。

SK17(第62図)

調査区中央付近北寄りで検出した。西側の大部分は擾乱により消失する。長軸2m以上、短軸0.3m以上、深さ20cm程度である。土坑内からはわずかに土師質土器小片が出土したのみである。

遺構の時期は不明である。

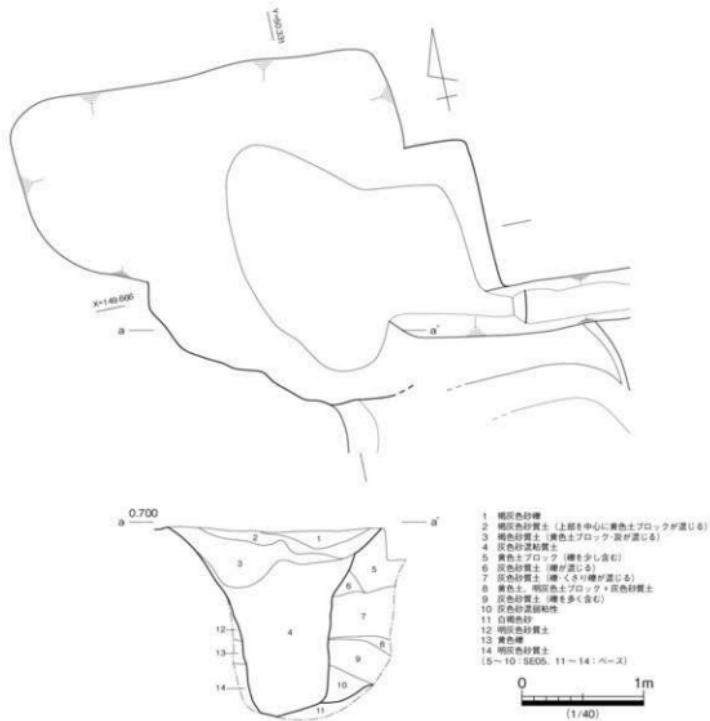
第62図 SK17 平・断面図

出土遺物である。394は西行人形。型作りで背面および首から上は欠損する。右手に笠を持ち胸の辺りに結び目がある。縄縦を描ける。395～397は軒丸瓦。395はSK11の314の瓦当文様と酷似する。398・399は軒平瓦。ともに小片で、2転する唐草文が残る。小片のため詳細は不明であるが、瓦当文様は同文の可能性もある。

SK14の時期は、埋土の類似性からSK13と同じ

18世紀前半頃、SK15はSK12との遺構の前後関係から18世紀前半～中葉以前と考えられる。

- 69 -



第 63 図 SK18 平・断面図、出土遺物

SK18(第63図)

調査区東部北端で検出した土坑である。遺構の前後関係によりSE05より新しい。搅乱により北半は消失する。楕円形で長軸275m程度、短軸2.5m程度、深さ158cmで、底のレベルが-0.9mである。土層の堆積から、SK18はSE05を切り込んで掘削した様子が窺える。井戸枠は残されないものの井戸の断面形状に似る。隣接するSE04、SE05より40~50cm程度浅いが、井戸として掘削したが、井戸とはせず埋め戻したもの、または井戸枠を抜き取ったものであろう。

402は肥前系磁器碗である。体部外面に柳文を描く。403

は陶器蓋、底部には糸切痕を残す。404は紡錘車。平瓦からの転用。中央部に穿孔する。405は軒平瓦。同范瓦はSD09、SK10、SK23などから多数出土しており、城下でも類例が多い。重複するSE05からも出土しており、SE05からの混入の可能性もある。406はキセル吸口。真鍮製。407は方形の木製品に先端を細くする。栓。

遺構の時期はSE05との前後関係や出土遺物から、19世紀以降と考えられる。

SK19(第64図)

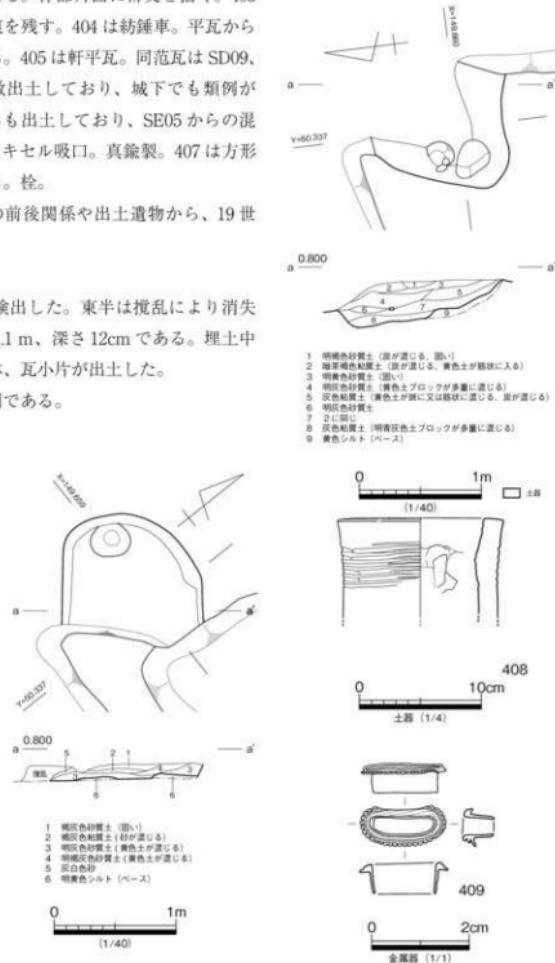
調査区東部南端付近で検出した。東半は搅乱により消失する。長軸1m以上、幅1.1m、深さ12cmである。埋土中からは土師質土器片、擂鉢、瓦小片が出土した。

詳細な遺構の時期は不明である。

SK20(第65図)

調査区東部南端付近、SK19の北側で検出した。東半部は搅乱により大きく消失する。南北-北東軸が1m以上、南北-北西軸が1.3m程度、深さ32cm、断面形状は皿型である。埋土には炭、筋状の黄色土が混じる層が目立つ。埋土中からは瓦、呉器手碗の小片等が出土した。

408は陶器。粗い砂粒を含む胎土で上部に5条程度のヘラ描き沈線を巡らせる。器種不明。



第64図 SK19 平・断面図

第65図 SK20 平・断面図、出土遺物

409は刀装具。栗形（刀の鞘口近くに付けて下げる緒を通す部分）にはめ込む金具。金を主成分とする。

遺構の時期は、呂器手の時期である17世紀後半～18世紀前半頃と考えられる。

SK21(第66図)

調査区東部で検出した。方形で長辺2.35m、短辺1.83m、深さ36cm、断面形状は逆台形である。埋土最下部には植物遺体を含む層や炭・焼土を含む層が堆積する。埋土中からは土師質土器、陶器擂鉢片などが出土している。

410～414は土師質土器。410・411は皿。410は底部に静止糸切り痕を残す。A II形式。411はA VI形式で様相4に該当する。412・413は擂鉢。414は鉢。

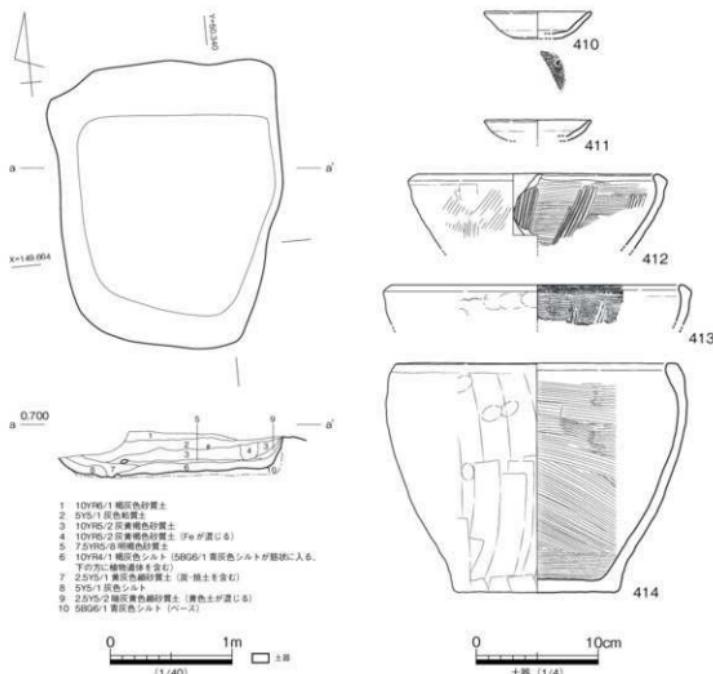
遺構の時期は出土遺物により17世紀後半と考えられる。

SK22(第67図)

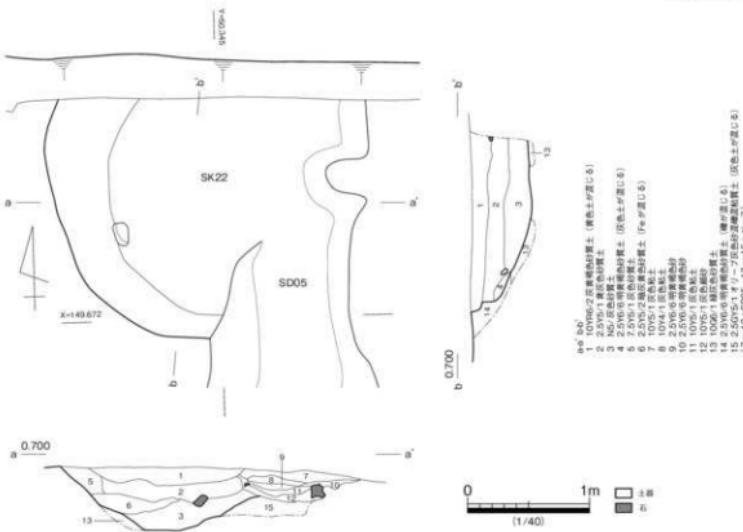
調査区東部で検出した。北側は調査区外へ延びる。遺構の前後関係により、SD05より古い。直径2.6m程度の円形と考えられ、深さ52cmである。埋土中からは磁器片、土師質土器片、備前焼窯片、瓦片などが出土した。

遺構の前後関係から、遺構の時期は、SD05より古い17世紀中葉以前と考えられる。

SK23(第68～79図)



第66図 SK21 平・断面図、出土遺物



第67図 SK22 平・断面図

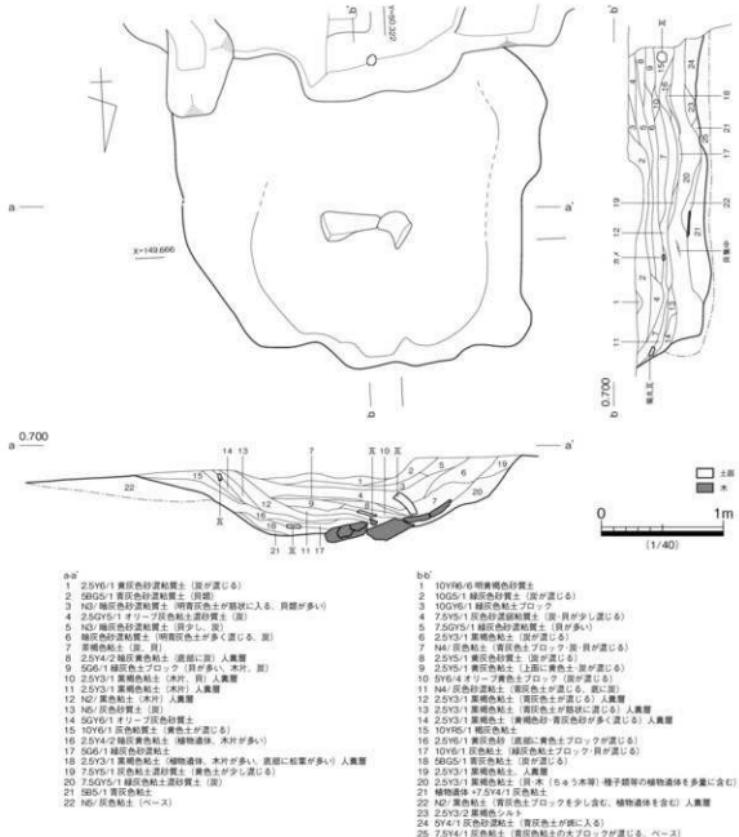
調査区中央北部付近で検出した。遺構の前後関係によりSE02より古い。東西28m、南北22m以上の隅丸方形を呈し、深さは67cm程度、断面形状は東西は播鉢状、南北は逆台形を呈する。

埋土下半部はおおむね黒褐色粘土で覆われており、土坑底部からは松葉を主とした多量の植物遺体が堆積していた。黒褐色粘土にはチュウ木などの木片の他、ウリ科の種子類が多量に含まれ、貝類などの食物残滓も出土した。土坑上半部は炭や貝などの食物残滓を含む層が堆積する。

土坑埋土の堆積状況やウリ科の種子が多く出土したこと、チュウ木と考えられる木製品が出土したことからSK23はトイレ状遺構と考えられる。土坑底部の松葉などの植物は敷きならされたもので、下半部の黒褐色粘土層は人糞によるものと考えられる。上半部には貝類や炭を多く含む層が堆積し、トイレとして使用されなくなった後廃棄土坑となつたと考えられる。埋土中に炭が含まれるのは火災後の廃棄等によるものとも考えられるが、炭が多量に含まれるのに対し焼土が含まれないことから、炭は消臭効果を狙って故意に投棄されたとは考えられないだろうか。

土坑内から土器・陶磁器類、瓦類、木製品の他、貝・獸骨などの食物残滓が出土した。食物残滓は鹿、鳥などの獸骨、マダイ、タイ、エイ、スズキ、サメ、スッポンなどの魚骨など、アカニシ、サザエ、ハマグリ、シジミ、ハイガイ、サルボウなどの貝類など多様な生物が確認できた。(第4章第2節参照)

415は製塙土器脚部小片。弥生時代後期。416は須恵器蓋。8世紀代。いずれも混入と考えられる。417～445は磁器。417・421・432は景德鎮窯、その他は肥前系である。417～420は小杯。417～419は外面に梅花文を描く。420は外面に鏡を入れる。高台無軸で初期伊万里。421～431までは碗。424は青磁。425は筒型碗。426は高台裏に「大明」銘がある。427は見込みに草花文、高台裏に「製」銘がある。428は見込みに花唐草文、高台裏に「大朋成化年製」銘がある。429は輦轆引きのち型打ち成



第68図 SK23 平・断面図

型するもので、体部はゆるい輪花状になる。430は焼成不良。431は内外面に錫釉を施す。432～443は皿。432は口縁端部を一定間隔ごとに窓ませて輪花状にする。高台裏には銘があるが、大半が欠けており内容は不明である。433～437、440～442は高台径の小さい初期伊万里である。438は内面に精緻な文様を描き、高台裏に「大明成化年製」銘がある。高台部は著しくひび割れている。図の2片は直接接合しないが形状や筆致の特徴が同じであることから同一個体である。441・442は輦轔成型のち型打ち成型をするもので、体部を輪花状にする。443は青磁。内面に芭蕉文を片彫りする。444は花生。445は青磁香炉脚部。獸脚である。

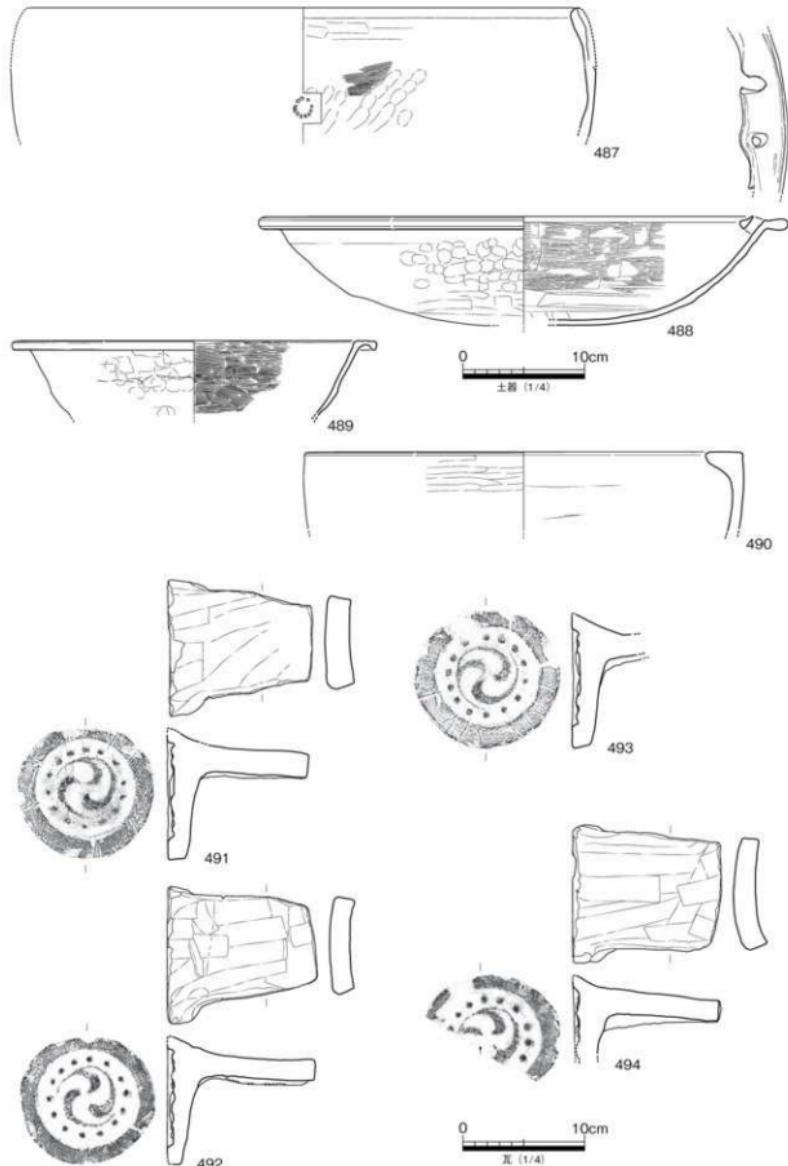
446～465は陶器。446～450は碗。446・449は瀬戸美濃で他は肥前系である。449は天目碗。450は薄手でクリーム色を呈する。肥前内野山窯。451～455は皿。451は瀬戸美濃で他は肥前系である。



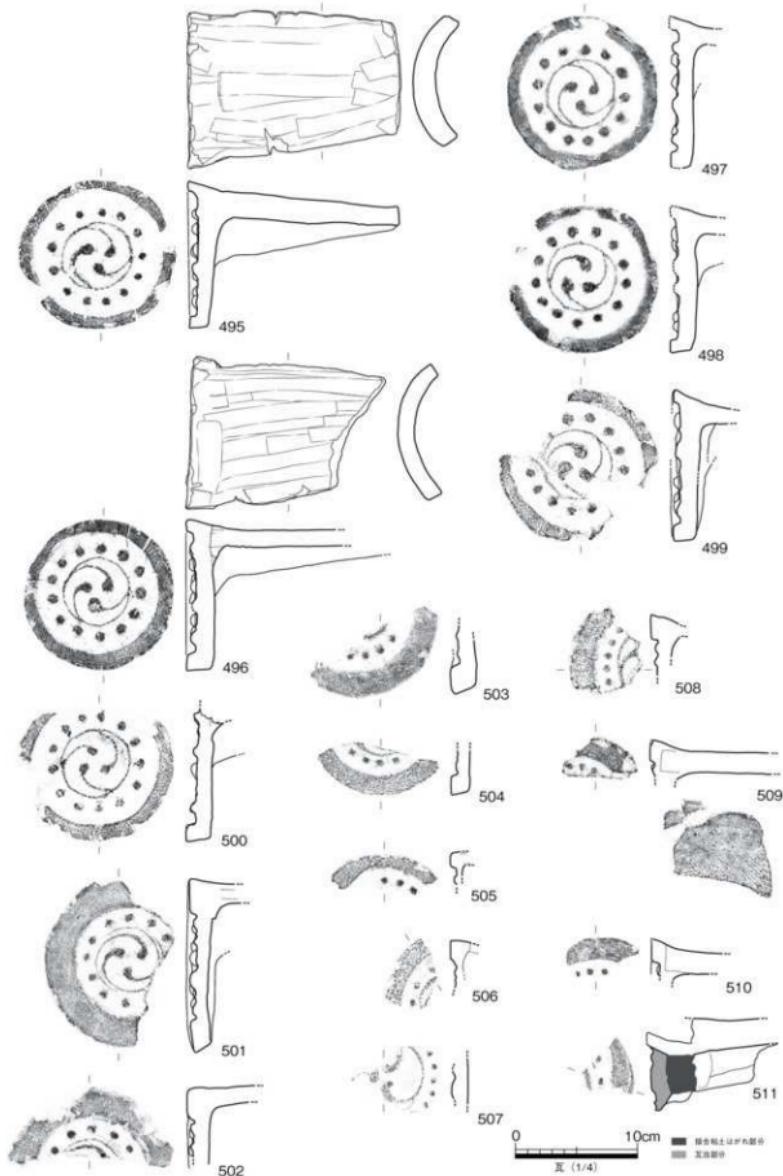
第69図 SK23出土遺物(1)



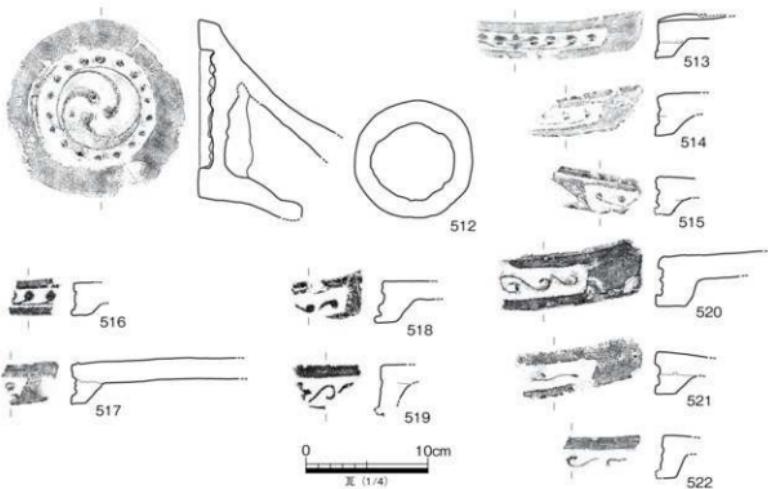
第70図 SK23出土遺物(2)



第71図 SK23出土遺物(3)



第72図 SK23出土遺物(4)

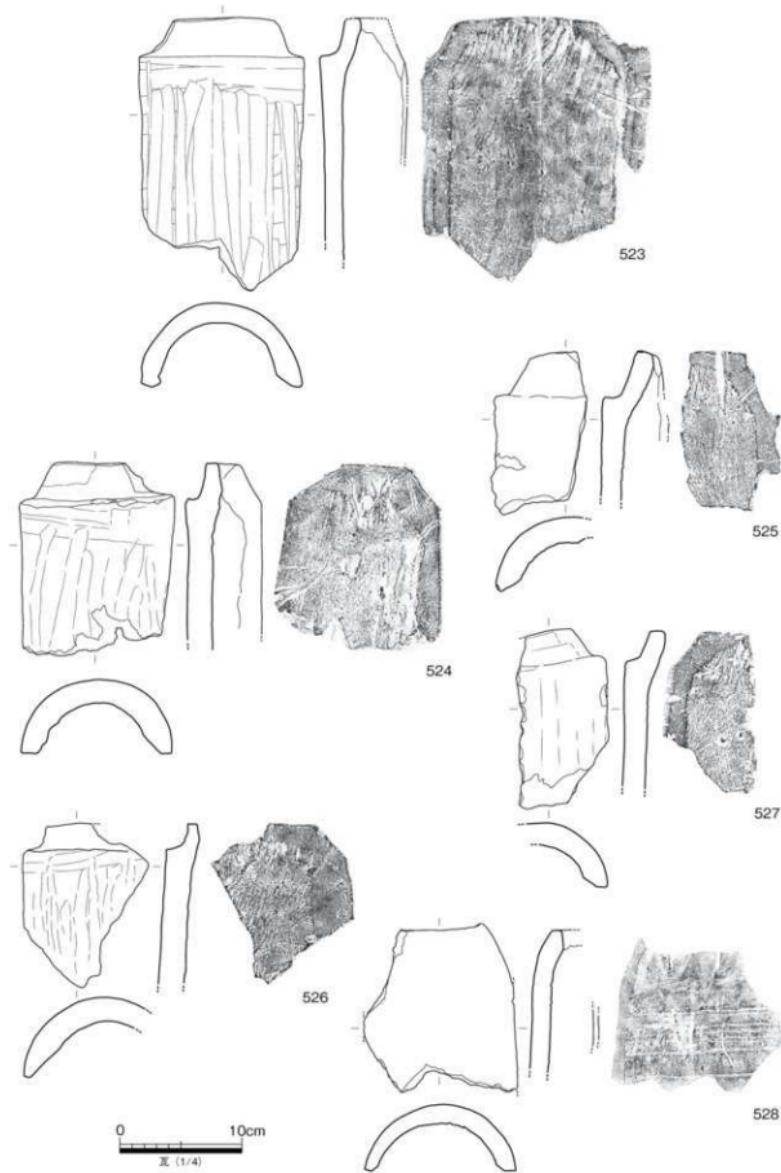


第73図 SK23出土遺物(5)

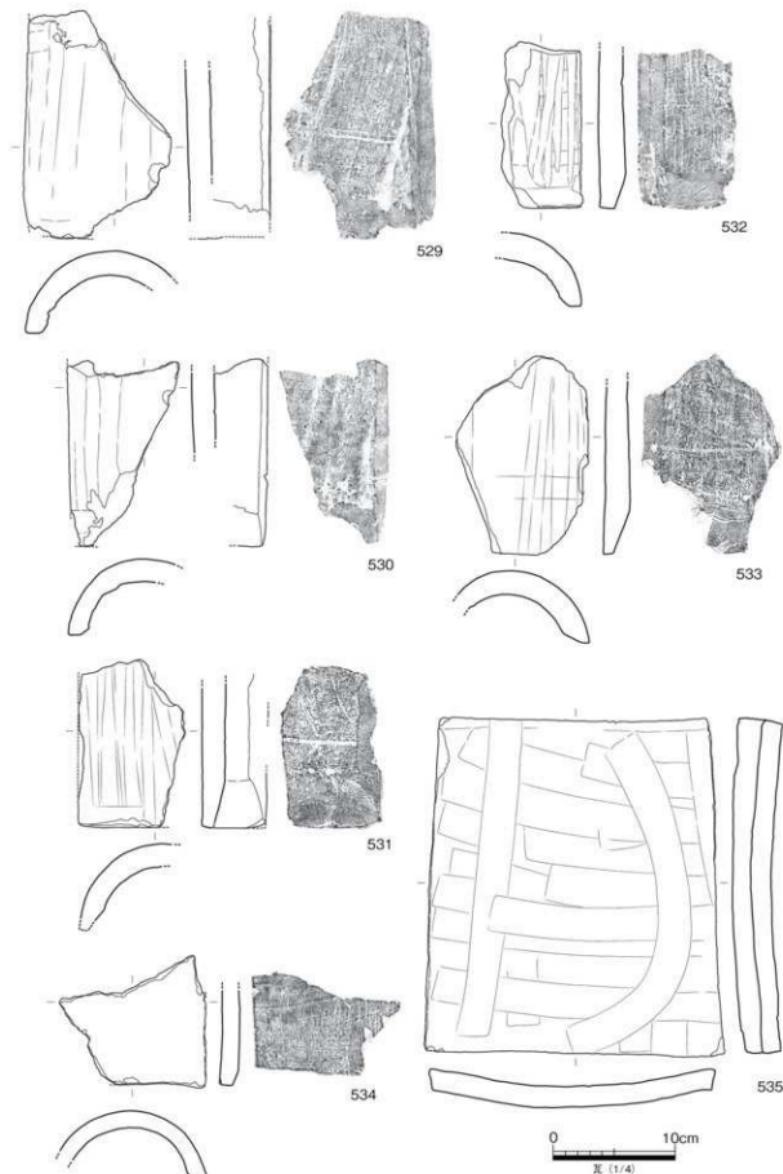
452・453・455は見込みに砂目積み痕が残る。456・457は鉢。ともに肥前系である。刷毛目による文様を施し、456は砂目積み痕が残る。458は軟質陶器片。産地不明。459は備前焼急須。460～463は擂鉢。460は肥前系、461～463は備前焼で乘岡編年近世2b期である。464は信楽焼灰落とし、465は肥前系火入れである。

466～487は土師質土器。466～481は皿。467・468はA IV形式、469・470・472～476はA V形式、471はA VI形式、477～479・481はA X形式である。471・473・474・479・480は煤が付着し、灯明皿として使用したことがわかる。482・483は焼塙壺、484・485は焼塙壺蓋である。いずれも手捏ね成形によるもので在地産である。486は焰烙。型作りで19世紀後半以降（様相9）。攪乱などからの混入と考える。487は火鉢。体部に花文の刻印がある。488～490は瓦質土器。488・489は焰烙。488は内耳が残る。490は火鉢。

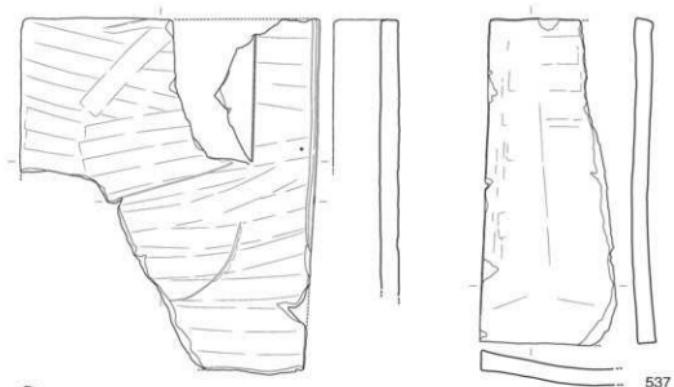
491～500は棟込瓦である。491～494は高松城跡（西の丸町地区）II軒丸瓦39と同文の可能性がある。軒丸瓦39についても瓦の取り付け位置から考えれば棟込瓦であろう。491～494は同范である。瓦当径がおおむね11cm程度、10cm程度の差込部が付く。495～500は同范である。瓦当径が12.3cm程度、圓線が尾と連結する。14cm程度の差込部まで残存するのが495、差込部の一部が残るのが496のみであるが、497～500についても同范瓦であることから、棟込瓦と考えられる。501～511は軒丸瓦。503～511は小片である。509は取り付く丸瓦に糸切痕を残す。507は高松城跡（西の丸町地区）II軒丸瓦2に類似する。512は鳥衾。巴文の尾が連結し、珠文数が多く、巴文径が大きいことから古い様相を呈する。513～522は軒平瓦。513は三つ葉の中心飾りに3転する唐草文を配する。514～517は小片であるが、513と同范または同文と考えられる。513の同文瓦はSD09、SK10など出土例が多く、城下の調査でも類例が多い。519は歴博地点資料165(17世紀前半、様相2)と同文と考えられる。



第74図 SK23出土遺物(6)



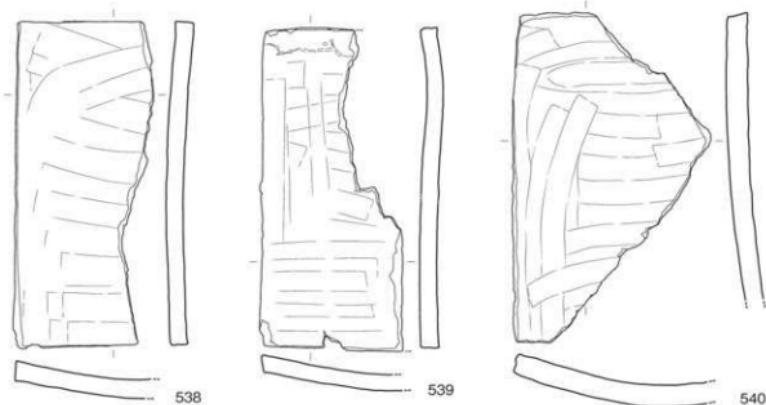
第75図 SK23出土遺物(7)



536

537

0 10cm
瓦 (1/4)



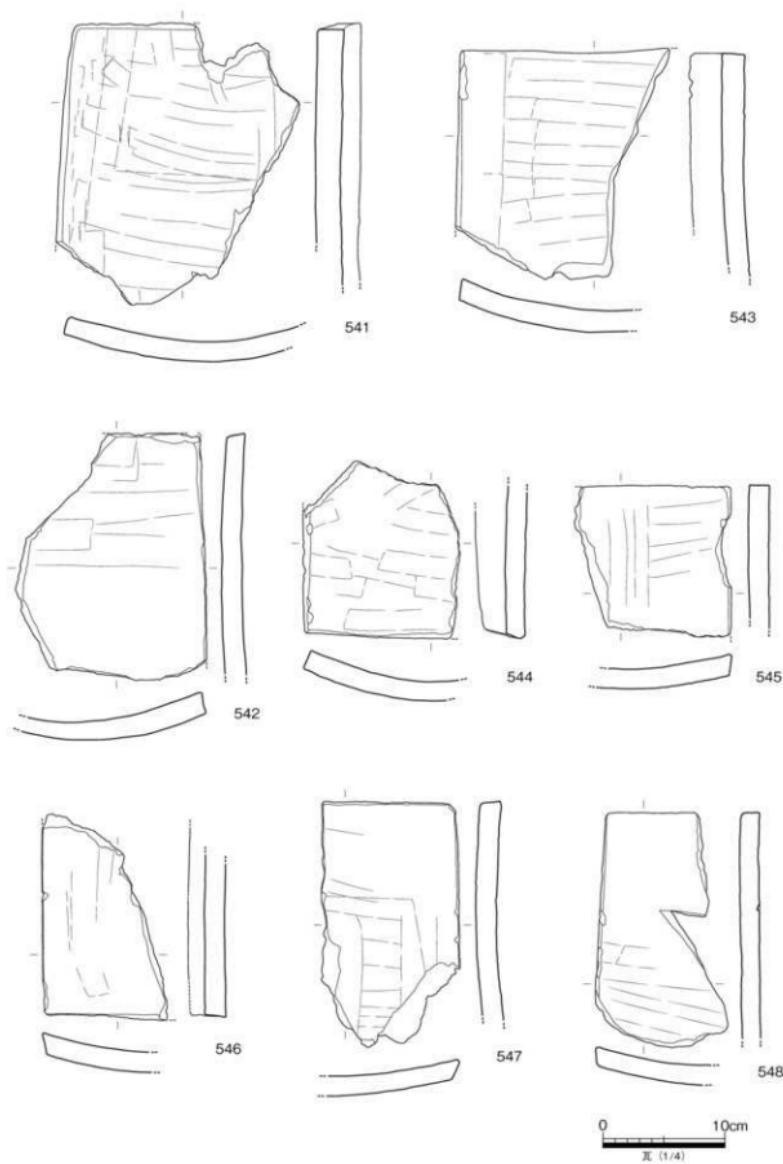
538

539

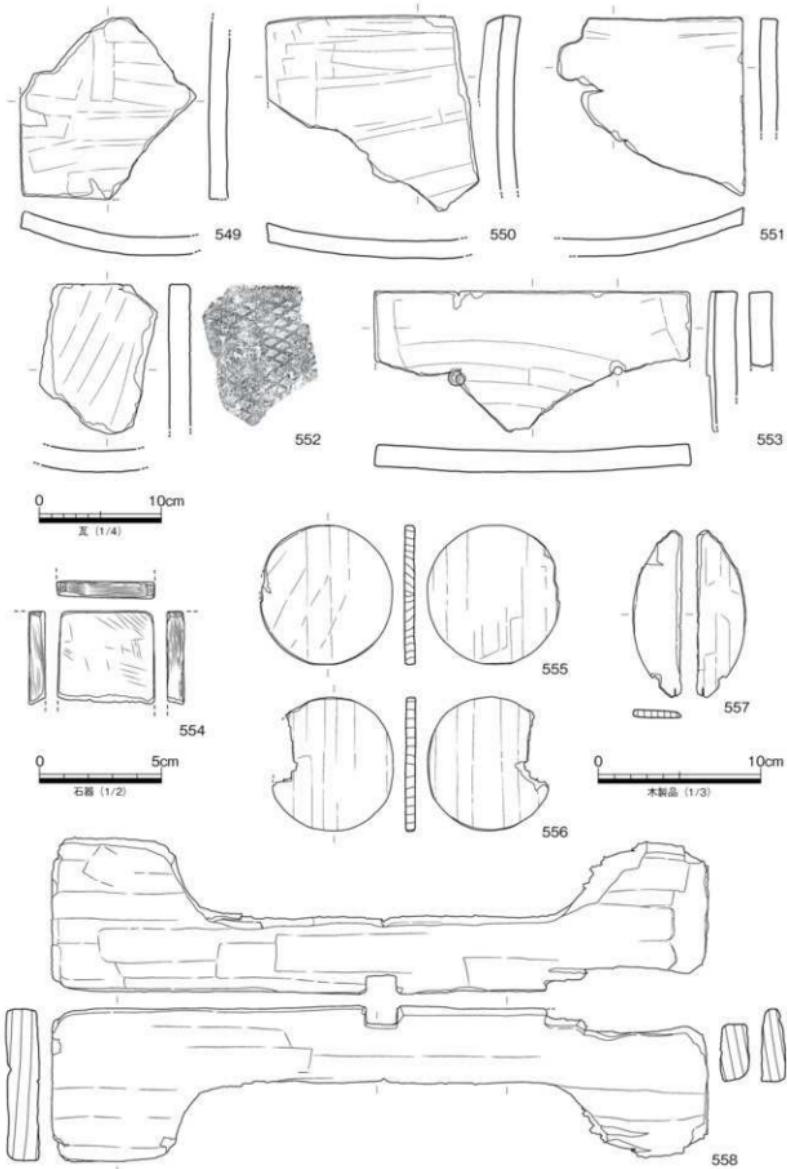
540

第 76 図 SK23 出土遺物 (8)

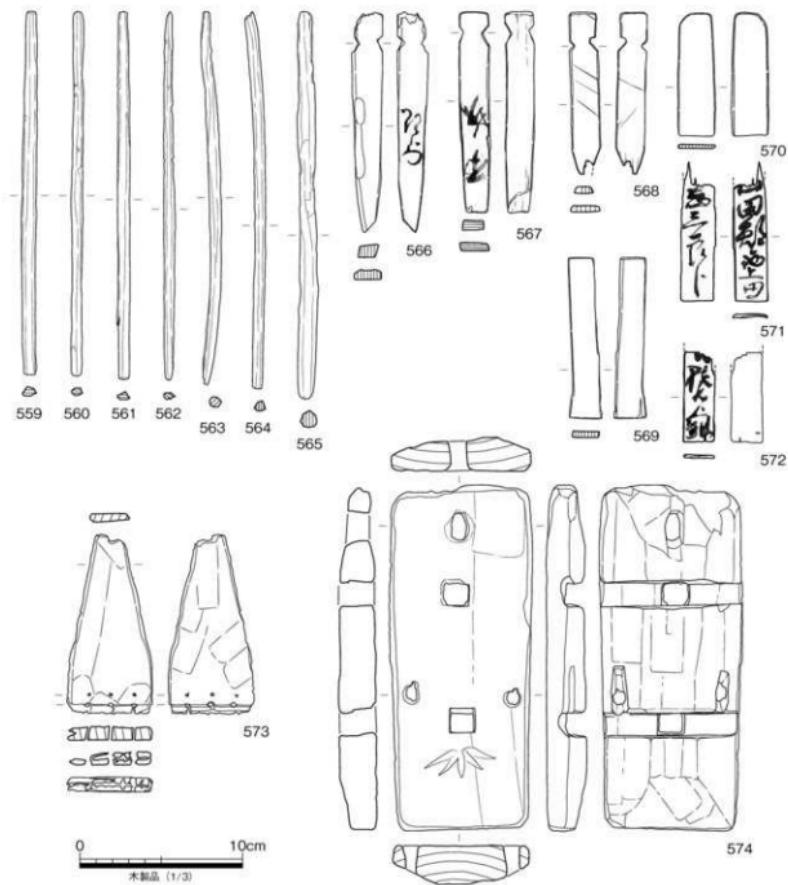
523～534 は丸瓦。いずれも小片である。523～527 は玉縁が確認できるもの。528 は玉縁のないもので、棟飾りに使用されたと考えられる。凹面に糸切痕、刺し子痕が確認できるものはない。535～552 は平瓦。長さは 535・537～540 は 27cm 前後、536 は約 29cm である。凹面はおむね横方向のなで、凸面は調整痕をほぼ残さない。553 は海鼠瓦。242・243 の海鼠瓦とは同じ規格だが、ヘラ描きによる沈線はない。2ヶ所に孔が残り、内 1ヶ所には釘が残る。



第77図 SK23出土遺物(9)



第78図 SK23出土遺物(10)



第79図 SK23出土遺物(11)

554は砥石。全面に使用による摩滅痕が残る。

555～574は木製品。555～557は容器の底板または蓋。555・556は直径8.2cm程度、557は13cm程度である。558は折敷の脚部。1辺40cm程度の折敷で、上部に切れ込みがある。559～565はチュウ木。形状からは箸の可能性もあるが、出土状況からチュウ木と考えられる。折損するものが目立つ。全長がわかるものは全部で10点程度出土し、7点を図化した。材質は565のみスギ、他はモミ属であった。長さは22.3cm～23.8cmで4～6面に面取りする。566～572は木筒または木筒状木製品。566～568は上部両端を削り込み、くびれを持たせる。566は先端を尖らす。いずれも荷札木筒として使用したと考えられる。566は片面に「野左衛門」と読める。567は「□森」か。569・570は幅2cm、厚さ2mm

前後の板状に成形するもので、570は上部をかまぼこ型に成形する。ともに木簡の可能性があると考え図化したが、赤外線を照射した結果文字を確認できなかった。571・572は上部が欠損する。571は片面に「山田郡西上田」、片面に「甚三郎」、572は「銘右衛門」と読める。573は刷毛。毛の部分は欠落するが、毛を挟む溝と毛を固定する孔を残す。574は下駄。歯は嵌め込み式で歯の駒が表に出る露卯下駄である。歯は残されていない。長さ約21cm程度、方形でかかと部分には五葉文が刻印される。

陶磁器、土器類はおおむね17世紀中葉～後半（様相3～4）で、供膳形態は肥前系磁器が圧倒的に多い。初期伊万里の小杯や皿が多く見られる。肥前系の擂鉢が出土したのは当遺跡ではこの1点だけである。土師質土器皿はA IV・A V・A VI・A X形式が出土したが、A V・A VI・A X形式については陶磁器と同じく17世紀中葉～後半（様相3～4）で、A IV形式の皿は17世紀前半（様相2）とやや古い。A V・A X形式の皿については煤が付着したものが数点あり、灯明皿として使用したと考えられる。熔炉などに新しい様相が認められるが、17世紀中葉（様相3）を中心とする時期と考えられる。

瓦はおおむね17世紀前半（様相1～2）と考えられる。棟込瓦や鳥糞が出土するなど他の遺構にはあまり認められない特徴がある。SK23はSD02の東に隣接している。出土した瓦は屋敷地割の改変に伴い投棄されたものであろうか。区画施設が設けられたのが瓦の時期である17世紀前半、屋敷地の時期はそれ以降17世紀中葉を中心とする時期で、17世紀後半には埋没したと考えられよう。屋敷地割の改変もその頃にあったのではないか。絵図資料からも17世紀後半に屋敷地割の改変があったことが窺えるが、それと符合するとも考えられる。

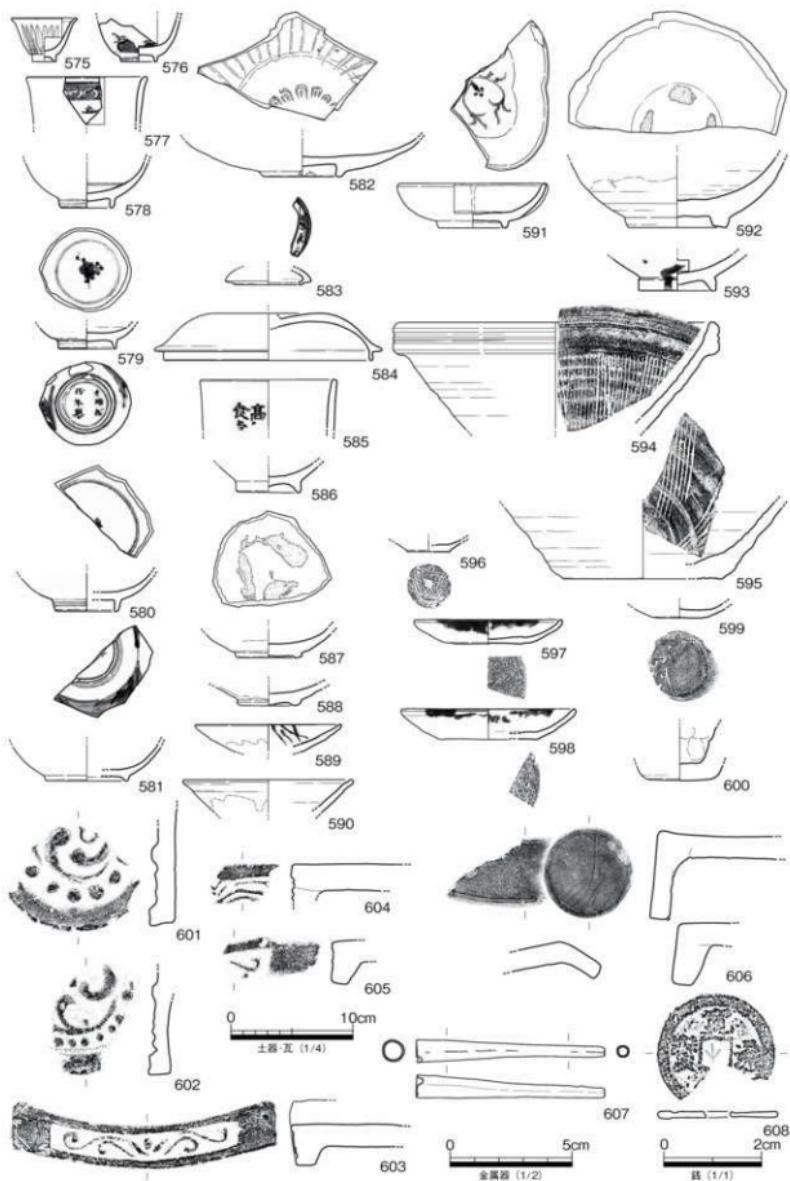
SK23・SE02上面出土遺物（第80図）

SK23・SE02上面は攪乱に覆われていた。攪乱を除去後、当初、SK23・SE02の判別がつかず一括して徐々に掘り下げ、2つの遺構に分かれることが判明した。第80図の遺物は両者の判別がつく前に出土した遺物で、一部上部の攪乱の遺物も含まれる。

575～585は磁器。575～584は肥前系。575・576は小杯。575は高台無釉で体部に鏽を巡らせる。初期伊万里。577～581は碗。577は筒型碗。578は高台裏に砂が付着する。579は見込みに梅花文、高台裏に「大明成化年製」銘を描く。582は青磁皿。輪轂成型と型打ち成型を併用したもの。高台裏には砂が付着する。583は合子蓋。584は蓋。歪みが著しい。585は筒型碗で体部に「高松食堂」と書かれている。586～595は陶器。586～588は碗。586は呉器手。高台部大半を打ち欠いている。587は見込みに砂目積を残す。589～591は皿。589は体部に鉄絵を施す。歪みがある。591は型打ち成型による方形皿で、高台は貼付高台である。高台部には砂が付着する。592・593は鉢。592は見込みに砂目積み痕を残す。593は内面無釉、外面の一部に釉が確認できるのみである。594・595は備前焼擂鉢。いずれも乘岡編年近世2b期。596～600は土師質土器。596は杯。底部に静止糸切痕を持つ。597～599は皿。いずれも底部には静止糸切痕がある。A II形式。597・598は灯明皿として使用する。600は焼塩壺の底部。手捏ねによる成形するもので、在地産である。

601・602は軒丸瓦。602は高松城跡（西ノ丸町地区）II軒丸瓦2（17世紀初頭、様相1）に類似する。603～605は軒平瓦。603は三葉の中心飾りに2転する唐草を持つ。604は高松城跡（西ノ丸町地区）軒平瓦13（18世紀前半、様相5）に類似する。606は軒棟瓦。無紋で近代以降。607はキセル吸口。真鍮製。608は寛永通宝。

磁器は、明治以降に下る585を除けば17世紀中葉～18世紀前半（様相3～5）、陶器は586・591が18世紀前半（様相5）、他は17世紀前半（様相2）。備前焼擂鉢は17世紀中～後半、土師質土器は17



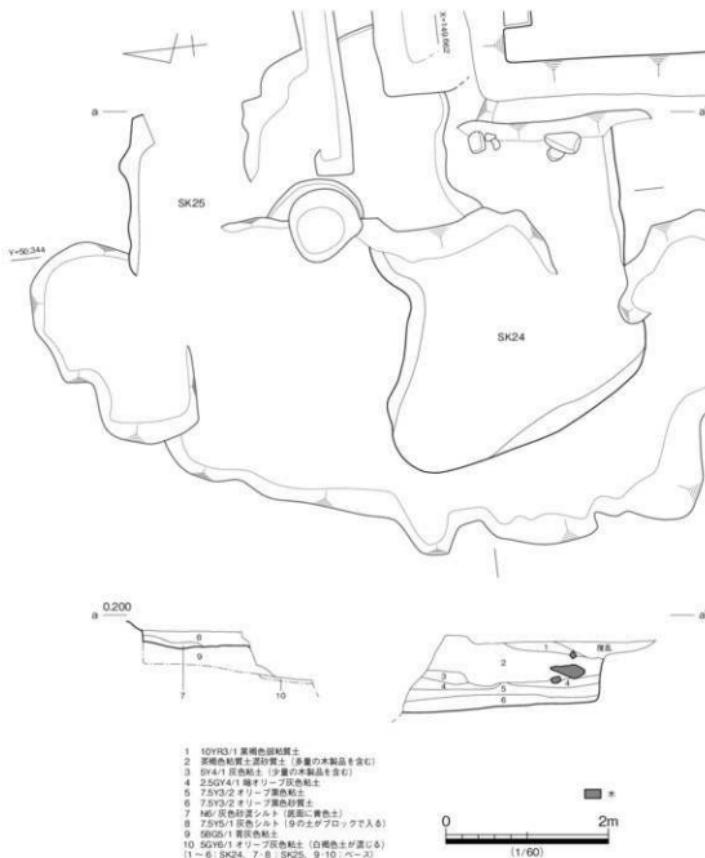
第80図 SK23 · SE02 上面出土遺物

世紀前半（様相2）である。

出土遺物は攪乱からの混入と考えられる近代以降に下るもの(585・606)を除けば17世紀前半～18世紀前半であり、SK23、SE02の時期とも整合する。

SK24(第81図～110図)

調査区東端部で検出した大型土坑である。大規模な搅乱を除去した後に検出した。SE06により北側が、SE07により東側が一部消失する。不定形で長軸約4.0m、短軸約2.8m、深さ92cm程度、断面形



第81図 SK24・SK25 平・断面図

状は方形を呈する。埋土は下部は黒色粘土及び砂質土、上部2/3には多量の陶磁器類や木製品が廃棄されていた。

609～610は弥生土器。609は短頸壺、610は高杯杯部小片である。611は製塙土器脚部。外面はヘラ削りが観察できる。弥生時代後期。

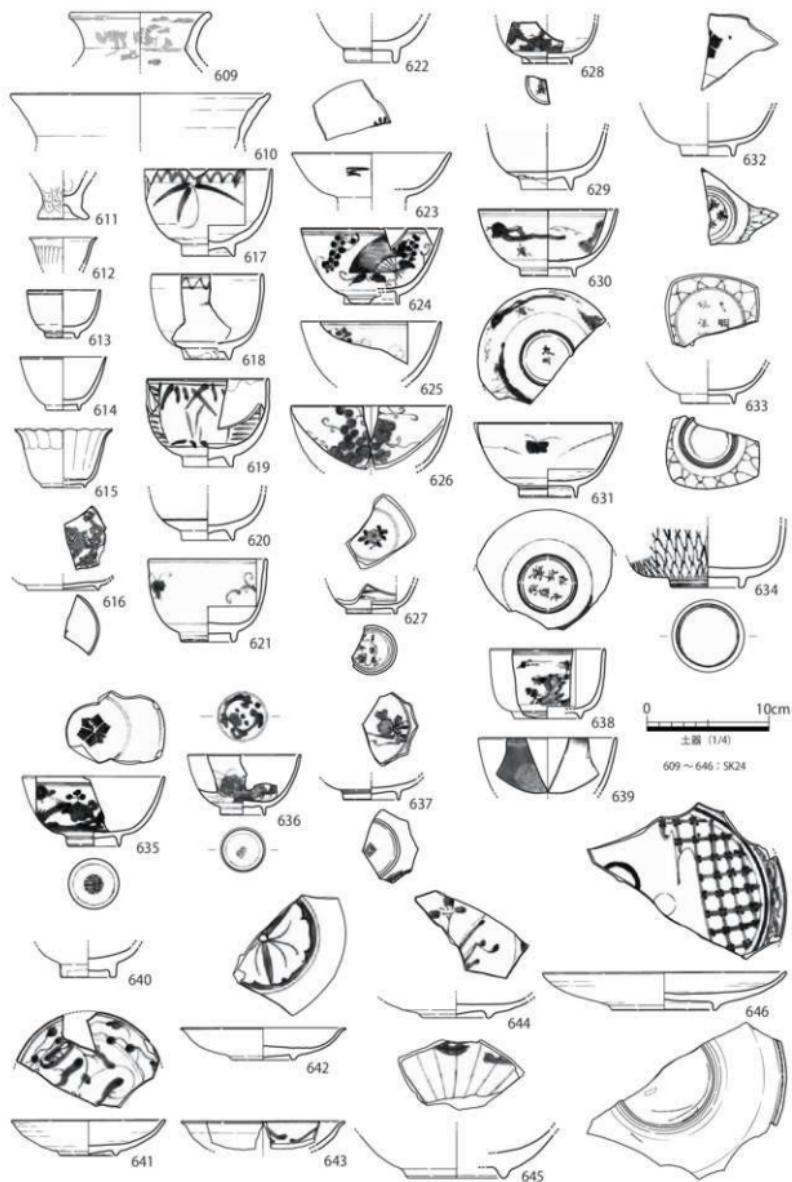
612～664は磁器。616以外はすべて肥前系。612～615は小杯。612は体部に鏽を巡らせる。613・614は無紋。613は高台部に砂が付着する。615は型打ち成型を併用し、口縁部を輪花状にする。いずれも17世紀中頃。616～640は碗。616は景德鎮。17世紀初頭。617～620・629は高台部無釉。617・618は別個体であるが、同じ図柄を描いていると考えられ、描いの食器と考えられる。初期伊万里。624～628、630～633、635～637は薄手の丸碗。外面に葡萄文、扇文、山水文、一重綱目文などの文様を描く。626は内面にも葡萄文を描く。627・628・630～632、635～637は高台裏に銘がある。627・631は「大明成化年製」、628は「製」、630は「大明」、632は「[]成□年製」、637は「福」が残る。633は見込みに「大明（成）化年（製）」がある。638は筒形碗。639・640は内面に透明釉、外側に鉄釉を掛ける。641～652は皿。641・642・644～646は高台径が小さい初期伊万里の特徴を備えたものである。649は型打ち成型を併用し、口縁部を輪花状にし、菊花文などを型押しする。650は青磁。口縁端部を輪花状に窪ませ芭蕉文を型押しする。651は14～15世紀代の中国製青磁皿。652は型打ち成型の方形皿。口銷を施す。653～655は鉢。655は14～15世紀代中国製青磁。656・657は蓋。658～661は香炉。658～660は輪高台と3ヶ所に脚が付く。659は底部中央付近に小さく穿孔する。658・659は青磁。661は内面が無釉なので香炉とした。662は髮油壺。外面は色絵を施す。663・664は花生。664は草花文を施す。

665～689は陶器。665～674は碗。665は瀬戸美濃。内外面に鉄釉を施す。666～680は肥前系。666～671は呉器手。666は釉は生掛けである。672は器壁を薄く仕上げるもので肥前内野山窯。673・674は内外面に鉄釉を掛ける。675～678は皿。677は大皿。高台部2ヶ所に切れ込みが残り、全体で5ヶ所程度に切れ込みを施すと考えられる。678は口縁部を部分的に内側へ垂める。内外面に水色の釉を掛け、外面には水色の釉の下に褐色釉を掛ける。679・680は鉢。680は体部外面～内面にかけて灰白色の釉を掛け、高台部1ヶ所に切れ込みを施す。681～685は備前焼擂鉢。681～683は乗岡編年近世2b期、684・685は乗岡編年近世3a期である。686は肥前系甕。内外面に鉄釉を掛ける。687は壺。外面に鉄釉を掛けた。内面は無釉。688は茶入れ。外面に鉄釉が垂れる。底部に回転糸切り痕がある。689は器種不明。肥前系。外面は片彫りを施し、緑釉を掛けた。

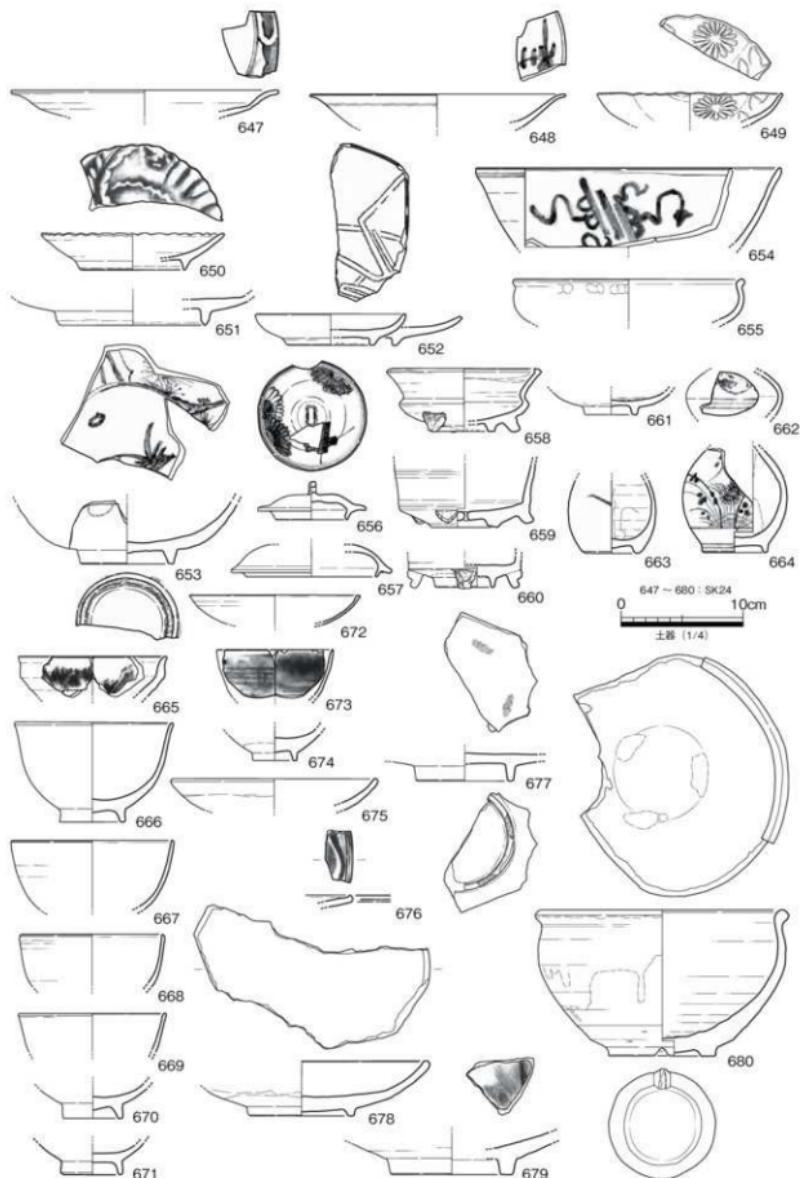
690～724は土師質土器。690～721は土師質土器皿。32点図化したうちA V形式が19点(691・699・703～717・719・720)、A III形式は5点(693・695～698)である。690、692は底部に静止糸切り痕を残すA II形式である。18点に煤が認められ、灯明皿として使用されたことがわかる。形式による使い分けは認められない。おむね17世紀中葉～17世紀後半(様相3～4)である。722は焼塙壺。手捏ねにより成形するもので、在地産である。723・724は有溝土錐。十字に溝を作る。

725～730は瓦質土器焰燈。725・727～730は内耳が残る。725は17世紀後半(様相4)、他は18世紀第3四半期(様相6)と考えられる。731～734は火鉢。732・733は口縁端部を平らにし、内側へやや拡張させる。734は3ヶ所に脚部を取り付け、脚部の内側には小孔がある。

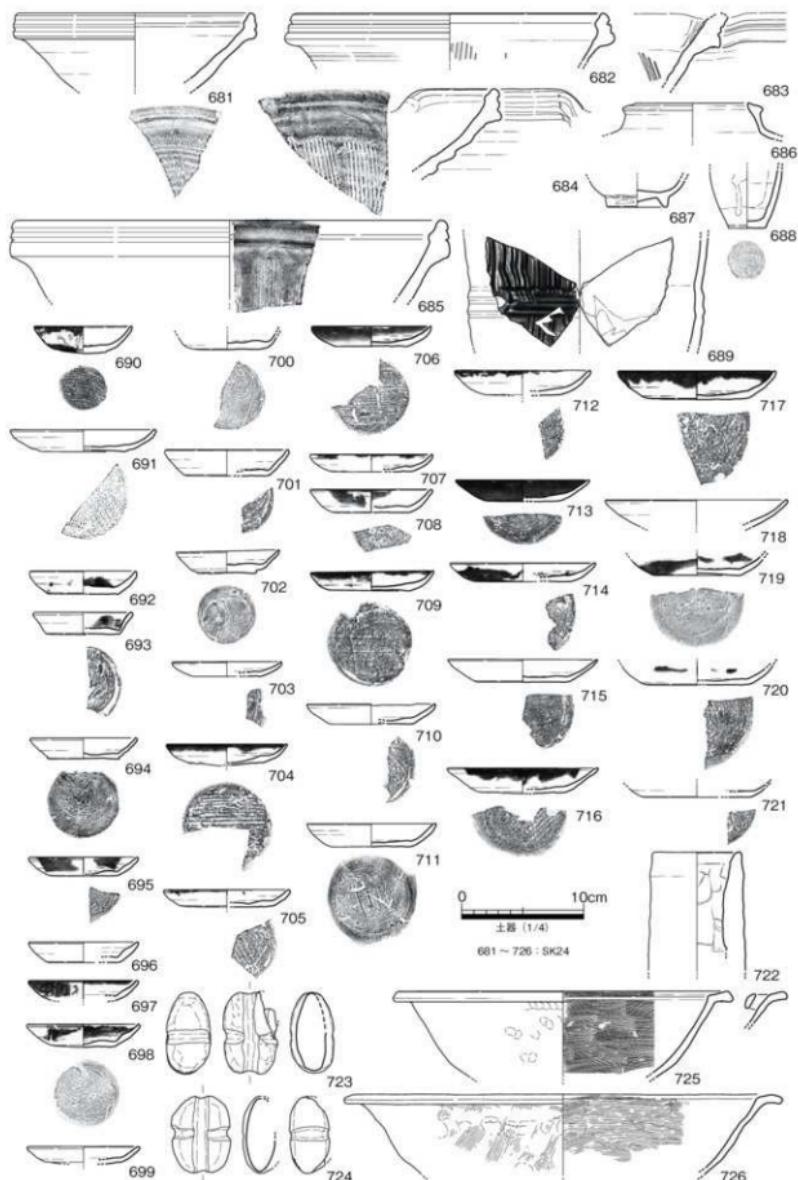
735～742は軒丸瓦。738～740は尾が繋がり圓線状になる。742は丸瓦と瓦当外縁が残るが瓦当文様部分は剥離のため残存しない。743～747は軒平瓦。743は歴博地点資料160(様相2～3)と同文



第 82 図 SK24 出土遺物 (1)



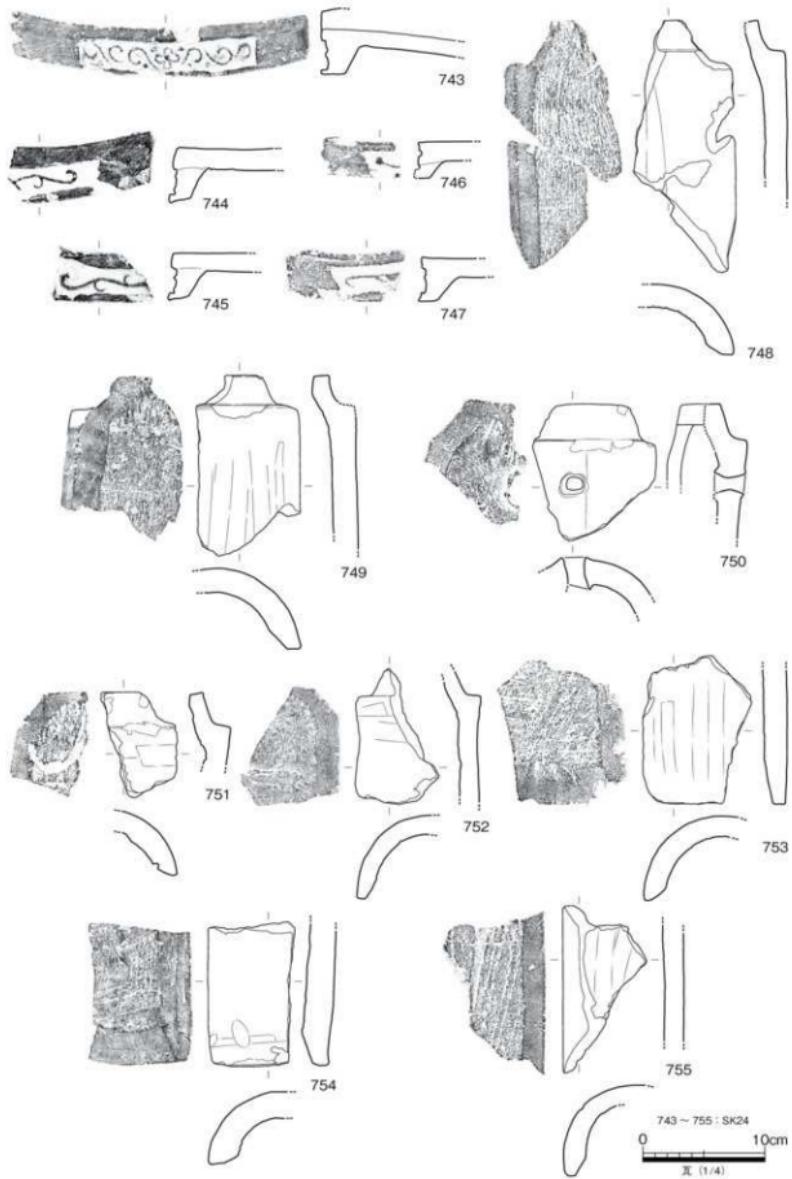
第83図 SK24 出土遺物(2)



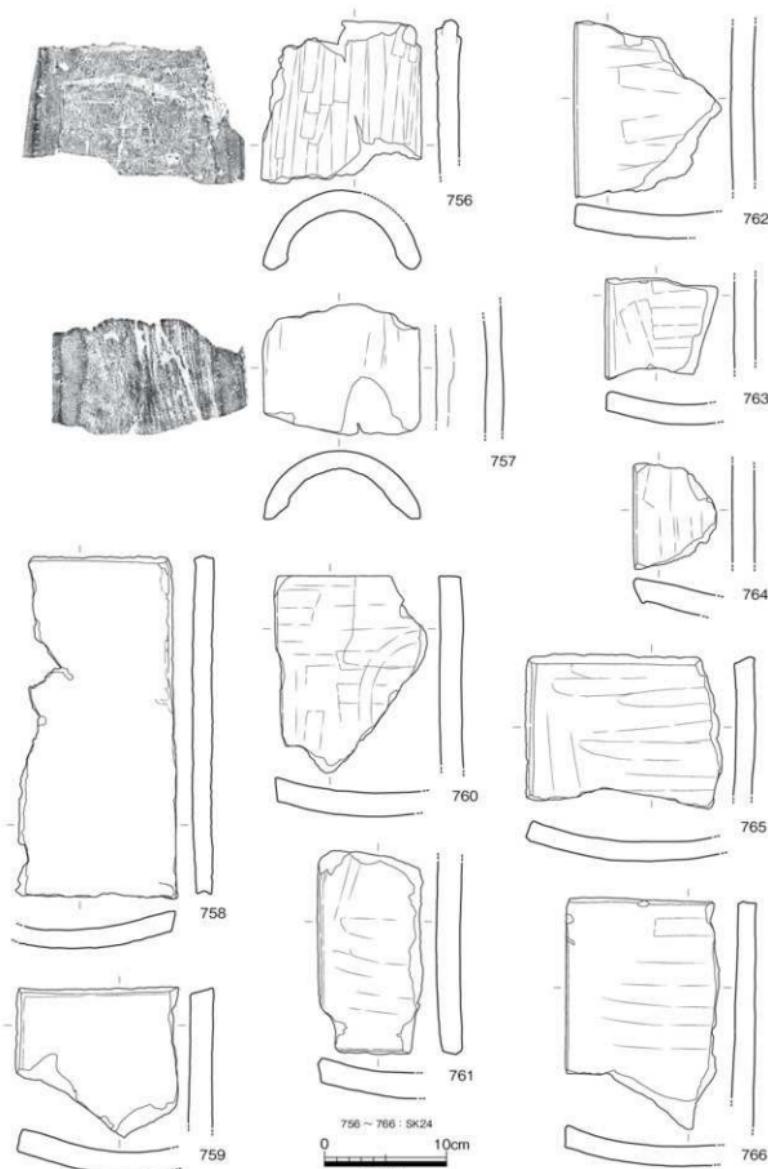
第84図 SK24出土遺物(3)



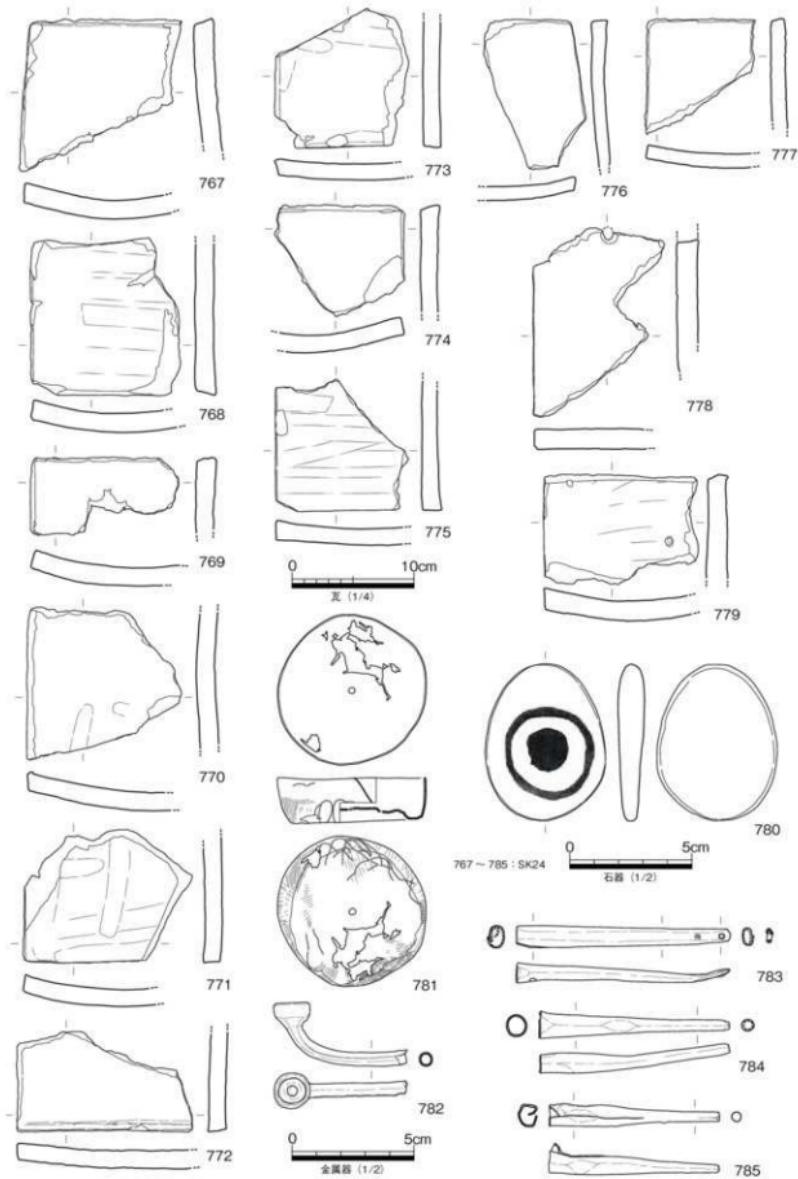
第85図 SK24出土遺物(4)



第 86 図 SK24 出土遺物 (5)



第87図 SK24出土遺物(6)



第 88 図 SK24 出土遺物 (7)

である。744はSD04出土37～42と同文である。746はSK23出土513～516などと同文と考えられ、城下でも類例が多い。748～757は丸瓦。758～777・779は平瓦。778は扁平な形状で釘孔を1ヶ所に残し、海鼠瓦と考えられる。

780は楕円形の扁平な礎の片面に墨で2重円を描く。用途不明。

781～792は金属製品。781は銅製の皿状金属製品。燭台の皿または秤皿か。782・784・785はキセル。782は火皿部分、784・785は吸口部分である。783は用途不明。材質はキセルとおおむね同じであるが、筒形の一方を偏平にしている。786は釘。787は鉤形金具。788～790は用途不明品。攪乱からの混入の可能性もある。791・792は銅錢。791は篆書体の熙寧元寶。北宋錢。792は至大通寶。元錢。

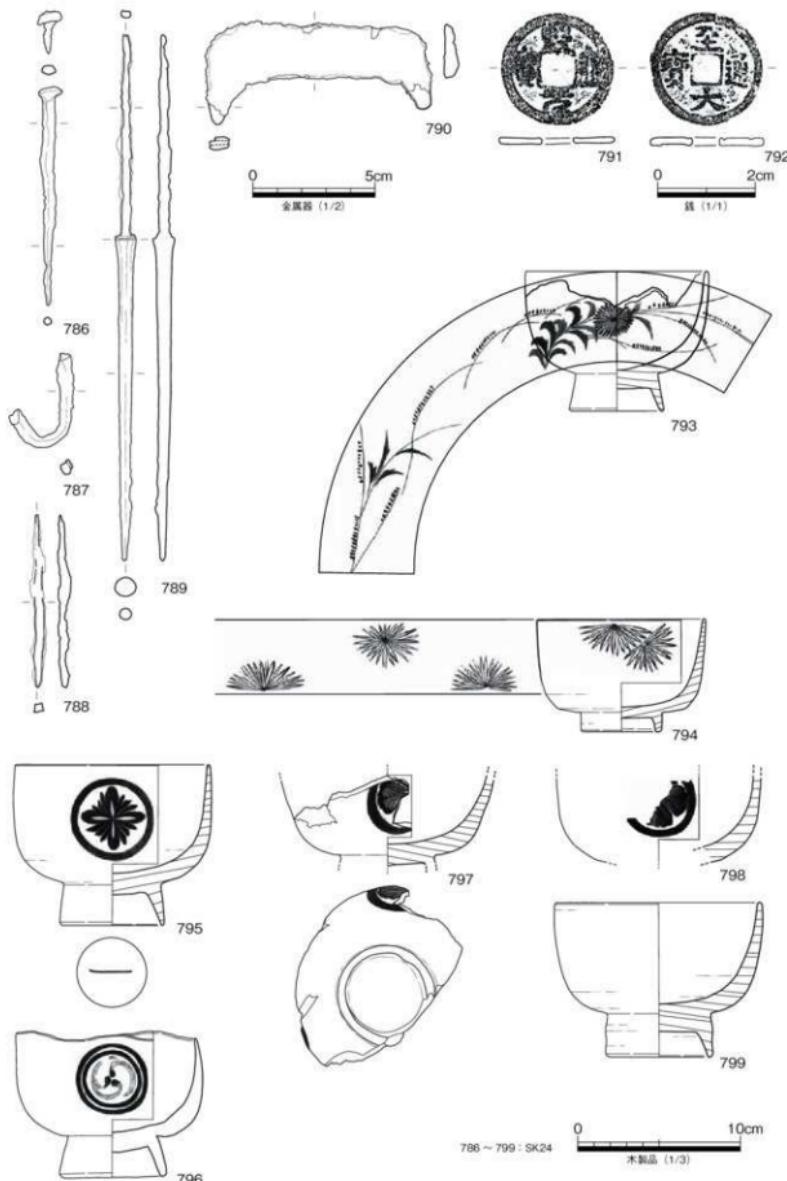
793～991は木製品。793～818は漆器。793～810は椀。高台が高い大振りの丸椀（口径11～13.5cm、器高9～10cm程度）（793・795～802）は、高台内をあまり抉らない丸椀（793・799～801）と高台内を深く抉るもの（795～797、802）に分かれる他、やや小振りの丸椀（口径10cm、器高7cm程度）（794・803・806）、浅めの椀（口径11cm、器高4.5cm程度）（807・808）等に分かれる。793は草花文、794は松葉文を描く。795～798、806～808は家紋を配する。796は2重円に巴文を配する。797・798と807・808は同じ文様と考えられる。811～818は蓋とした。蓋の口径はやまとまりに欠くが、おおむね①12cm程度、②11cm程度、③10cmに分けられ、①、②は大振りの丸椀、③は小振りの椀に対応しよう。811・812は外面に草花文、815は家紋を描く。

819・820は円形の板。容器蓋か。819は片面に赤漆を塗る。820は破片。円形の孔が1ヶ所に残る。821は円形の容器。外面は輪轂引きで多条の沈線を挽きだす。全面に漆を塗布する。822は容器把手。全体に赤漆を塗る。

823～825は曲物側板。傷みが激しく原型を留めていないが、823・824は綴じ紐が残り、825は内側へ丸めるため多条の切れ込み線を施す。826は容器把手。2枚の細長い板を湾曲させて重ね、5ヶ所で固定する。

827～850（方形である836、楕円形である837は除く）は円形の板。容器蓋または底板と考えられる。大別すると、直径は6cm程度（829・830）、8～10cm（828・831～835・844）、13.5～14cm（827・839～842）、21～26cm（843・845～847）、34cm程度（848～850）に分類できよう。摘みのあるもの（827）、小孔があるもの（830・836・837・845・847）、綴じ紐があるもの（828、834）、断面に小孔があり、木釘のようなものを入れて組み合わせるようになっているもの（836・848～850）がある。847は孔に木釘のようなものが差し込まれる。孔があるものは本来は摘みや木釘のようなもの、綴じ紐などが差し込まれたと考えられる。848・849は同一個体。848・849の接合面の断面には対応する位置に小孔があり、両者は連結するようになっている。また、端には直径2.5cm程度の孔があり、そこに栓が差し込まれる。850の断面にも臍孔と考えられる小孔が3ヶ所にある。851～855は栓と考えられる。851・855は円柱状で両端とも平ら、853・854は円柱状で一方の先端を尖らせる。852は方柱で一方の先端をやや尖らせる。

856～859・861～863は折敷脚部。脚の幅は15cm程度（856）、20cm前後（857、858、861）、25cm前後（859、863）に大別できよう。857・858は規格、形態がほぼ同じで、同一個体または揃いのものである可能性が高い。脚の形態には長方形に切り込むもの（857、858、863）、隅丸方形に切り込むもの（861）、装飾的にするもの（856、859）、脚部上部の折敷が取り付く部分に臍穴を持つもの（857、863）、小孔があるもの（856）、切れ込みを入れるもの（857、858）など様々なバリエーションがある。



第89図 SK24出土遺物(8)

856には「物 てわき」の墨書が認められる。859は中心線から線対称の位置である2ヶ所に孔があり、金具などが取り付けられていたと思われる。860は横長の板で長辺のうち1辺に山形の切れ込みを入れる。長辺の中心線付近に溝状の切れ込みを施す。用途不明。

864は箱の一部。「工」字状の形状で、4隅に孔を設ける。長辺の一方の断面に臍孔4ヶ所に設ける。臍孔に木釘を差し込み、他の部品と組み合わせて箱を組み立てると考えられる。全体に黒漆を塗布する。865・866は長方形の板で周縁部に5~6ヶ所に小孔を設ける。調度品の1種か。867は5個の箱の部品が組み合う。底板、側板の周縁には小孔があり、底板と側板を木釘で連結させて組み立てる。

868は木釘か。869・870は楊枝。871・872は横櫛。

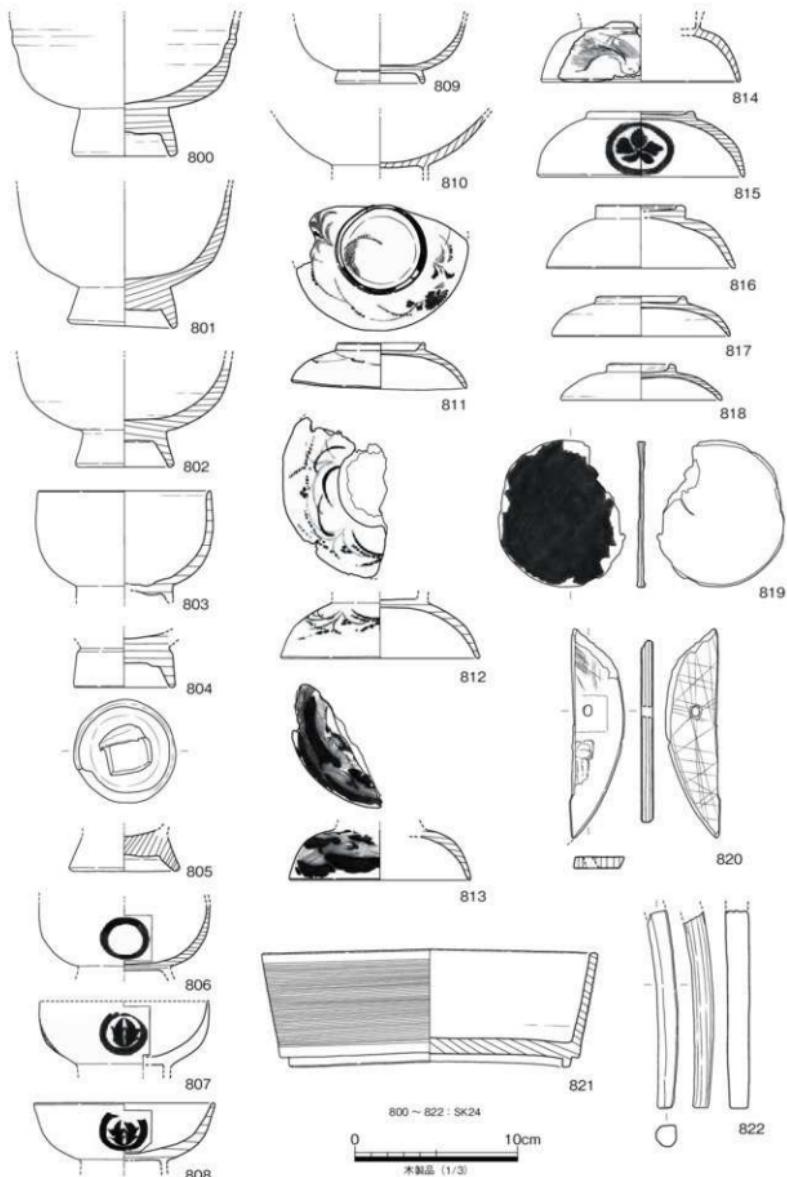
873~877はヘラ状木製品。873・874はヘラ部分が幅広で持ち手部分がやや短め、876・877は細身でヘラ部分と持ち手部分の幅がほぼ同じ、875はその中間の形態である。

878~920は棒状の木製品。SK23でも同様の棒状木製品が出土し、ウリ種子や松葉、人糞と考えられる堆積物の存在からトイレ状遺構に伴うチュウ木と判断したが、この土坑からはこれら堆積物はなく、漆器、折敷を多く伴うことから箸と考える。図化した43点のうちおおむね21~22cmが22点、23.7~25.1cmが19点である。図化していないものも含めて長さにはある程度の規格性が認められる。SK23のチュウ木も同様のため、規格品として入手後用途により使い分けられたのかもしれない。881・906・920には先端に焼け焦げ痕跡がある。

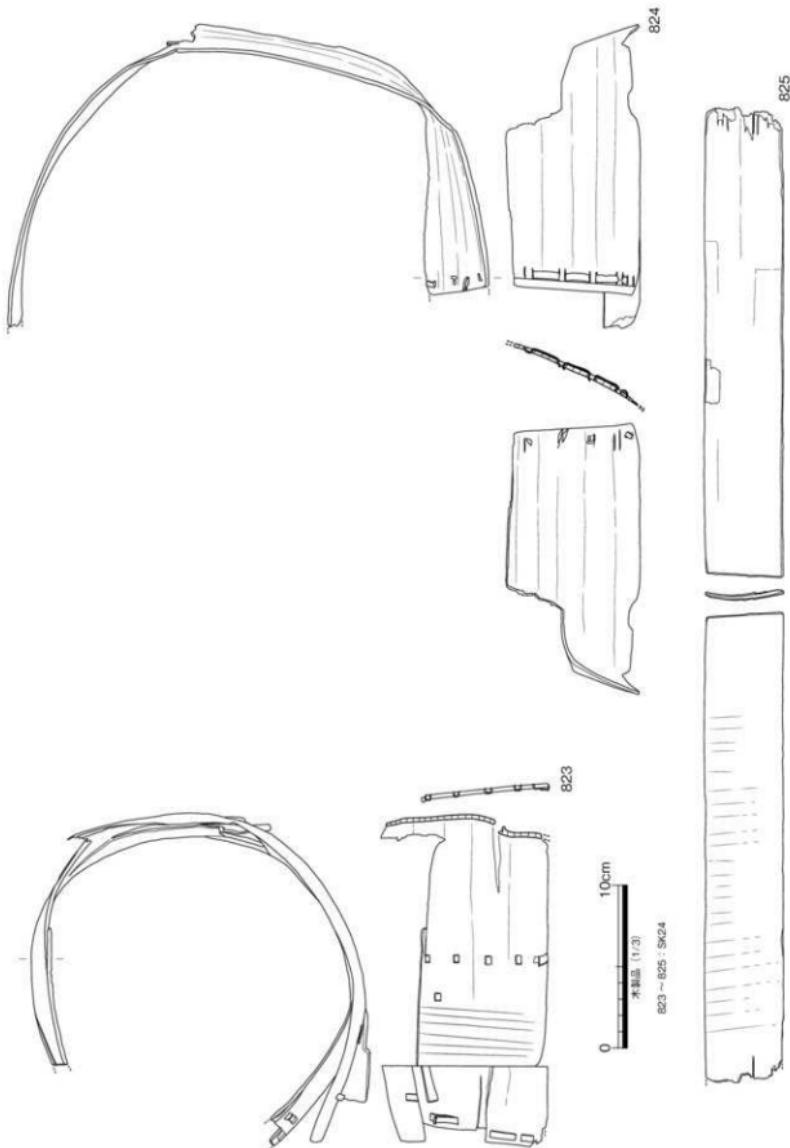
921~925は人形頭部。921は憤怒の形相である。頭頂部から後頭部にかけて毛髪を植えたと考えられる孔がある。頭下部には孔があり、頬部などを差し込んだと考えられる。922は921と対照的に満面の笑みを湛えている。頭頂部は墨で線が3本描かれ、頭髪を表すと考えられる。頭下部に孔はない。後頭部下部に小孔がある。923は平面的な顔部分でわずかに目と鼻を掘り込む。白い顔料が残る部分があり、顔料で顔を描いていたと考えられる。頭頂部には黒い墨が部分的に残る。頭下部は孔を設け、孔内部には棒状の木が折損していた。924は923同様顔は平面的で彫り込みによりわずかに目、鼻、口を表現する。前頭部から後頭部にかけてと頭頂部に小孔が設けられ、頭髪を埋め込んだと考えられる。頭下部には921、923同様孔が設けられている。925は形状から人形頭部と考えた。頂部を構状にし、墨痕がわずかに残る。顔部分の小孔は用途不明。926は人形の耳か。927は将棋の駒。表に「歩兵」、裏は「と」と書かれる。928は舟形木製品。船尾に5孔・4孔が2列に、合わせて9孔が設けられ、船底部には差込用と思われる幅3cm程度の溝が2条掘られる。

929~950は木簡。929~938は上部両側縁に切れ込みを入れる。荷札木簡と考えられる。下部は尖らせるもの(929)、両側を斜めに切り落とし中央部分は直線的に整えるもの(930~933)、切れ込みを入れるもの(931)がある。929・934は文字は認められず、938は薄く墨痕が残るものとの判読できなかった。その他の木簡についても墨痕は薄く、判読は難しかった。939は上部に切れ込み、下部は尖らせる。墨書は確認できなかつたが形状から荷札木簡と考えられる。941~946は切れ込みを持たない。943・945は文字は確認できなかつたが、形状から木簡として使用した可能性があろう。947・948は小片であるが、墨痕が認められる。949は板状で端部に孔がある。わずかに墨痕が薄く残る。950は板状木製品に墨書が書かれる。951は木簡をヘラに転用したと考えられる。墨痕は残るが、内容は不明である。墨書の内容については第5章第2節第37表及び観察表を参照されたい。

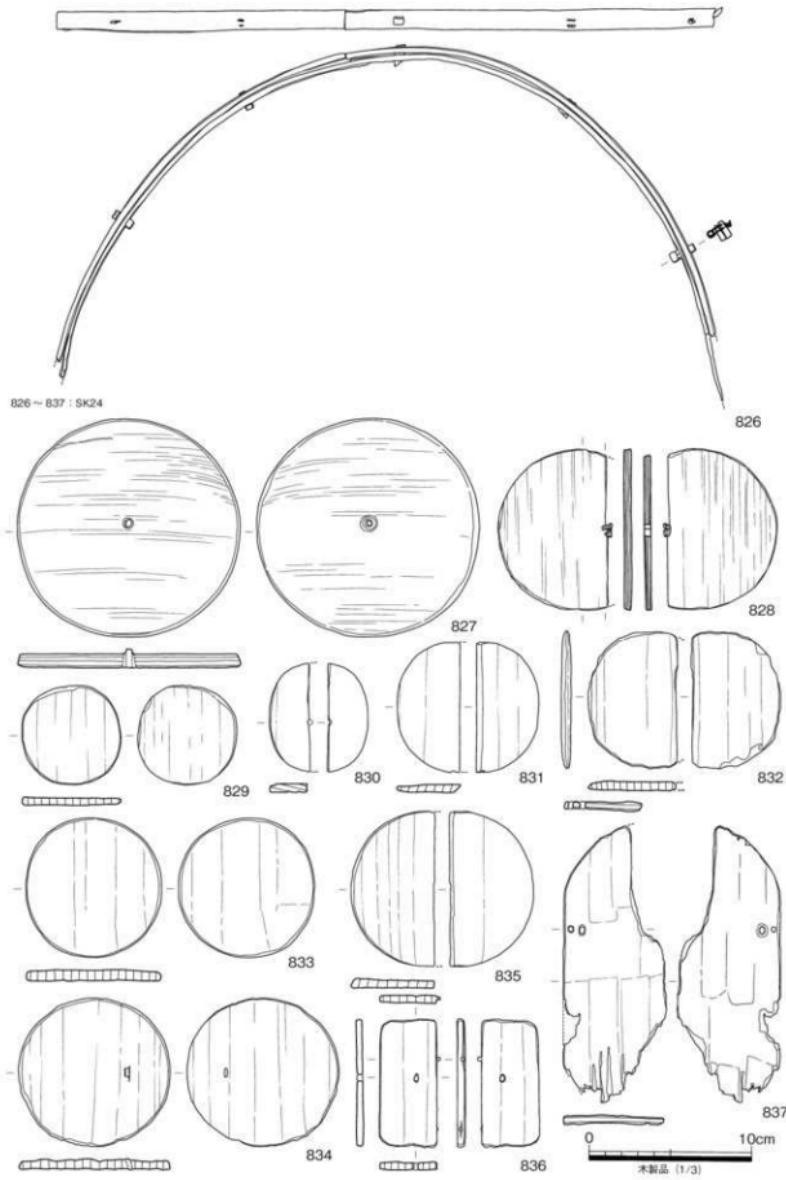
952~968は下駄。952~961は構造下駄。下駄の歯を嵌め込む構造で、下駄の上面に前後2ヶ所に方形の孔を施し下駄の歯をはめ込む。歯の臍が下駄の表面に見える露卯下駄である。下駄の歯を嵌め



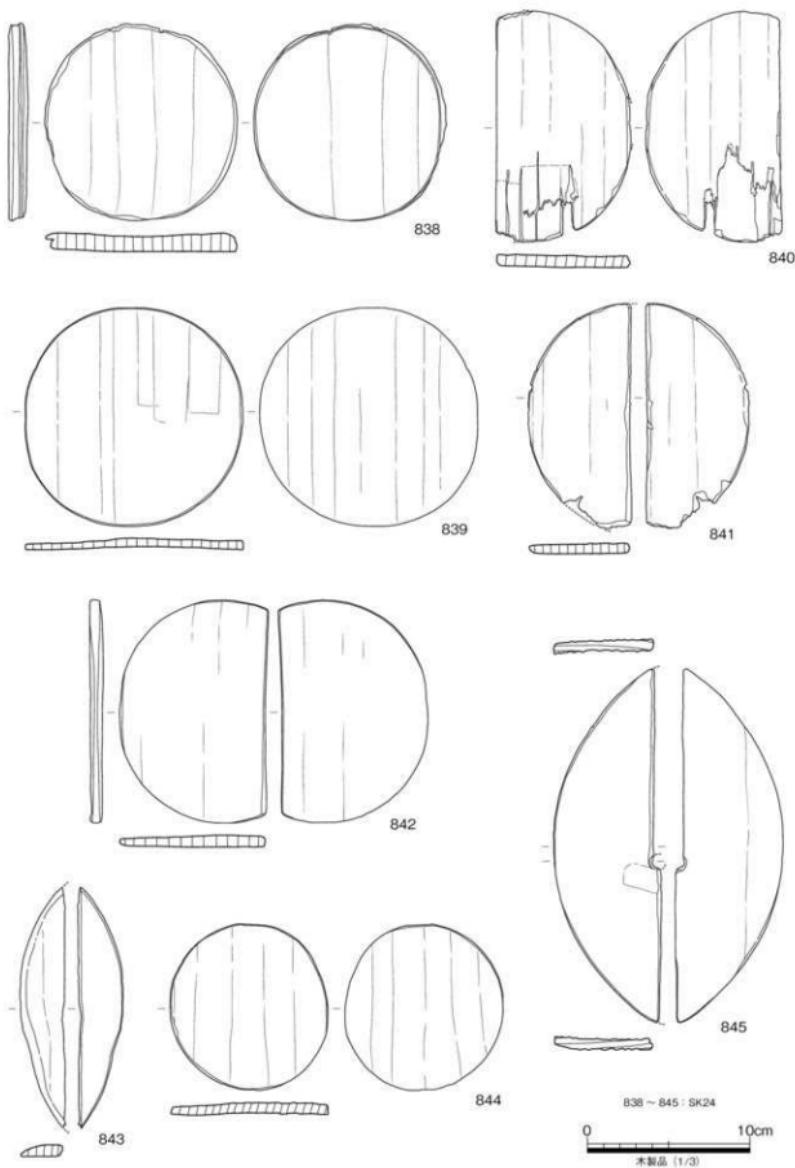
第90図 SK24出土遺物(9)



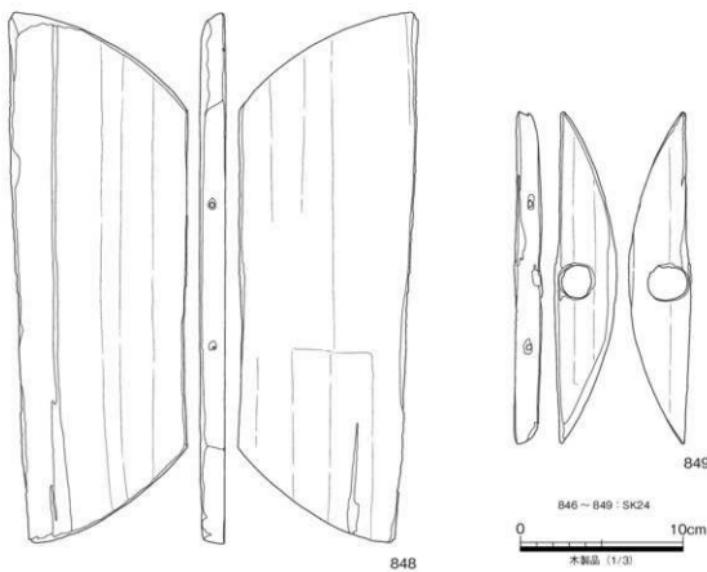
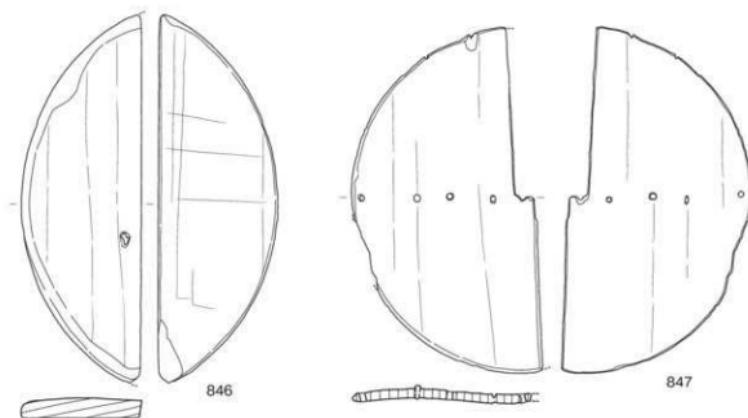
第91図 SK24出土遺物(10)



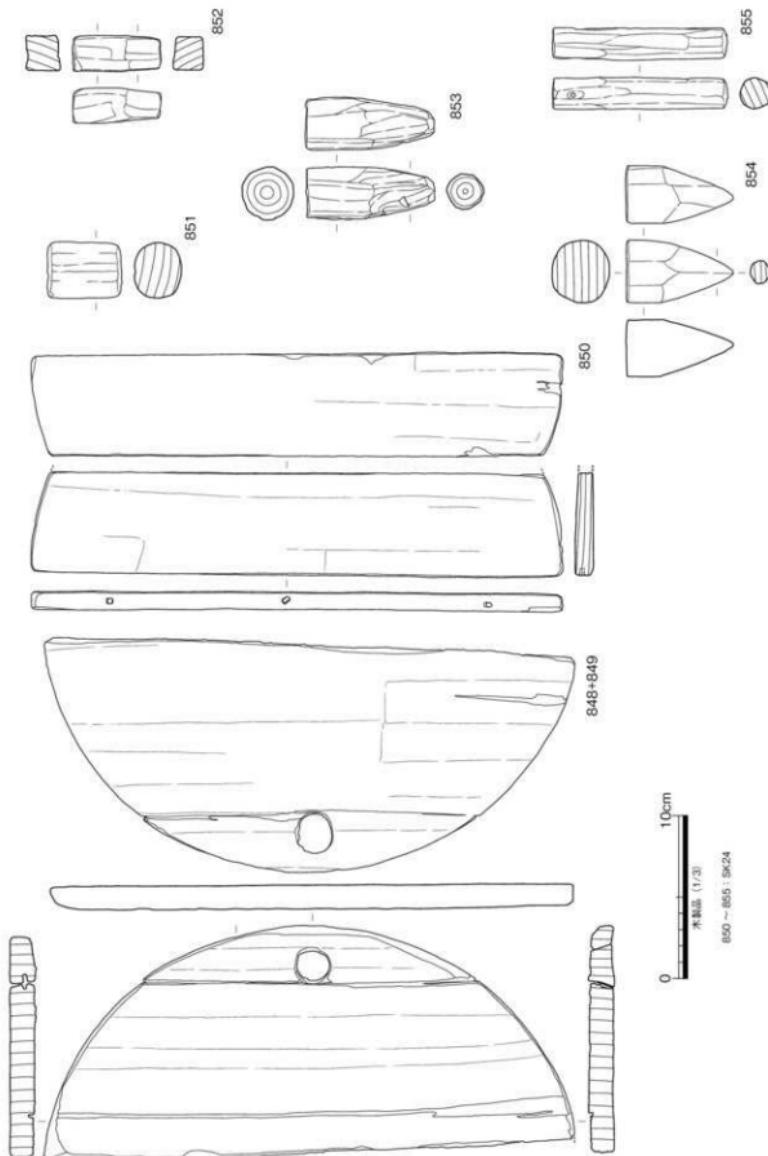
第92図 SK24出土遺物(11)



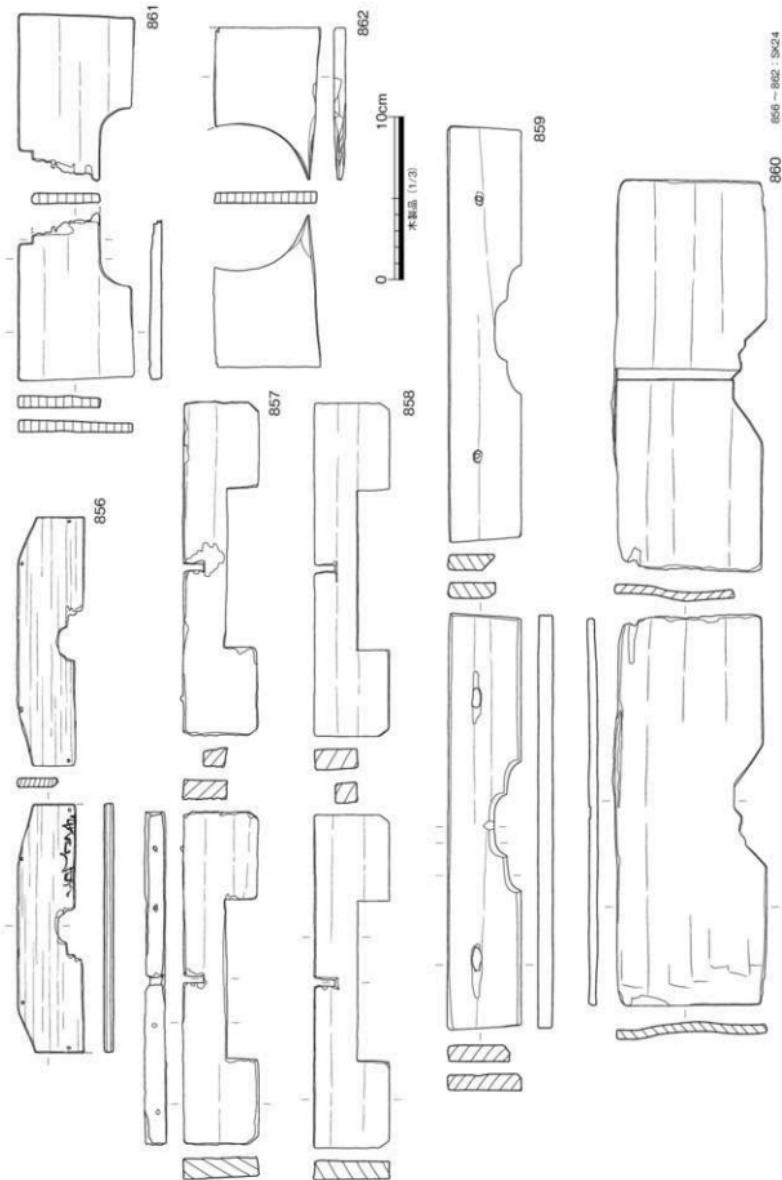
第93図 SK24出土遺物(12)



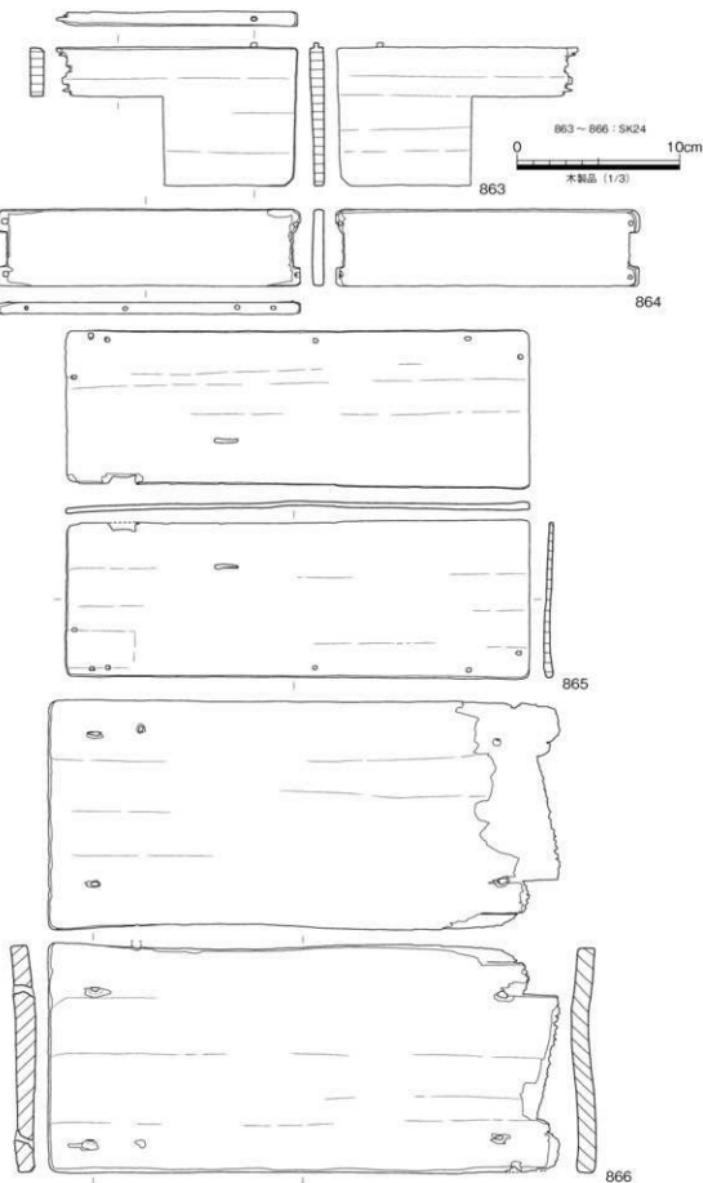
第94図 SK24出土遺物(13)



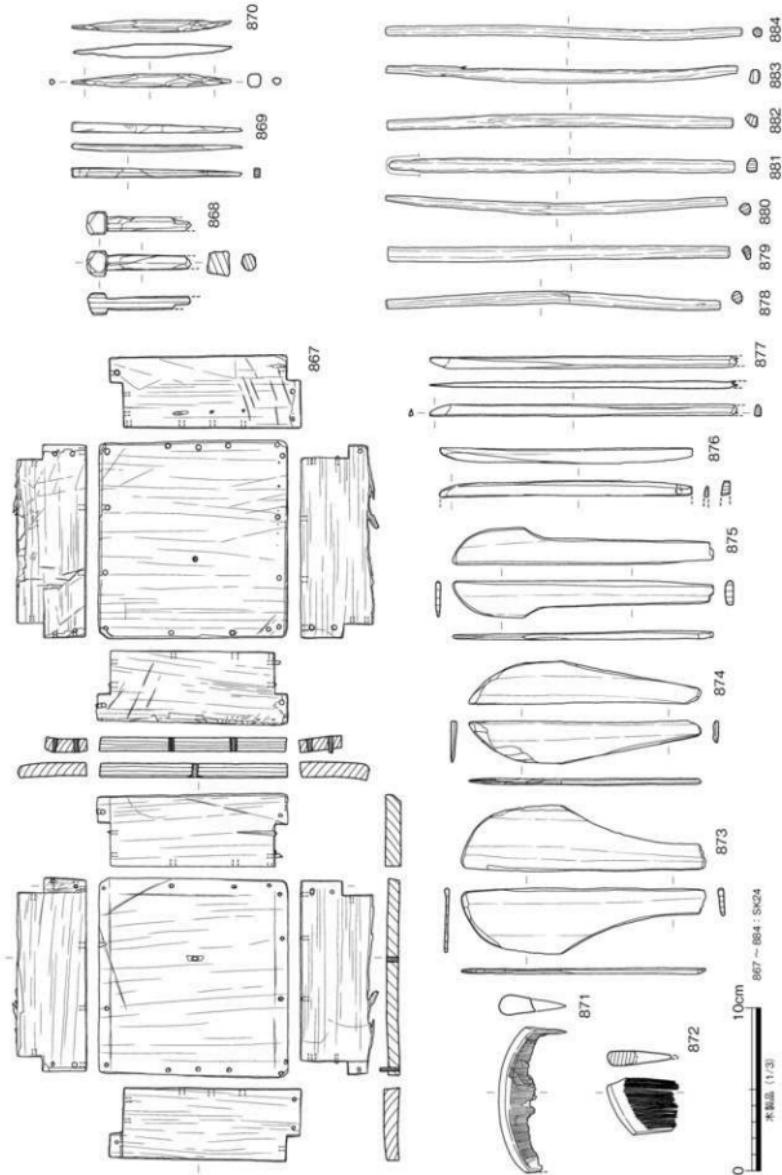
第95図 SK24出土遺物(14)



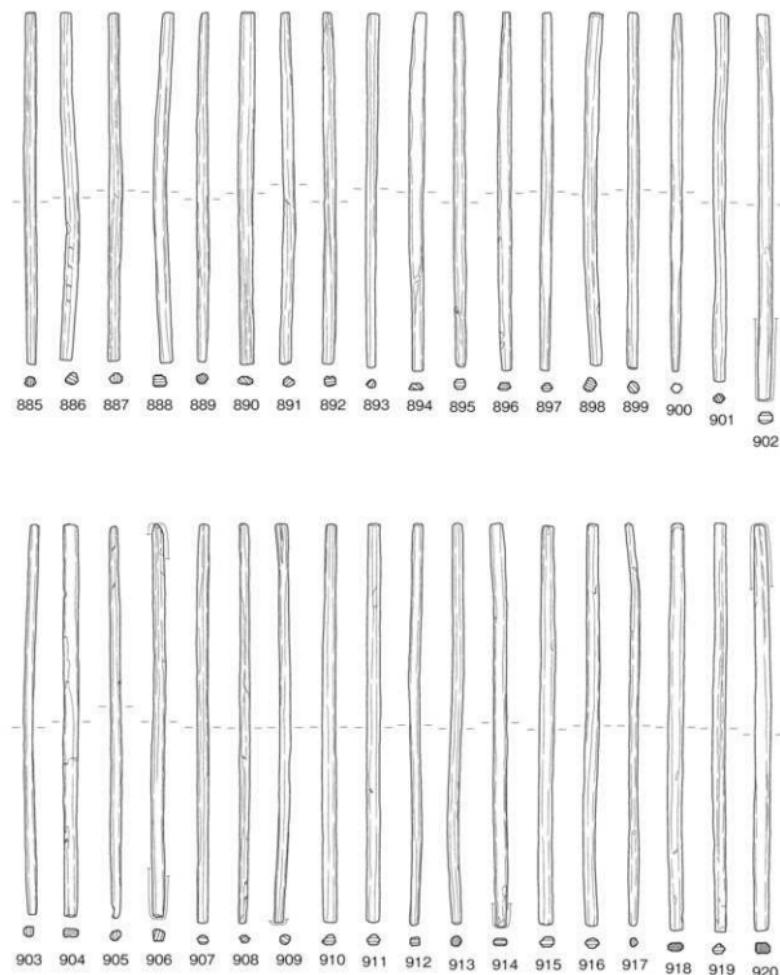
第96図 SK24出土遺物(15)



第97図 SK24出土遺物(16)



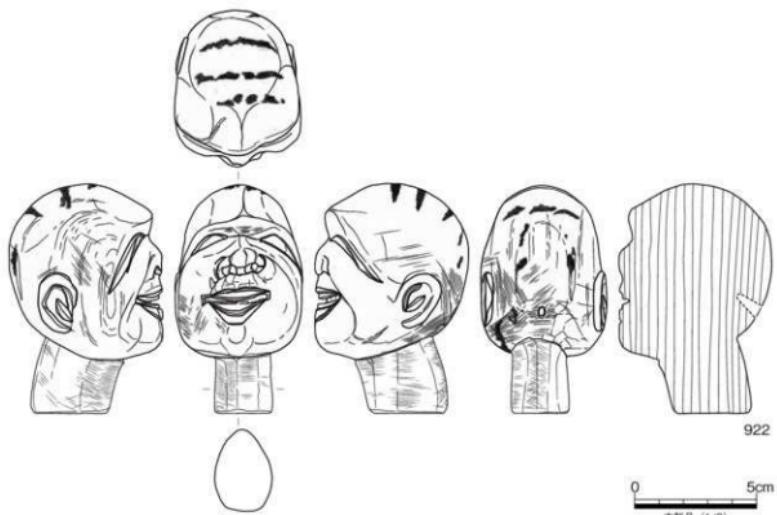
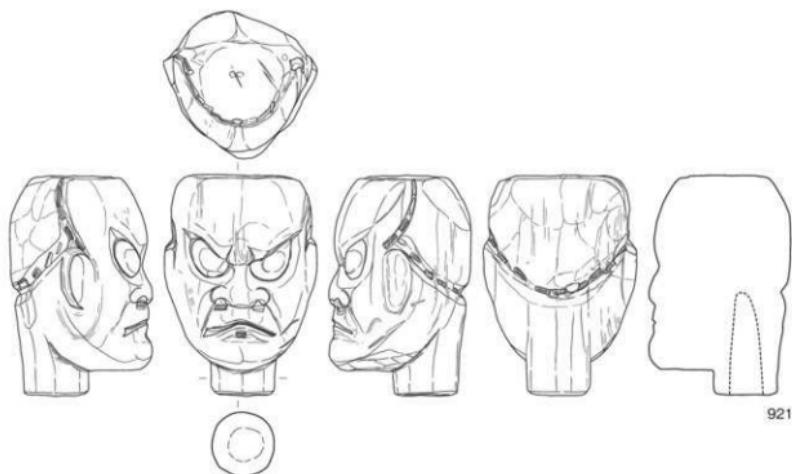
第98図 SK24出土遺物(17)



0 10cm
木製品(1/3)

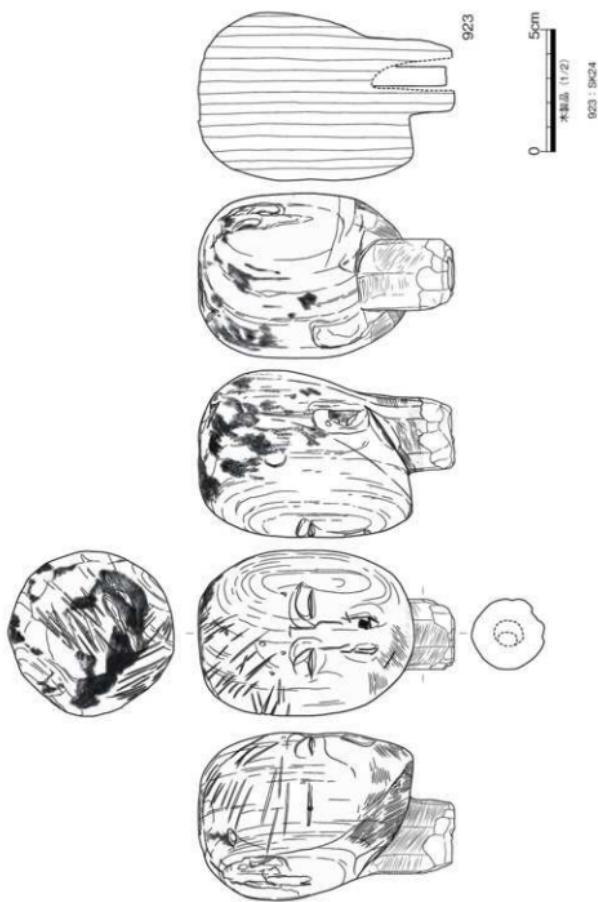
885～920 : SK24

第99図 SK24出土遺物(18)

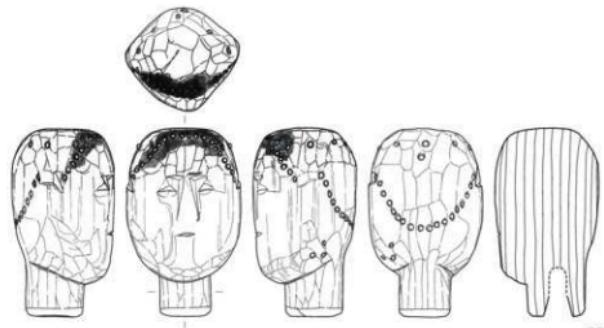


木製品 (1/2)

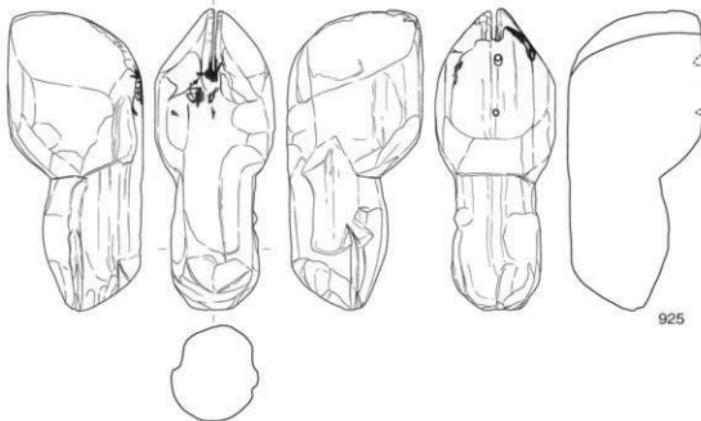
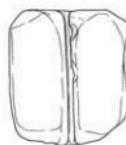
第100図 SK24出土遺物(19)



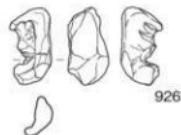
第101図 SK24出土遺物(20)



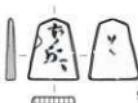
924



926

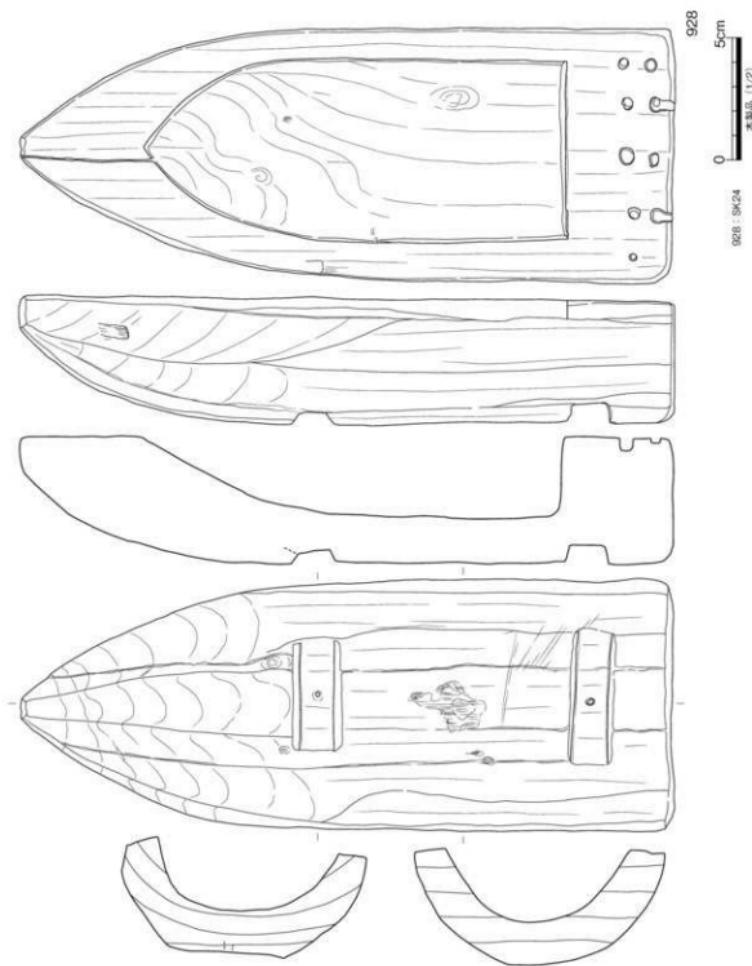


927

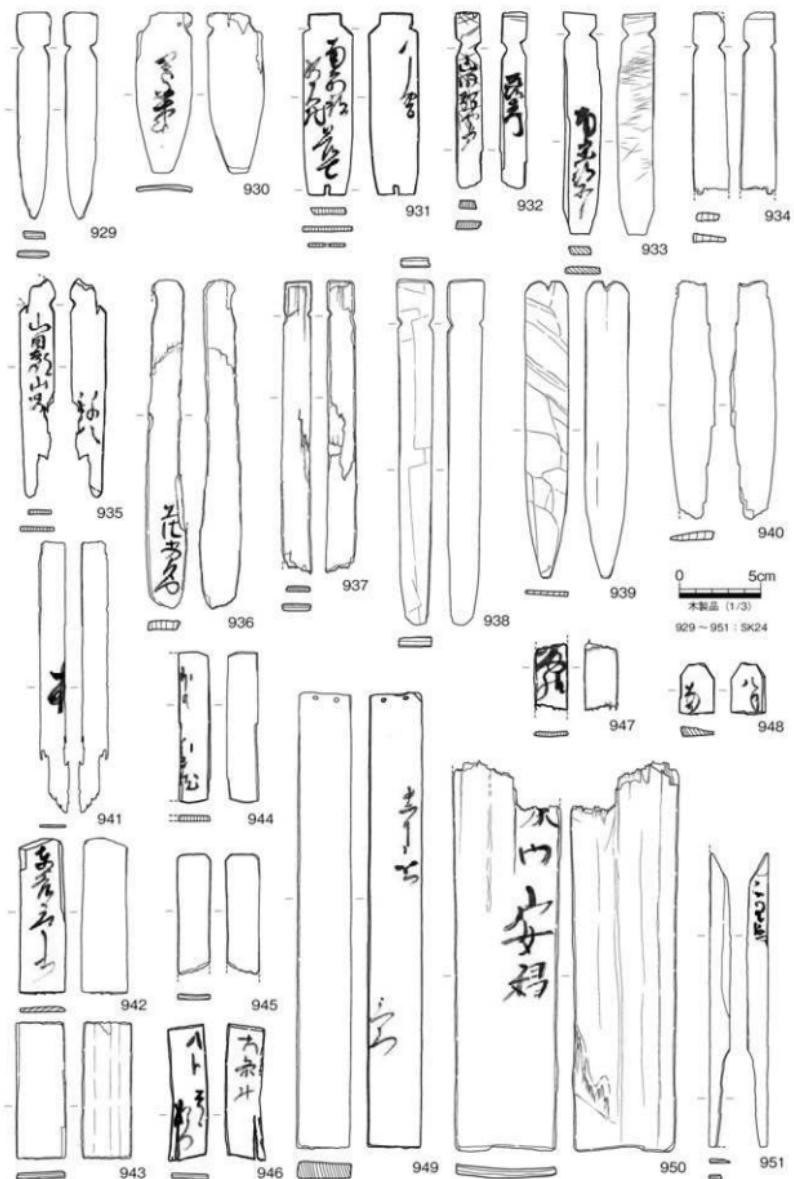


924 ~ 927 : SK24
0 5cm
木製品 (1/2)

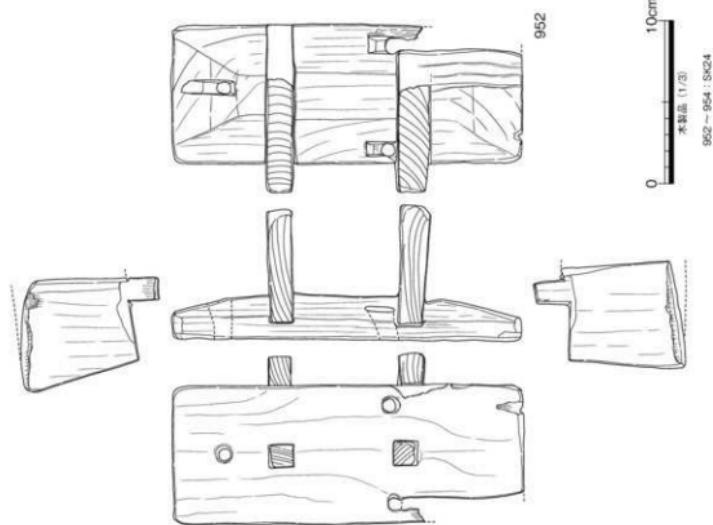
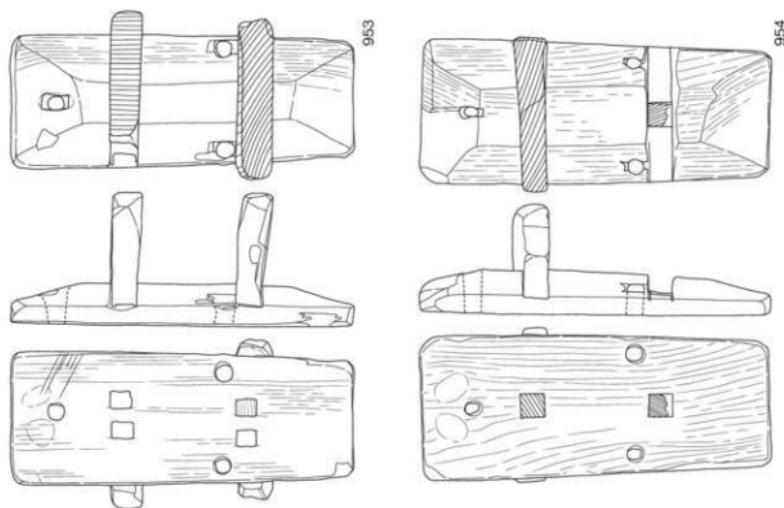
第 102 図 SK24 出土遺物 (21)



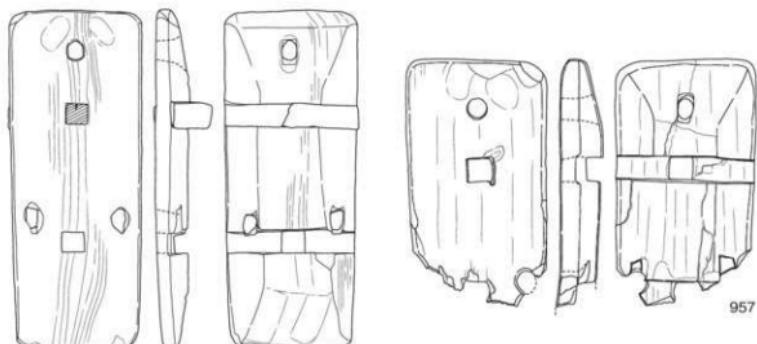
第103図 SK24 出土遺物 (22)



第104図 SK24出土遺物(23)

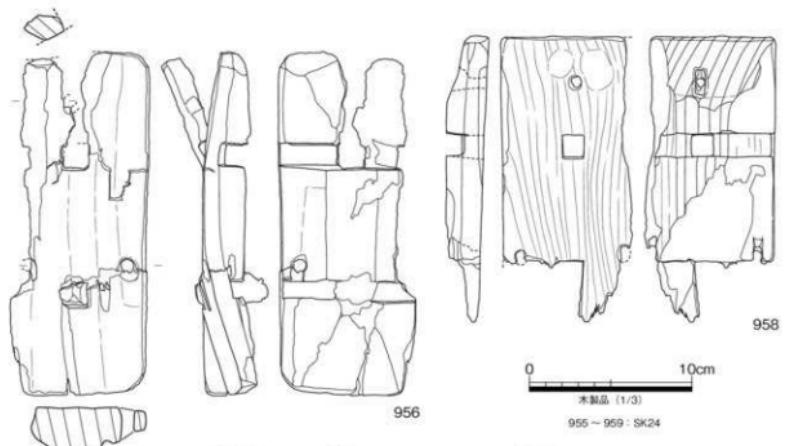


第105図 SK24出土遺物(24)



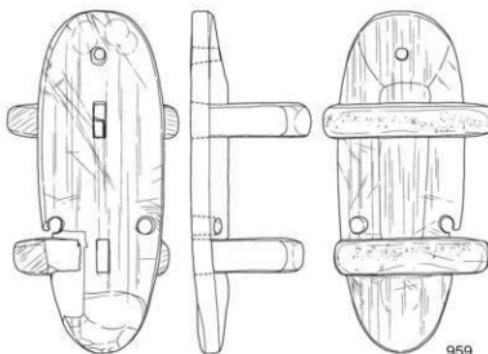
955

957



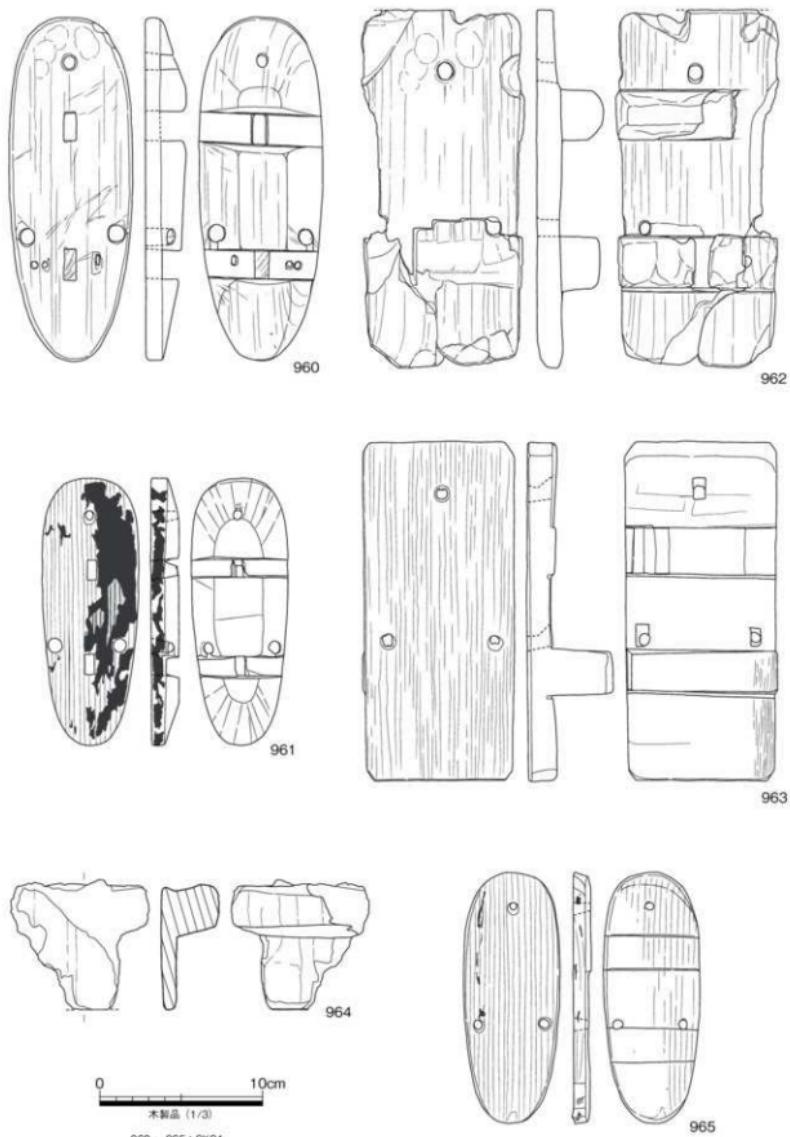
0 10cm

木製品 (1/3)

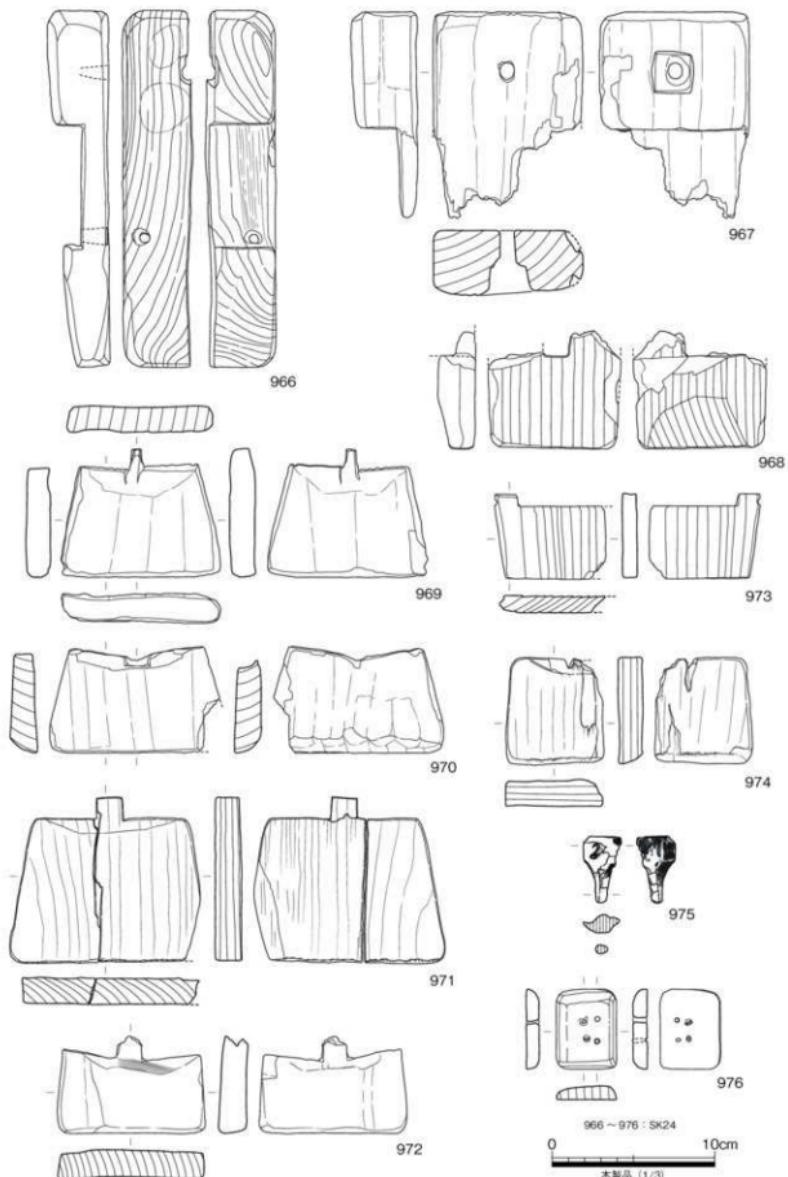


959

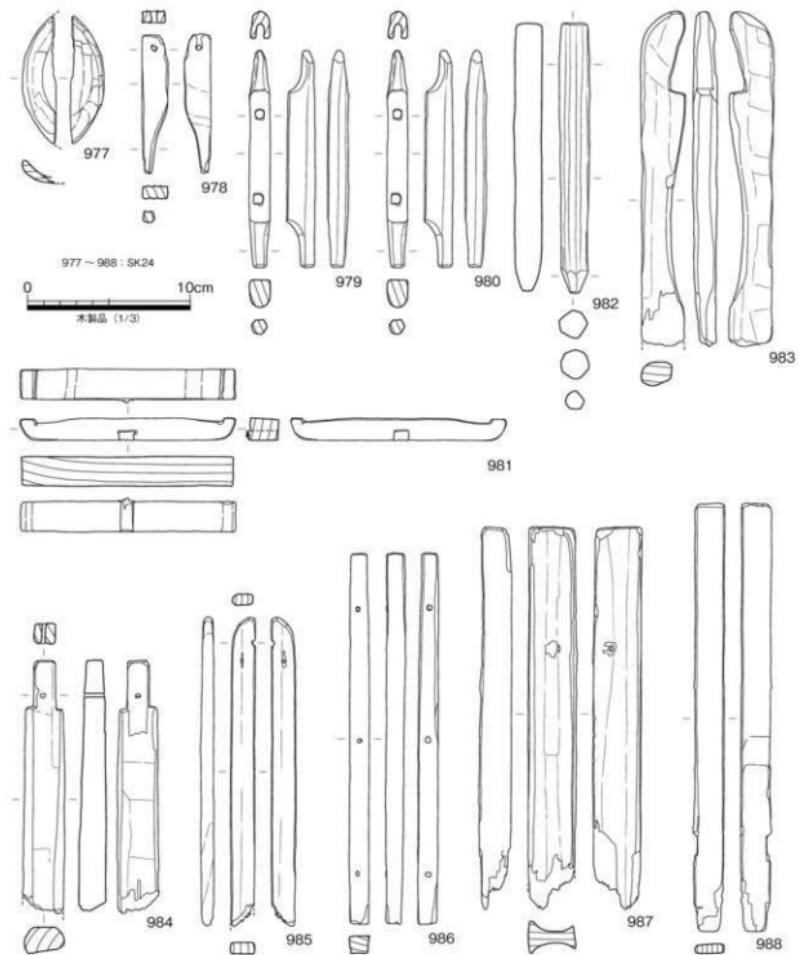
第 106 図 SK24 出土遺物 (25)



第107図 SK24出土遺物(26)

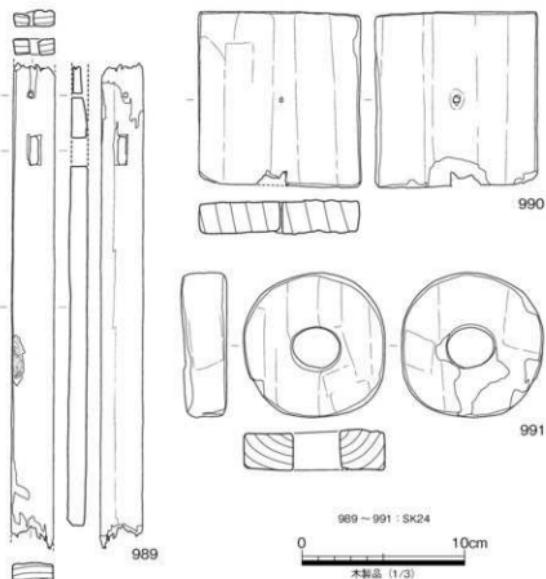


第108図 SK24出土遺物(27)



第109図 SK24出土遺物(28)

込む臍孔は歯1個に付き1つであるものが9個体で、953のみ下駄の歯1個に付き2つの臍孔を持つ。962～968は1つの材で下駄の台と歯を作り出す一本下駄である。962～965は下駄の歯の位置が台の中央付近に付く連歯下駄、966～968は下駄の歯が前後とも端まで及ぶ削り下駄である。歯の形態にかかわらず下駄の形態は大半が長方形で959～961・965のみ楕円形である。長さはおおむね21cm前後、961が15.4cm、965は11.4cmである。幅は方形で構造下駄がおおむね8.2～8.9cm、方形で連歯下駄が



第 110 図 SK24 出土遺物 (29)

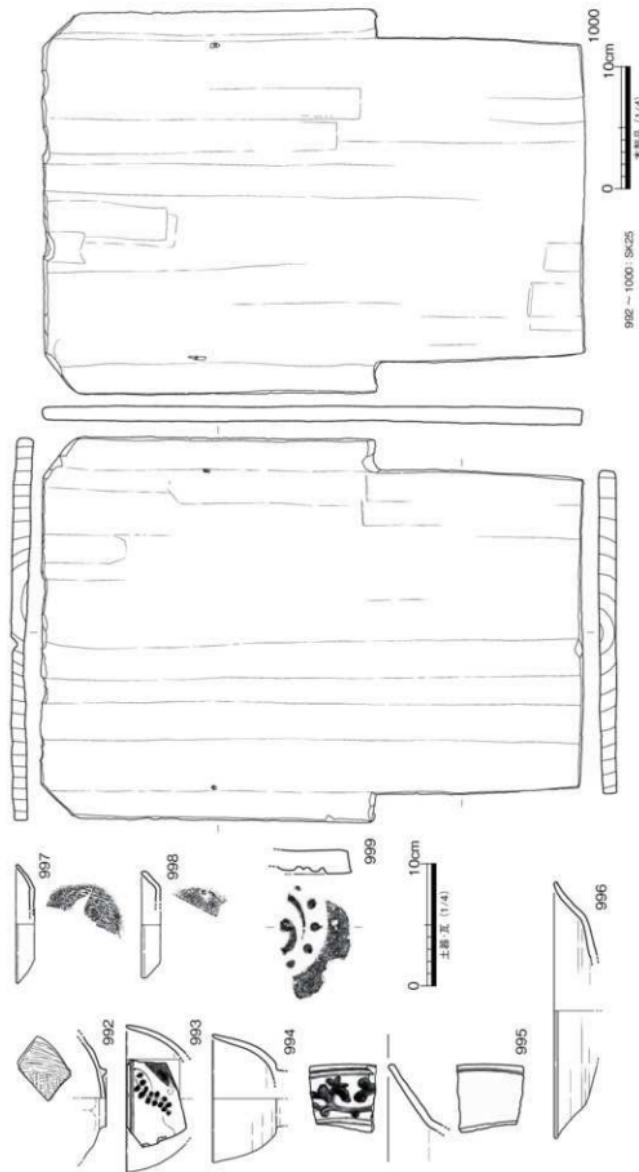
9.2 ~ 9.8cm、剥り下駄が9.2cmで構造下駄がやや小さい傾向にある。楕円形の通常サイズの下駄(959、960)は7.6 ~ 7.8cmでやや細身の傾向がみられる。961は漆がわずかに残存する。969 ~ 974は構造下駄の歯である。おおむね本体の差込と合う大きさで、駄と台に嵌め込んだ圧痕を残す。970のみ駄が残らず、駄を作らない陰卯下駄の歯である可能性がある。

975 ~ 990は用途不明品。975は漆が付着する。976は方形に加工した板で中央付近4ヶ所に穿孔する。977は円形の容器か。979・980は同じ形状である。方柱状の材の両端を尖らせ、尖らせない部分の両端付近に貫通しない孔をあける。991は引き戸の戸車か。

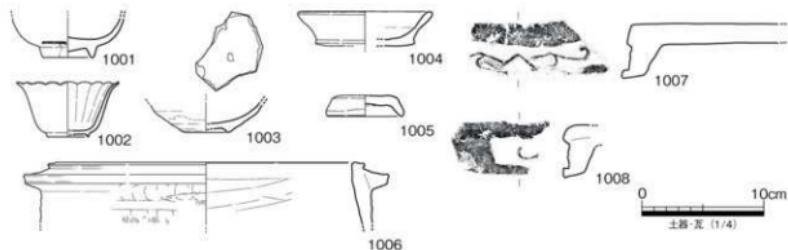
出土遺物は17世紀前半、17世紀後半～18世紀前半のものがあるが、17世紀後半の遺物が完形品が多く量も多いこと、漆碗の顔料の特徴から木器の年代が17世紀後半と考えられるため、遺構の時期は17世紀後半と考えられる。18世紀第3四半期～第4四半期前半の遺構ではあるが、高松城跡（丸の内地区）SK09〔「高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）2003.3 香川県教育委員会 財團法人香川県埋蔵文化財調査センター」及びこれと同一遺構である高松城跡（松平大膳家中屋敷跡）SK123（香川県弁護士会会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 2002.12 高松市教育委員会 香川県弁護士会）とは、漆器や折敷脚、箸などの食膳具や貝類、獸骨などの食物残滓が多く出土するなど出土状況や出土内容が類似し、その性格も同様のものである可能性が考えられよう。

SK25 (第 81・111 図)

SK24の北側で検出した落ち込みである。大半は搅乱により消失し、遺構のラインは北側に一部残るのみである。規模・形状は不明、深さ61cmである。埋土はおおむね灰色シルトである。SE06や搅乱で



第111図 SK25出土遺物



第112図 SK24・SK25上面出土遺物

分断され別遺構としたが、SK24と連続する遺構である可能性もある。

992は瓦器碗。混入と考えられる。993～996は肥前系磁器。993・994は碗。993は外面に葡萄文を描く。994は青磁碗。高台部は無釉。995・996は大皿。997・998は土師質土器皿。997はA V形式、998はA III形式である。999は軒丸瓦。

1000は木製品。金隠し。上部両脇にそれぞれ孔がある。

出土遺物は17世紀後半を主体としたもので、SK24ほぼ同じ時期と考えられる。

SK24・SK25上面出土遺物(第112図)

SK24・SK25上面に掘り込まれた搅乱を除去し、遺構検出中に出土した遺物である。

1001・1002は肥前系磁器碗。1001は高台部は無釉。1002は型打ち成型を併用したもので、口縁部を輪花状にする。1003は肥前系陶器皿。内面に胎土目積みを残す。1004は土師質土器皿。低部外面にはヘラ切り痕を残す。1005は焼塙蓋。手捏ねによる成形で在地産である。1006は土師質土器羽釜。9世紀代。1007・1008は軒平瓦。1007はSD04出土37～43と同范である。

⑤性格不明遺構

SX03(第113図)

調査区西端、中央付近で検出した浅い落ち込み状の遺構である。西側は調査区外へ延びる。検出長5.5m、幅2.1m以上、深さ20cmで砂層、砂礫層が堆積する。埋土中から黒色土器碗・土師質土器・陶器片が出土した。

1009は黒色土器碗。高台部は剥離する。1010・1011は土師質土器。1010は甕。1011は把手付鍋。

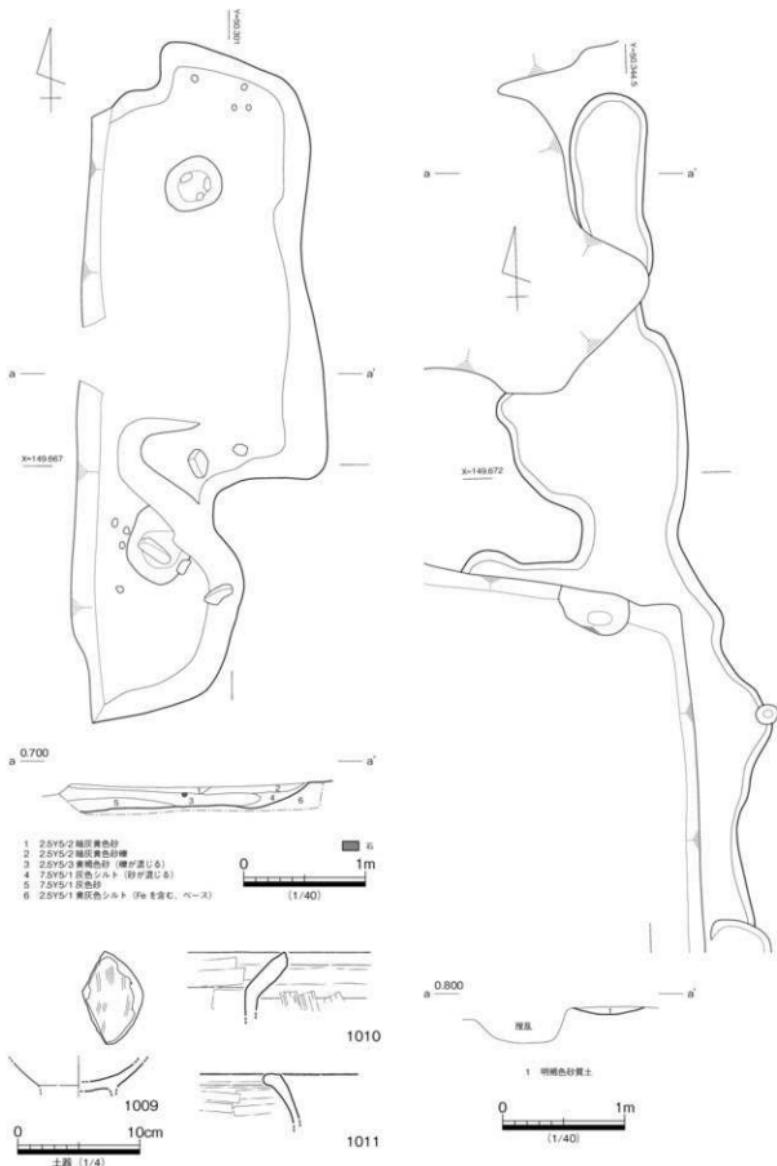
遺構の時期は1011の時期である17世紀中葉頃と考えられる。

SX28(第114図)

調査区東部で検出した溝状の遺構である。検出長6.8m、幅0.6～1.6m、深さ8cm、埋土は明褐色砂質土である。搅乱を挟んで南側で延長部分を検出したが、調査区中央付近で搅乱により消失している。埋土中からは土師質土器小片など土師質土器片が出土した。

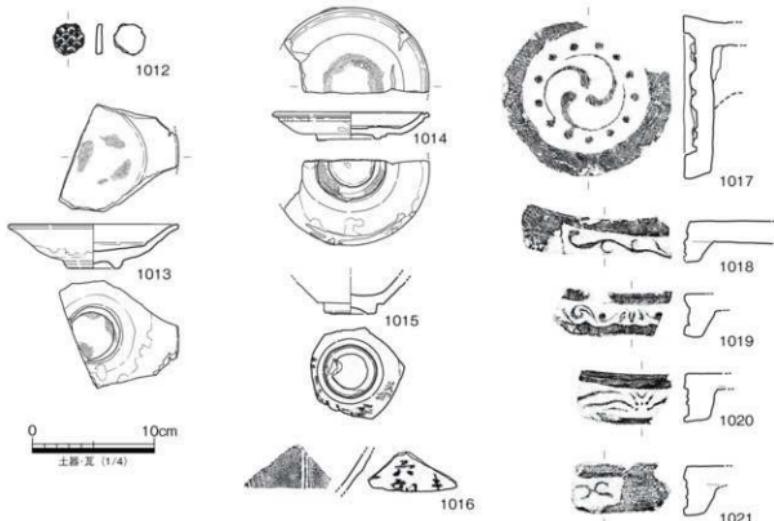
遺構の時期は不明である。

⑥遺構外出土遺物(第115図)



第113図 SX03平・断面図、出土遺物

第114図 SX28平・断面図



第115図 遺構外出土遺物

1012はSD02-1からSD05付近までの擾乱を除去中に出土した。肥前系磁器を円盤状に打ち欠いたもの。1013・1014は全面掘削を行う前に実施した土層確認のためのトレンチ調査で出土したもので、SD04から出土した可能性が高い遺物である。ともに肥前系陶器皿。見込み・高台疊付部に砂目積み痕を残す。17世紀中頃。1015はSD05より東側の擾乱で出土した。瀬戸美濃の天目碗。17世紀中頃。内外面に鉄軸を掛ける。外面体部下半に墨書がある。1016はSD02-1より西側を精査中に出土した。土師質土器擂鉢である。17世紀中頃。外面に「六親」と読める墨書がある。

1017はSD02-1からSD05までの擾乱除去および遺構精査中に出土した軒丸瓦。1018～1021は軒平瓦。1018はSD05より東の擾乱除去中。1019はSD02-1より西側の擾乱除去中、1020は調査区西側側溝掘り下げ中、1021はSD02-1からSD05までの遺構精査中に出土した。